

せい か ほう まさ
星 火 方 正

ほうまさ
～燎原の火は方正から～

『満洲移民の加害と被害』
「満蒙開拓平和記念館」を訪ねて
満蒙開拓団・私が歩んできた道
私が体験した死の逃避行
高社郷集団自決の悲劇を繰り返さないために

—終戦の事実を告げられなかったための悲劇—

渡辺 一枝
新谷 陽子
石橋 辰巳
中島 多鶴
篠原 孝



開拓記念碑、長野県下伊那郡松川町に立つ（後方は南アルプス）
「満洲」から引き揚げ後、再度ここで開拓した人たちの苦難の歩みを記念している

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第 18 号） ～燎原の火は方正から～

目 次

『満洲移民の加害と被害』	渡辺 一枝	1
「満蒙開拓平和記念館」を訪ねて	新谷 陽子	5
下伊那への旅―増野と福島小高への思い	長谷部 郁子	11
満蒙開拓平和記念館を見学して	酒井 旭	13
満蒙開拓平和記念館訪問の旅に参加して	石田 和久	15
満蒙開拓平和記念館を訪ねて	塚田 恵子	16
「被害」と「加害」の交差する満蒙開拓団	鈴木 敏夫	18
「下伊那の旅」参加者の発言を聞いて	凌 星光	19
.....		
満蒙開拓団・私が歩んできた道	石橋 辰巳	21
私が体験した死の逃避行	中島 多鶴	25
.....		
母の愛は永遠―「中国の母親の大きな情愛」と題した展示会の報告	石 金楷	35
.....		
わたしの方正之路 ドキュメント『10日間だけの祖国』	奥村 正雄	36
4人で作ったドキュメント『10日間だけの祖国』	飯白 栄助	38

“厳冬の” ハルピン・方正	吉川 雄作	40
.....		
高社郷集団自決の悲劇を繰り返さないために —終戦の事実を告げられなかったための悲劇—	篠原 孝	42
歴史記憶の共生と研究実践に関する国際的対話の試み 国際シンポジウム「東アジアにおける歴史記憶の共生と研究実践」の開催	南 誠	50
「満蒙開拓」五題	寺沢 秀文	57
“満州疎開”の開拓団—東京都満州開拓団の送出特質—	高橋 健男	66
.....		
——「方正友好交流の会」へのお誘い——	編集部	71
書籍案内	〃	72
参考記事掲載	東京新聞 信濃毎日新聞 南信州新聞	73
第 18 号会報編集を終えて	森 一彦	80
報告 編集後記		81

『満洲移民の加害と被害』

渡辺 一枝

「ハルビンに行こう」

私は1945年1月に、ハルビンで生まれた。翌年秋に母に背負われて、引き揚げてきた。だから私に生地記憶は無い。子どもの頃の私に母は、ハルビンのことや父のことをたびたび語った。

物心ついてからの私は、いつどこで死んだか判らない父を語る母を、ハルビンでの暮らしを懐かしげに語る母を、疎ましく思うようになっていた。母の言葉に耳塞いでいたその頃の私は、たぶん、聞き分けの無い子どもだった。根こそぎ動員で父が現地招集された時、私は6ヶ月の赤ん坊だった。なぜ父を止めなかったかと母を恨み、侵略地を懐かしむ母を許し難くも思っていたのだ。

母の言葉に素直に耳を傾けるようになったのは、私の子どもたちに母が語るのを聞くようになってからだ。母が孫たちに、彼らの“おじいちゃん”のこと、おじいちゃんと暮らしていた日々のことを語るのを傍らで聞きながら、頑だった私の気持ちは少しずつほぐれていったのだ。

私は母に自分史を書いて欲しいと頼み、またいつかハルビンに一緒に行こうと誘ってもいた。母も頷き、仕事を退いたらと答えていた。だが、果たせないまま母は逝った。母の枕辺で私は、「ハルビンに行こう」と思った。

初めてのハルビン行

初めてのハルビン行は、母と同世代の二人のおばさんを誘った。親戚ではないが、親しくしていたおばさんたちだった。おばさんたちの夫と父は勤め先が一緒に、ハルビンに居た時から、また引き揚げてきてからも、家族ぐるみで親しく付き合っていた。おばさんたちのお連れ合いのおじさんたちは、私が遊びにいけば、よく父のことを話してくれた。おじさんたちも、それぞれ数年前に亡くなっていた。ハルビン行は、おばさんたちにとっては「懐かしい地への再訪」、私には「父母が暮らした街を肌で感じる」旅になる筈だった。

おばさんたちは通訳の助けを借りながら、懐かしい場所を探し当てるのだった。そして私は、おばさんたちの話から、いま目にしている光景ではなく父母が暮らした頃のその場所を想い描

いた。そんなふうにしてハルビンを歩くうちに、かつておばさんたちが隣り合って住んでいた家を見つけ出すことができた。「あった、あった」と歓声を上げるおばさんの声に辺りの人たちが集まってきた。外の騒がしさに、家の中からおばあさんが顔を出した。おばあさんは通訳の説明を聞くと「あなたの家だったところなんだから、中に入ってゆっくりしていきなさい」と言って、私たちを招き入れてくれた。

おばあさんは、突然の珍客に迷惑なそぶりを微塵も見せず、そればかりか「よく来たね」と言って笑顔でお茶をふるまってくれた。

同行のおばさん二人は、涙が溢れて声も出ない。私も胸がいっぱいだったが、これだけは伝えたいと思い、言った。

「私たちの国は、あなたがた中国の人たちに大きな過ちを犯しました。本当に申し訳ない思いで一杯です。それなのにこんなに温かく迎えて下さって、ありがとうございます」

おばあさんは、笑顔でこう答えたのだった。

「そんなことは、あなたたちのせいではないですよ。一部の日本人が悪かった。軍部が悪かったんですよ。あなた達も犠牲者だったんですよ。ここはあなた達には懐かしいところなんだから、ゆっくりしていらっしゃい。何度でも訪ねていらっしゃい」

♪わたしゃ 16 満洲むすめ♪

二人のおばさんに同行をお願いして行ったときは、訪ねたのはハルビンだけだった。その後私はハルビンだけではなく、旧“満洲”各地を幾度となく訪ねた。北京、あるいは大連から国内便を乗り継いで行くことが多かったが、列車で北上したことも何度かある。また、大阪港から貨物船で大連まで行ったこともあった。

北京からハルビンまで列車で行った、ある冬のことだ。コンパートメントの軟臥車で同室の人は、3人とも中国人。中年の夫婦と、年配の男性だった。私は中国語が出来ないので、夫婦の妻と筆談でおしゃべり(?)をしていたが、年配の男性が突然歌い出したのだった。

「わたしゃ 16、満洲むすめ…」驚いてる私に、彼は日本語で、「私、満鉄いた。日本人よく歌ってた」と言い、笑いながら「腹減ったね」と言って、鞆から大きなブリキの弁当箱を出すと蓋を開けた。中には茹でたタラバガニの脚がびっしりと入っていて、彼は私や中年夫婦に食べるようにと勧めてくれたのだった。私は、それだけは知っている「謝謝」を繰り返し、一本頂いた。

中年夫婦との筆談で、私の旅の目的を知ったのだろう彼は、自分の姉は残留孤児の養母だったと言った。お姉さんの話を聞かせて欲しいと頼み、録音機を出すと彼は、録音はしないで欲しいと断ってから、育てた残留孤児が帰国してから養母だったお姉さんは泣き暮らしていたことを話してくれた。

彼の話すのをノートに記録しながら私は、初めてのハルビン行で出会ったおばあさんの言葉を思いだしていた。そしてまた、話してくれている彼の「録音はしないで」の言葉に、文革の時代の残留邦人とその養父母、また中国人伴侶を想った。

「日本鬼子」

母はよく、こうも言っていた。「リラの花がきれいだった！花の季節は、街中が香っていたのよ」そんな思い出があったからだろうか、母は東京の郊外につましい家を建てた時、庭に一本のライラックを植えた。

ライラックの香るハルビンを訪ねたときは、帰路は列車を使い、長春、瀋陽に寄りながら大連に戻った。その車中でのことだった。

食堂車に行くと、先客の3人連れの男性たちが居た。私は彼らと少し離れたテーブルに座り、スタッフが持ってきたメニューを見て注文をした。外の景色を眺めながら注文の品が運ばれてくるのを待ち、テーブルに頼んだ品が置かれて、私は食べ始めた。視線に気付いて顔を上げると、こちらを向いて座っていた先の男性の一人と目が合った。突き射すような視線だった。

食事を終えて客車の席に戻ろうと、彼らの脇を通った私の耳に「日本鬼子」という言葉が投げられた。その言葉が向けられたことに憤りも悲しみも感じず、ただ、深く納得している私がいた。

初めてのハルビン行のときのおばあさんの言葉をまた思いだしながら、「そうか。あのおばあさんの言葉は、“許しはするけど、忘れない”ということだったのかもしれない」と。中国の人たちにとって、戦争中の日本軍の行為は、まさに“日本鬼子”だったのだろうと、改めて思っ

満蒙開拓平和記念館で

訪ねたいと思いながら機会が持てずにいたのだが、方正友好交流の会の企画に参加して、ようやく訪ねることができた。きちんと数えたことは無いが、ハルビンにあった外僑養老院だけ

でも18回訪ねているから、旧“満洲”への旅は20回を越えるだろう。2回目からの旅はいつも、残留邦人を訪ねてのものだった。私が会った人たちはごく少数の人を除いては皆、開拓団やその家族だった人たちだ。

記念館の展示を見ながら、各地で会った人たちの思い起こしていた。日本に帰国した人もいるが、その後の消息が分からない人たちもいる。この記念館に記されている“彼ら”の歴史を、一人一人のいのちの足跡を、私はしっかりと心に刻み、また語り継いでいこうと思う。国策としての満洲移民（という名の侵略）そしてまた、国策としての満州移民（という名の棄民）の加害と被害の事実を、記念館は私たちに証言している。そしてまた思うのだが、私たちが加害と被害の一方だけでなく、その両方を伝えていくことこそ、中国の人たちの「許すが、忘れない」に応えることではないだろうか。

安倍政権の下で、教育現場から『はだしのゲン』が閲覧を阻止されたり平和教育が大きな圧迫を受けていると聞くが、この記念館を若ものたち、子どもたちが多く訪れて欲しいと願っている。

私たちは誰も、もう戦争は望まない。

（わたなべ・いちえ：作家。福島に月に一度行き、3・11後の実情を「一枝通信」というメールや「渡辺一枝トークの会」などで報告活動を展開する一方、著作活動も旺盛。著書『ハルビン回帰行』『わたしのチベット紀行』『消されゆくチベット』など多数）

「満蒙開拓平和記念館」を訪ねて

新谷 陽子

苦難の歴史

2014年3月7日～8日の二日間、「方正友好交流の会」企画による「満蒙開拓平和記念館」を訪ねる長野県下伊那の旅に参加した。

連日、抜けるような晴天。春光に輝く雪嶺がまばゆかった。澄みきった早春の山の空気とピリッとした寒さも心地よく、快適な旅だった。



開拓記念碑 （南アルプスを背に 長野県下伊那郡松川町）

1日目は、記念館の見学と寺沢秀文専務理事の解説、語り部（中島多鶴さん）のお話。夜は湯多利の里「昼神温泉」に泊まり、夕食交流会は3時間近く盛り上がった。

2日目は、中国残留孤児の帰国に生涯を捧げた故山本住職のお寺、長岳寺見学と、現住職さんのお話。そして、戦後入植して開拓されたリンゴ園とワイナリーの見学と続いた。

行く先々でたくさんの方のお話を聴き、心が揺さぶられたり感涙にむせんだり……。胸がいっぱいになり、頭の中も飽和状態のまま帰路についた。企画者、講師、参加者すべての方々に心から感謝している。

昨年の4月の開館当初から、ぜひ訪ねたいと思っていた「満蒙開拓平和記念館」は予想以上に充実した施設だった。専務理事の寺沢さんはコーナー毎に立たれ、私たちが追体験できるように分かりやすく解説してくださった。おかげで、貴重な展示資料を見ながら、満蒙開拓団の苦難の歴史を、被害・加害の両面からつぶさに知ることができた。



満蒙開拓平和記念館

寺沢さんは、お父さんが満蒙開拓団として大陸に渡られ、私が母から寝物語に聴かされてきたように、小さい時から当時の話を聴いてこられたそう。私は母個人の満州体験を本にして残しただけだが、彼はこの重い歴史そのものを、後世に伝えようと尽力されている。しかも、当時の国の加害の史実も「正確に」伝えようとされ、心から敬服する。



記念館東側にある慰霊碑 「旧満州の地に眠るすべての御魂に捧ぐ」とある。

満蒙開拓団入植地図

記念館には、満蒙開拓団関係に特化した貴重な資料が主に時系列で展示されている。

はじめに目を引いたのは「新天地満州」のコーナーに掲げられた壁いっぱいの「満蒙開拓団入植地図」。私は、母たち興亜開拓団の「大陸の花嫁」が辿った道を指でなぞった。入植までの道のりと、引き揚げの死の逃避行の道のり。とてつもない距離であったことが確認できた。そしてそれ以上に、旧満州全土に隙間なく散らばっていた開拓団の入植分布に戦慄を覚えた。「大陸の花嫁」として渡った母をはじめ、日本

の大陸侵略の先兵たちがこれほど広範囲に配置されていたことが一目瞭然に了解できた。

臥せっている母にもぜひ見せてやりたいと思ったが、あいにく館内は撮影禁止。ところが、受付で「満蒙開拓団入植地図」の縮小版が販売されていた。良かった！迷わず購入。母への最高のお土産となった。

この貴重な地図は、帰洛後老人ホームの母に見せに行った。すると母は、もうほとんど見えなくなった目を大きく見開き、自ら身を置いた開拓地（興亜開拓団）あたりを指さした。そして、当時甘南県に入植した十箇団の名前をすらすらと口にした。



記念館で購入した「満蒙開拓民入植地図」

入植した興亜義勇隊開拓団あたりを指さす母

確かに地図上の斉齊哈爾の北方には、北から太平・呉山・大和庄内・興亜・興隆・協和・東陽・義合・新発・東三河郷の十箇の開拓団が、母たちの興亜義勇隊開拓団を中心に集結するように配置されている。

さらに母は、地図を手にししながら、興亜開拓団の北隣、呉山開拓団が目の当たりで崩壊した話を語り始めた。物心ついた頃から何度も聞いた話ではあるが、具体的な位置関係を地図で確認しながらなので、今回さらに説得力を持って胸に迫ってきた。

敗戦直後、ソ連軍や匪賊の襲撃で開拓団は相継いで崩壊した。一望千里の満州で、一つの開拓団が目の前で一気に滅んでいく様は、まさに阿鼻叫喚の地獄図だったそうだ。生涯原色で目に焼き付いて離れないと言う。



母たちが入植した甘南県（母たちの十箇団の名前も確認できる）

【「満蒙開拓民入植地図」より】

私はこれまで、これほど綿密に開拓民の入植分布状況を網羅された地図を見たことがなかった。これを機に母がまた少し語り始めてくれたのも嬉しい。記念館のご尽力に改めて感謝！

棄民の史実

「満蒙開拓平和記念館」を訪ねて、もう一つ衝撃を受けた資料がある。それは「棄民の史実を伝えるパネル展示」。つまり、敗戦後の満蒙開拓団が「国から棄てられた」事実を示す貴重な資料だ。

記念館の寺沢専務理事は、「敗戦と逃避行」というコーナーに掲げられたこのパネルについて、当時の満蒙開拓団の状況を交えながら以下のように分かりやすく解説してくださった。

「敗戦後の満州の開拓地は、男たちが根こそぎ動員で兵隊にとられていたので、残されたのは女と子供・老人ばかりだった。そこへソ連軍の侵攻と匪賊（実際はほとんどが、自分たちの土地を日本人に奪われた現地の中国人農民だった）の襲撃に遭い、逃避行が始まる。そんな中、もうこれ以上逃げ切れないと集団自決した開拓団もあったが、何とか逃げ延びた団もあった。逃げ延びた開拓団は、昼は山の中に隠れ、夜に移動した。すると子たちが怖くて泣く。子供が泣くと敵に見つかるから「殺せ」と言われる。仕方なくわが子を手に掛けた人、中国人に預けた人、山の中に捨てた人があった。そういった子供たちが中国残留孤児になった。そんな中でかろうじて生き延びた日本人が、終戦の年には帰れなかった。その理由がある。それは、当時日本政府が出したこれら二つの文書が原因だった。」

「居留民は出来る限り定着の方針を執る」

【1945年8月14日日本外相3カ国宣言条項受諾に関する在外現地機関に対する訓告】

「満鮮ニ土着スル者ハ日本国籍ヲ離ルルモ支障ナキモノトス」

【1945年8月26日大本営参謀「関東軍方面停戦状況ニ関スル実視報告」】

まず1つめは、終戦の年の8月14日に出されたもの。ポツダム宣言を受けた後のものだが、日本の外務省が出した文書。「居留民は（在外邦人は）できうる限り定着の方針をとる」つまり現地の邦人は現地で生き延びよ・・・という意味だ。

もう一つは、同じく昭和20年の8月26日に大本営が出した文書。「満鮮に土着するものは（満州や朝鮮半島に土着する日本人は）日本国籍を離るるも支障なきものとす」（日本国籍を離れてもいいから現地で頑張って生き延びよ）と言っている。

開拓団も含めて当時200万人いたと言われている日本人が、終戦の年満州に残って冬を越さなければならなかった。実はその冬の方がたくさんの人が亡くなっている。開拓団27万人が渡ったと言われているが、そのうちの8万人が現地で亡くなっている。そのうちの7万人がその冬20年から21年の冬を越せなくて餓えや病気で亡くなったのだ。弱いものから順に亡くなったというのが現状だったそうだ。

実はうちの一番上の兄さんも、わずか1歳の命を、その冬が越せずに長春の避難民収容所で亡くなった。（以上、寺沢秀文氏の解説より）

厳寒の満州、チチハル避難民収容所を詠んだと言う、次の母の俳句を思い出す。

餓ゑし子に餓ゑみて黍を噛み食はす
悴(かじか)む子抱き 温 (ぬく)めゐて 餓 (うえ)きざす
オンドルのしんしん冷えて生きており
月が出て死んでも胸に 俘虜 (ふりょ)の文字
無雑作に 屍体 (したい)が積まれては凍り
子を焼いてしまへばほっと冬の星
みなし子に夕焼け満州国は亡し

昭和20年から21年にかけての冬（時に零下40度近くまで下がったと言う北満の長い厳冬）を越さなければならなかった開拓民たち。

その中に母も、そして私の姉（母は戦後再婚したので実際は父違いなのだが）の清美もいた。かろうじて越冬し母子ともに引き揚げてきたが、清美は三か月後に亡くなった。死因は栄養失調。さらに引き揚げ船の中で罹った百日咳が原因で最期は苦しみがいて逝ったそうだ。

もはや極限状況にあった母たち開拓民たちを、祖国と切り離してしまって、「土着」「定着」せよと言う。こんな血も涙もないような当時の日本政府に怒りを感じる。このような文書が出されていなかったら、引き揚げはあんなにも遅れなかったろうし、間違いなく清美たちは死なずに済んだろう。

これらの文書は以前、坂本龍彦氏の「孫に語り伝える満州」で読んだことがある。でも、それは著作上。この記念館のすごいところは、このような、国にとっては不都合な史実をしっかりと明記しパネル展示されていること。何よりもそのことに感動した。



「満蒙開拓平和記念館」正面

（しんたに・ようこ：1957 年生まれ。戦中の言論弾圧で廃刊に追い込まれた「新興俳句誌『京大俳句』を読む会」運営委員。HP「平和への祈り」を管理。俳句結社「雉」同人。俳号、亜紀。京都府城陽市在住。）

下伊那への旅

—増野と福島小高への思い—

長谷部 郁子

今回の「満蒙開拓平和記念館」への旅は、全体的内容も順序もよく考えられ、準備されていて満足したが、全行程を終えて気がついたのは、増野への再入植者の皆さんが目指したものが、ただ安穩だけの暮らしではなく、人間らしく、なつかしく、永く住み続けたいと思える故郷創りだった事です。

後継者育てに感動

増野に着いてリンゴ園を通過中、その一画に桜が何本も植えられていて、ここでいい花見ができると聞いた時、目標がリンゴの収量を増やして生活を安定させるだけではなかった事に気づきましたが、公民館に着いて現在に至る開拓のお話になった時、入植初代目の方々が中心的な働き手だった頃、二代目を担うべき若者たちの青年団活動の応援に力を入れた事を聞き、改めて二代目以降の後継者育てを視野に入れて考えていたことに感動しました。

そこで出されたお弁当やドリンクがまた、おいしくて、自分たちが手塩にかけた作物それぞれの持味を精一杯活かして作りあげた食べ物と感じました。仕出し弁当という事でしたが、もしかすると入植二代目、三代目でその仕出し屋の料理人になっている人たちが、自分の家族が丹精こめて作物を育てている姿を見ていて、その思いを大切に調理したのでは？とも思いました。ドリンクはワイナリー製品で、当然、初代目から三代目までの全世代が関わっているのですが、このワイナリーは再入植者たちだけのものではなく、地元でずっと育ってきた人たちの職域を拓けることになっているのでは？とも思いました。増野以外の再入植地では、増野のように順調に後継者が育っていないというのも、この辺に秘密があったのでは？とは私の想像です。

増野でふくらむ想像

ワイナリー見学とお土産買物の後、2階で大震災被災地支援に美術展が開催中なのでぞいて見て、との案内を受け上って行ってみたら、彫刻も絵も書も立派なものばかりで、買うなら色紙くらいかな、と思っていたのが一枚2万円もして手も出せませんでした。

そして展示場を巡っていたらグランドピアノが2台もあった事にまた、ビックリ！ここではコンサートも開かれているんだ！若者たちのうた声やコーラスにも目一杯活かされているんだ！と感動しました。青年団活動は青年の暮らしの中の様々な要求を丸ごと受け留め、そこから青年の興味や関心と一緒に才能をも引き出し、増野に居ながらにしてその才能を育てる場を提供しようと、今の2階建ての会館建設に至ったのだと、私の想像は

ふくらむ一方でした。

わが福島県小高町への思い

2階から下りて来てふと右側を見ると、上る時は気がつかなかった 30 糎巾位の清冽な流れがあって、川底にはブルーと白のタイルが敷きつめられていて水の清冽さを際立たせていました。ちょうどその場で出くわしたワイナリー社長に「きれいな川ですね」と語りかけたら、「この辺は水源が少ないので、ようやく見つけた水源をみんなが大事にしているんです」の答え。今在るものには自分たちの手をかけて、より美しくして、手がけた親しみと懐かしみで離れ難い故郷を創りだしている。それがこのワイナリーだ。日本国内のどの再入植地もこうであつたら素晴らしいのに、と思い、その思いは3年目を迎えた東日本大震災による原発事故で故郷を追われた我が福島県小高町の農民連の人たちへの思いにつながりました。安全安心で美味しい作物を消費者に届けるのだと丹精こめた土作りを基礎に、砂地の産米は美味しくないという先入観に毒されていた私に、小高米は美味しいと言わせた農民連産米が原発事故によって放射線による汚染米にされた、その口惜しさは如何ばかりかと思ひ共に涙しました。泣く泣く遠方に散って初めからやり直しを始めた若い農民連会員たち。でも全国どこに行っても海の近くには原発があつて、大地震が起こればまた、同じ放射線による大地の汚染に見舞われる事になり、元の安全な大地に戻るまでは何十年もかかる事になるのだ、核と共存できない人間には核兵器も原発も絶対いらない、と改めて強く感じました。

増野と福島小高との交流を

旧満蒙から増野に再入植された方々と、放射線に汚されて新しい地での再出発を強いられている元福島小高の農民連の方たちとの交流ができないかな、と私の思いはまたまた羽ばたきます。農民連でも作物をそのまま出荷するだけでなく、トマトジュース、甘酒、米粉パン等の加工食品にして、自営のマーケットも経営していました。いわきからは遠くてマーケットに買物には行けませんでした、お米や野菜と同じように予約注文で直販してもらっていました。お互い、学びあえるのではないのでしょうか。

最後に注文を一言。記念館の見学では見学者 10 人に 1 人位の案内をつけていただけるとありがたいと思います。30 人ひとまとめで案内人 1 人では付いて歩くのも大変だし、遅れると声を取りにくくなり、自分勝手に歩いていては見落とし、聞き落としで残念な思いをする事が多くなるので。

(はせべ・いくこ：1933 年生まれ。福島県いわき市在住。家庭裁判所の調査員として、主に少年事件を担当。その後、「新日本婦人の会」などの活動を経て、現在無職)

満蒙開拓平和記念館を見学して

酒井 旭

1. 開拓団員の訴え

関東軍が企んだ満蒙入植政策が 如何に無謀で残酷なものであったか——祈念館の展示は 必死に訴えていました。

開拓団員は3回 見捨てられました。

1回目 生まれ故郷から押し出され、対ソ連防衛線に配置された

2回目 ソ連軍侵攻時に 関東軍から見捨てられ 満鉄の列車にも乗せてもらえず、地元民に襲われた。

3回目 終戦後 日本政府の “海外在留邦人は現地に留まれ（内地に帰ってくるな）” という非情な声明 で

2. 佐倉市平和を守る会

先日、“満州で関東軍から武器を支給され、関東軍が逃走した後の国境の街に取り残された少年兵”の立場から、再び戦争を起こそうとしている安倍政権の企みをどのようにすれば防げるだろうか という話をさせてもらいました。その中で“満蒙開拓団の悲劇”について語りました

3. 勤労奉仕隊員の気持ち

昭和20年4月から8月まで弥栄村で 鋤を振るった勤労奉仕隊員として、開拓団員の方々の叫びに、心から共感し、日本中の人々に知ってほしいと思いました。

4. 満蒙開拓平和記念館の存在の意味

今日、NHK が8月に放送を予定している番組 “シベリア抑留” に関しての取材を受けました。取材に来た人に

「ぜひ長野の満蒙開拓平和記念館を見に行くよう」に奨めて、了承を得ました。もっともっとマスコミでとりあげるべきと思います。

5. 開拓団員は身代わりとして襲われた

開拓団員は避難途中、地元民から襲われましたが、恨まれていたから襲われたのではありません。関東軍の匪賊討伐で、村ごと焼き殺された恨みの報復を身代わりとして受けたのです。

私もハルピンから新京までの移動中、地元民に襲われ、着ていた衣類、防寒帽、防寒靴まですべて略奪されました。新京の街で 大衆裁判で 銃殺刑になったのは、特務機関、憲兵、警察官でした。開拓団員だったからと言って処刑された人はいませんでした。

6. もし、児玉源太郎将軍・後藤新平民政官が満州統治をしていたら、

東宮鉄男の満蒙武装入植政策を容認しなかったでしょう。狂信的な軍人たちによって引き起こされた悲劇は、あまりにも大きな代償でした。

(さかい・あさひ：1931 年大連生まれ。1946 年引揚げる。専門は化学、カナダ国立研究所などに勤務。この 3 月の「満蒙開拓平和記念館を訪ねる旅」に参加。現在も国内、国際学会で研究報告を行う)

満蒙開拓平和記念館訪問の旅に参加して

福岡 石田 和久

方正の会報で上記のツアーを知り、一度は訪問したいと思っていた記念館なので参加を考えた。新宿からだとは前泊しなければならないので、飯田あたりでの合流をと打ち合せたが、昼神温泉のホテルでの交流会のみの合流となった。

ラッキーなことが多々あった。何回か一緒にいる旅友、松山の山口章一さんに案内したところ、真田藩の城下町・松代や大本営地下壕跡にも興味があるので同行しようとなり名古屋で合流した。(なんと地下壕跡は、訪問した第2日曜日に限り、長野市の「松代大本営の保存をすすめる会」がボランティアで案内をされていた。)

また持つべきものは友!!。方正の日本人公墓の墓参で知り合った新潟の樗沢仁さんが車で駆けつけてくれ助かった。まだある、土・日の連泊は不可といわれていた源泉の国民宿舎松代荘が連泊OKとなり温泉を満喫した。

本題に入ろう、我々が館内参観を済ませた処に本隊が到着し、語り部の中島多鶴さん(1925年生れ)のお話を、一緒に聞くことができた。彼女は私より6歳も上、場慣れているとはいえ、悲酸な命がけの逃避行を淡々と話された。敗戦後1ヶ月も山野を逃げまどい、方正の伊漢通いかんつうで収容されたという。

幾らか土地勘があり、2011年に現地を訪れている私は、ひとしお胸を打たれた。

夜の交流会時にも石橋辰巳さんが「伊漢通の河べりで哈尔滨に行く船に一旦乗り込みながら、関東軍の命令で下船させられ、その後、ソ連軍や暴徒に襲われ多数の方が亡くなった」と話された。こんな事があったのだ!!(重い話に晩酌も進まなかった。)

もう一つ感心したお話がある。同席された作家の渡辺一枝いちえさんから、帰宅した11日には、はやばやとツアーの詳しいレポートが配信された。彼女は、方正の大類事務局長からのメールで、近著の『消されゆくチベット』の紹介があったが、「消えゆく」ではなく「消されゆく」チベットの实情を知り、隣人中国と仲よく!!の主義の私も胸が痛んだ。

追記：長野まで来たからには松代の大本営地下壕跡を見なければと松代の国民宿舎松代荘に泊まった。源泉かけ流し、日帰り客用と宿泊客用の大風呂はお勧めだ。地下壕跡は第2日曜日に限り、長野の「松代大本営の保存をすすめる会(☎026-228-8415)」が無料で案内をしてくれる。出足が好調の記念館の盛運を祈念する。

(いしだ・かずひさ：1931生まれ、福岡在住。小学1年生の時、岡山から吉林省の延辺に転校後、琿春、奉天、海城、鞍山など転校を続ける。1946年9月、葫蘆島より岡山に引揚げ。1995年より山西省大同市の緑化活動に参加。この夏には20回目になる)

満蒙開拓平和記念館を訪ねて

塚田 恵子

満蒙開拓平和記念館（長野県下伊那郡阿智村に 2013 年 4 月開館）は、すぐ側を阿智川(天竜川の支流)が流れる鄙びた村の一角にありました。記念館の裏手から歩いて直ぐのところに長岳寺というお寺があります。ここの前住職の山本慈昭さんは中国残留孤児の身元捜しに生涯を捧げられ、日中友好に尽力された方で、このお寺も訪ね、今の住職の方から山本慈昭さんのこともお聞きしました。今、山本さんを描いた‘望郷の鐘’という映画が製作されているとのことでした。

満蒙開拓平和記念館の専務理事 寺沢秀文さんの丁寧な説明や案内を受け、また満蒙開拓「語り部」中島多鶴さんのお話で、この記念館が現在の私たちに何を問いかけているのか？を深く考えさせられました。

あしかけ 8 年をかけて阿智村に完成した記念館。阿智村が建設用地を無償で貸与して下さったこと、阿智村中学校の生徒さんたちが記念館で資料を配ったりボランティア活動をされていること、当時の村長岡庭一雄さん（任期を終え 今年 2 月退職）の阿智村の教育は阿智村の村民で考えすすめていくという地方自治を守る姿勢などにこの記念館のしっかりした礎を見る思いです。

記念館来館者は開館後まだ 1 年も経たない今年 2 月末で 27500 人にもなるそうです。私の周囲でも阿智村の満蒙開拓平和記念館に行ってみたいという人がたくさんいらっしゃいます。

満州に行けば広い農地をもらえ楽な生活ができると出かけた農家の次男・三男、子どもまで青少年義勇軍にして送り出し、最後は関東軍に見捨てられ死の逃避行で地獄を体験、シベリア抑留、帰国したら故郷には住む土地がなく、日本国内に土地を探して再入植しなければならなかった「満蒙開拓」とは一体何だったんだろうか？

それを深く掘みたい、そして、現在や未来の平和に繋がたいという思いが、多くの人々を満蒙開拓平和記念館を見たいという気持ちにさせているんだと思います。

記念館は展示、証言者の映像、資料など見るべきものがたくさんあり、今後ますます充実していくことと思われます。これからは機会があれば何度でも訪ねてみたい所です。

記念館の見学を終え、阿智村から飯田市を横切って、引き揚げ者の戦後の再入植地(増野原＝現松川町・高森町)松川町を訪ねました。戦後、引き揚げ者の再入植地が県内各地に作られました。飯田・下伊那地区に作られた開拓地で最も入植者が多かったのがここ増野原 50 戸だったそうです。天竜川が流れ、なだらかな河岸段丘にりんごの木や梨の木が植えられ、遠くに南アルプスの山々を望むのどかな果樹園でした。5 月頃はりんごの花、梨の花など咲き乱れ、桃源郷になるとのお話。やっぱり、また来たい！という思いに駆られます。

増野に入植した人たちは、機械化をせず唐鍬^{とんが}一本で開墾に励み、出稼ぎに出ることもなく離農する人もほとんどなく、みんな村に残り、今は 2 世・3 世がりんごジュース工場やワイナリーまで立ち上げ、村の

経営に手腕を発揮しているということでした。当初の「増野原開拓農業協同組合」は今は「増野開拓組合」となって引き継がれ、土地、水道等の資産管理、会員の親睦などに大きな役割を果たしているとのこと、そのようすを中心になっていらっしゃる3名の方から伺いました。ここ増野でも長野県内の他の地域同様、公民館活動が活発だそうです。村民が力を合わせて自分たちで村を発展させてきた背景には公民館活動も力になっているのだと思いました。

阿智村や増野を訪れて思うことは、住民の自治の力ということです。満蒙開拓平和記念館は国立や県立や市町村立ではなく、民間の人たちがつくった一般社団法人です。地域の歴史を学び、現在・未来に生かしていきたいという住民の思いが、ついに村や行政を動かし記念館建設までなしとげたのです。増野に入植された方たちも入植者全員がやってゆけるよう、村人みんなで考え力を出し合ってここまでやってこられたということです。

旅を終える今、東北の震災のことが頭をよぎります。3年経っても先の見えない生活に苦しんでいる被災者の人たち。震災からの復興を考えると、住民自治とコミュニティを大事にしている阿智村や増野から学ぶことがたくさんあるのではないかと思います。

(つかだ・けいこ：1942年生まれ。都立高校の社会科教師を経て、現在、東久留米の教科書を考える会で月1回行っている市民講座「未来をひらく歴史」の事務局を手伝う。都内東久留米市在住)

「被害」と「加害」の交差する満蒙開拓団

鈴木 敏夫

このたびは、「満蒙開拓平和記念館」を訪ねる旅にご一緒させていただきありがとうございました。

授業では満蒙開拓団をとりあげ、民放の放送大賞をとった「少年たちは戦場に送られた」（2010年）というテレビ番組を見せます。また2.26事件後、広田弘毅内閣が「満州開拓移民推進計画」を決議し、1936年から20年間に（1956年まで！）100万戸（500万人）の日本人移住を計画したことが背景にあることを明らかにします。

私自身は、アニメ「蒼い記憶 満蒙開拓と少年たち」や毎年長野県でのこの問題での集会記録集を読んで関心を持ってきました。記念館のことは新聞記事で知り、訪ねたいと思い、職場でツアーを企画しましたが、うまくいかず、呼びかけ人の一人がほかの企画で日帰り参加し、記念館で購入した証言集をプレゼントしてくれました。

方正県のお話はガイドブックに載っていたのを思い出しました。それは中国東北地方を訪ねた際に読んだ『観光コースでない「満州」』（高文研 2006年）で紹介されていました。写真のキャプションに「方正県の郊外にある中日友好園林の日本人公墓。右側が『方正地区日本人公墓』、左側が『麻山地区日本人公墓』。敗戦後、日本に帰り着くことなく満州の大地で命を落とした開拓民たちが埋葬されている」と紹介されていました。

その前後のページには、長谷川テルさんのお話と「満州開拓団」（ママ）と「満州開拓青年義勇隊」（ママ）の紹介がありました。方正県の読み方は「ほうせいけん」と思っていたのですが、「ほうまさ」とのこと。音が同じになる県があるとのことで、これも新しい発見でした。阿智村で建設されたのは、村民の思いと村長などのバックアップが背景にあるようです。また全国で最も「満蒙開拓民」を送り出した長野県特に南信地方、それも飯田・下伊那地方が多かった、その理由は「貧しさ」「教員の働きかけ（1933年のいわゆる「2.4事件」以後の教員統制のなかで）」などであることが説明されました。また在郷軍人組織の「信州郷軍同志会」の中心地であり、積極的な世論づくりが行われたとのことでした。

青少年義勇軍の少年たちが訓練受けた内原は同じ常磐線沿線で、ここも訪ねたいと思います。とりとめのない話になりましたが、満蒙開拓団の問題は、貧しい農民やいたいけな青少年が被害者であると同時に、中国の農民に対する「加害」の問題でもあります。日中が厳しい状況にあるなかで、今後とも日中友好をめざす方正友好交流の会の取り組みに敬意を表するものです。

（すずき・としお：1948年生まれ。2013年3月まで都立高校で社会科・日本史を担当。都教委などによる高校教科書採択妨害問題について「子どもと教科書全国ネット21」などの反対運動等にかかわる。歴史教育者協議会、教育科学研究会の会員。東京都葛飾区在住）

「下伊那の旅」参加者の発言を聞いて

—満蒙開拓平和記念館を訪ねて—

凌 星光

「日本軍国主義は日中両国人民共通の敵」

「方正友好交流会の会」企画の今回の旅には多種多彩の方が参加しており、また今晚（3月7日夜の交流会）の皆さんの話を聞いて大変勉強になりました。記念館を見学して、満蒙開拓団の悲劇がよく分かりました。とりわけ印象が深かったのは、対ソ連防衛と余剰人口のはけ口として満蒙開拓団が国策として推進されましたが、敗戦後は完全に見放されたという事実です。

1945年8月14日、日本の外相が「居留民は出来る限り定着の方針を執る」と述べ、1945年8月26日大本営参謀から「満州に土着するものは日本国籍を離るるも支障なきものとす」という方針が出されました。政府及び軍は本当に無責任な態度をとったと言わざるを得ません。

確かに政府はけしからんということになりますが、それは国民を守ることのできる列強において言えることであって、侵略された国、植民地や半植民地であった人たちには、自分を守ってくれる国家はないに等しかったという事実を、私は一中国人として述べておきたいと思います。私の父の兄弟二人は、中国浙江省に在って兵隊に駆り出され、どこでどう死んだのか何も分かっていないのです。中国にはこういう人が沢山いることを是非とも知っていただきたいと思います。

ここで、今回の旅を通して感じたことを、当面の日中関係の問題と結びつけて四点ほど話したいと思います。

先ず、日本軍国主義は日中両国人民の共通の敵であったということです。お国のためと言って対外侵略し、日本国民は大きな被害を受けました。勿論、侵略された中国の被害はその何十倍です。その反省に立って戦後の日中友好運動が始まり、国交正常化が実現しました。ところが今、その反省を自虐史観と決めつけ、侵略戦争を美化する動きがありますが、警戒すべきことだと思います。中国で日本軍国主義美化論者と人民及び有識者を区別しない傾向が一昨年9月から見られましたが、幸い、昨年後半から調整されてきました。中国としては、やはり軍国主義美化論者と一般の国民とを区別する姿勢が絶対に必要だと思います。

次に、昨年12月26日、安倍首相がA級戦犯を祀っている靖国神社への参拝が大きな問題となりました。多くの識者及び国民は、政教分離の憲法及び戦犯を祀っている靖国神社

へは、首相や閣僚は参拝すべきでないと見ていますが、日本全体が右傾化する中、このような世論は最近弱くなっています。中国では日本軍国主義復活論を叫ぶ人がいますが、それは不可能と思っています。しかし、日本のこのような行動は、かつて侵略された国の人々の心を傷つけるものであり、日本にとって、この地域の平和と発展にとって、大きなマイナス要因であると思います。日本の立場、理由を隣国に理解してもらう、説得すると言っていますが、それは不可能に近いと思います。もちろん、時間がいずれ解決してくれますが、それは長い時間を必要とし、損失は実に大きいと思います。主体的努力が必要です。

第三に、もう一つの難題、尖閣諸島問題の解決は「係争棚上げ、共同開発」しかないと思います。1980年代初め、日中双方は共同開発の機運が高まっていました。ところが、1982年に尖閣を日本の領土とした中間線を提起し、実効支配を強めてきました。それへの反発として、2012年9月に一連の対抗措置がとられました。今、両国の巡視船が相対峙する緊張状態が続いています。一方がことを起そうと思えば、いつでも起こせる状態にあります。しかし、双方ともことを起こしたくありませんから、今のような均衡状態が続いていく可能性があります。しかし、危機管理メカニズムを早期に確立する必要があります。そして、国民レベルの日中友好活動を展開して、相互信頼を醸成することによって、係争棚上げ、共同管理、共同開発に持って行く必要があると思います。危機管理メカニズムができれば、共同管理の第一歩が始まったと見ることができます。

最後に、サンフランシスコ条約・日米安保条約の賞味期限はあと10年であることを知るべきです。この二つの条約は冷戦の産物であり、冷戦が崩壊した今日において、それは時代に沿わないものになっています。中国は平和発展の道を示し、他方で米国の覇権体制打破を目指して、軍事力の拡大を図っています。米国は中国がかつてのソ連とは違うと見ていて、中国の主張する新しい型の大国間関係樹立、即ち、1) 衝突・対立しない、2) 相互に相手を尊重する、3) 協力によるウイン・ウインの関係、に前向きに応じています。米国は戦略的には米中新型大国間関係、戦術的には日米安保条約の利用を考えているように思います。ところが日本はポスト冷戦の戦略を持たず、日米安保条約を戦略的なよりどころとしています。韓国のように、対米対中均衡外交を展開すべきだと思います。

社団としては、引き続き「方正友好交流の会」を支援していきます。皆様も協力のほど宜しくお願いします。

(りょう・せいこう：1933年東京に生まれてすぐ静岡県浜松に移る。1953年一橋大学を中退し中国に帰国。上海財経大学で国民経済計画を学ぶ。中国社会科学院教授。1992年より日本で学究活動。現在(社)日中科学技術文化センター理事長、福井県立大学名誉教授)

満蒙開拓団・私が歩んできた道

石橋 辰巳

1940 年 10 月、私が小学校 3 年生の時、父母に連れられて満洲国三江省方正県大羅勒密開拓団に武装移民として入植した。大豆、トウモロコシ、野菜などは収穫できたが、稲作は日本と気候が違い、9 月には霜が降りできず、3 年が過ぎてようやく収穫できるようになって終戦を迎えた。



石橋さん 近影

ソ連の戦闘機から機銃掃射

1945 年 8 月 15 日、夏休みだったが、学校から「お昼までに学校に来るように」と連絡があり、熱い太陽が照りつけるなか登校すると、校庭には開拓団の各部落の人たちも大勢集まっていた。ラジオ放送を聞かされ、「日本は戦争に負けた。直ちに疎開する、荷物を持って大羅勒密港に集結すること」と指示された。

さっそく家に帰り、荷物をまとめて、牛車に荷物を積んで続々と人が集まってきた。「これから汽船に乗ってハルビンに疎開する。牛や馬を捨て、最小限の荷物を持って汽船に乗るよう」に指示され、まだ太陽が沈む前だったが午後 9 時ごろ汽船に乗った。

「万宝山軍事基地」にいる関東軍の兵士が乗船するのを待ってハルビンを目指して出港することになり、翌日、港の関東軍の物資の山にガソリンをかけ燃やして出港する準備をしているその時、今まで聞いたことのないキーンという飛行機の音がして空を見上げると、ドドドドと倉庫の屋根にバリバリと機銃掃射を受けた。

これがソ連の戦闘機からの機銃掃射であることがわかった。幸い怪我人は出ず、港を出た。その後、夜暗いなか港に停泊した。朝になってそこが大羅勒密港から約 40 キロの伊漢通港であることがわかった。そして「ここで降りて歩く」言われた。ハルビンまで約 200 キロ、汽船なら一昼夜で着くのになぜ、と疑問に思い聞き返したが、教えてくれない。

兵隊を残して下船した。船に積んであった非常食の乾パンを持てるだけくれた。学徒動員の見習士官に聞いても「上からの司令です」と言うだけ、女子供病人で歩き始めた。

ハルビン目指して歩き、開拓団の跡地の畑でトウモロコシ、じゃがいも、大豆、野菜ではキュウリ、カボチャ、トマト、人参、ごぼう、大根、たまねぎ、まくわ瓜などを収穫して、生で食べられるものはそのまま焼いて、煮て食べた。鍋は関東軍の兵士が捨てた鉄兜を空気抜きの 4 つの穴は綿やキレでふさいで使った。塩とマッチは貴重品だった。野宿しながら、炎天下を歩き続けた。幸いだったのは、この時期雨が降らず、野宿は助かり、谷川や井戸を探して水を汲んだ。

同級生の女性丸坊主

1945 年 9 月中旬、方正県庁から西南の長野県開拓跡地に到着、避難生活の疲れを癒すた

め、分宿。家の中はすべてなく土間にごろ寝、屋根があり夜露がしのげ、開拓団の人たちが作ったトウモロコシ、じゃがいもを始め野菜を収穫して飢えをしのいだ。

4、5日してソ連の戦車が、開拓団の西門、鳥居のような木造の門を壊して侵入してきた。ソ連の戦車を見て、関東軍の戦車は玩具のように貧弱に見え驚いた。

その日からソ連軍の略奪、武装解除がされ、夜になるとソ連軍兵士らの婦女暴行が始まった。同級生の女性たちは頭を丸坊主にして男装していた。

同級生の笑みちゃんも丸坊主になり、私に「辰ちゃん、俺、男になったぜ、じゃがいも掘りに連れってくれ」と。私は「よーし、一緒に行くか、笑みちゃんの頭はトラ刈りだ。俺の戦闘帽子を被れ、男同士だ、行こう」「辰ちゃん掘るのが早いなー」「よーし掘ってやるぞ」「そげん持てんけん、もうよかたい」

南京袋にいっぱい担いで帰ってきた。笑みちゃんのお母さんから「辰ちゃんにお礼を言って」「男同士の付き合いで嬉しいよ」。あの笑顔は今にも目に浮かぶ。

私は、左顎にできたものが腫れ上り、避難途中に熱を出し、顎のリンパ球が化膿して乾パンが丸ごと食べられず、二つに割って口に入れて食べた。この部落滞在中、開拓団の助産婦・看護婦で従兄の妻の正子さんが、このままでは大変、私を倉庫の柱に縛り付け、ナイフとはさみで切開して膿を出し消毒してくれた。今でも手術の痕は顎髭が濃く、毎日髭を剃る度にその時のことを思い出す。

ソ連の進駐で方正が日本人難民収容所に

日本に帰るためにハルビンを目指していたのに、方正県庁所在地まで引き返すことになった。その理由の説明もなく不安と心配で仕方がなかった。

ソ連の進駐で武装解除され、方正に引き返す途中で、中国人武装集団に襲撃され、金品を奪われ、死傷者を出した。後方から銃声がだんだん近くなり、高粱・大豆畑にぴゅんバサバと銃弾が飛んできて、クモの子を散らすように大豆、高粱畑に逃げ込んで身を伏せていたが、武装集団は大人を道端に呼び出し金品を奪って立ち去った。負傷した人は手当てをして、死んだ人はそのまま放置して方正に向けて歩き出した。

方正県庁東郊外関東軍倉庫跡に到着し、倉庫と住宅あとの土間で約10日間滞在、テントには関東軍の医師や看護婦もソ連の捕虜として滞在していた。

食事は関東軍の炊き出しで飢えない程度に補給された。しかし、野蛮なソ連兵の略奪、婦女暴行はひどく、売春婦を集めソ連兵に提供したと聞いた。それでも野蛮な軍隊には驚いた。日本兵も中国侵略戦争では、劣らず野蛮であったことを兵隊出身の人から聞かされ驚いたものである。

伊漢通開拓団跡地を日本人難民収容所とすることが決まった。私たち大羅勒密開拓団と方正県庁職員家族（副県知事も）は臨港部落で越冬することになった。

<編集部注：当時の「満洲国」では五族協和と言いながら、副知事など主要なポストや職員は日本人だった>

母は40歳の若さで亡くなった

10月になった。雪も降り畑も凍結し寒くなり、シラミが大量に発生し、発疹チブスが大

流行した。抵抗力の弱い幼児からお年寄りがバタバタと死んだ。私の2歳の弟は10月5日に死亡し墓穴を掘って埋葬した。しかし、野原もだんだん凍土と化し、墓穴を掘ることができず野原に転がすしかなく死骸の山ができた。母は12月12日、姉が作った高粱のおかゆを「美味しかった」と姉をねぎらい、すぐその後に息を引き取った。

母は避難の道中で、子供たちを優先して食べさせ、自分は残り物で済ませ、栄養失調で発疹チブスを患い、40歳の若さで亡くなった。幼い子供たちを残し悔しかったろうと思った。私も母と同じころ発疹チブスの熱にうなされ、母が亡くなったのは横で寝ていて、かすかに聞こえた。しかし後で兄から「野原に転がしてきた」と聞いて、熱が下がり周辺を捜したが、死体の山になっており、病み上がりの私には、零下30度の野原に、母を見つけることはできなかった。

12月20日過ぎ、戦前、農繁期に農作業を頼んでいた中国人が櫓で迎えにきてくれた。「^{たい}太（母）が数日前に亡くなったと聞いた。もっと早く来ればよかった」と涙を流した。母は、物がないうちでなにかと日当の他に、衣類や食べ物を分けていたのだった。

助けにきた中国人は貧しく、私たちを養うことができず、早速、小学校4年生の妹と1年生の弟、満5歳の妹はそれぞれ3軒の中国人にやり、私は大きな農家に連れていかれた。私はそこで薪割り、水汲み家畜の餌やりなど、朝から夜暗くなるまで働いた。

1945年の暮れも迫った日、中国人の地主の家から約100メートルのところに共同の井戸があり、いつものように水汲みをしていると、「あら辰ちゃんでないの」と同級生の里見さんが声をかけてきた。「妹と母を養うために、私が嫁になって一緒に暮らしている」「辰ちゃん、悔しいよ、好きでもない知らない満人の妻になるなんて、死にたいと何度も思った。辰ちゃんは男でいいなあー」。私は「いつも水汲みに来るからまたね」と別れた。

1946年9月、八路軍から「帰国の知らせ」

豆腐屋で働くことになった。出来上がった豆腐をリヤカーに乗せて売りに歩いた。豆腐は普通の豆腐、乾豆腐（豆腐が布のようになったもの）、氷豆腐だった。豆腐屋の牛放牧もした。中国人少年も放牧していて、私を「日本小鬼子」とののしり、放牧の邪魔までされるなど悔しい思いをした。

豆腐屋の仕事は暖かくなってきたので、農家に戻って農業をした。大羅勒密川の上流の丘の上の畑で農作業をした。山小屋を建て、中国人の主人と妻の鶴田さんと3人で農作業をして暮らした。鶴田さんは「暮に、無理やり犯されるようにして妻にされ、一晚泣き明かした」と、15歳の私に話してくれた。山小屋の5月から9月までの苦しい生活の中で鶴田さんとは姉弟のようになった。

9月末、突然兄が訪れ、八路軍から「日本人の帰国列車がハルビンから出る」と言われ、急いでハルビンに行こうということになった。鶴田さんは10月に出産予定でお腹が大きく、帰りたくとも帰れない。主人が月給として1000円を借りてきて渡してくれた。（当時100円で肉まんが二つ買えた）鶴田さんとは山小屋で泣き別れた。

大羅勒密村周辺の日本人に八路軍兵士から「帰国の知らせ」が入り、日本人帰国者が集

められハルビンまでの通行証を渡してくれ、60 数人でハルビンを目指して歩くことになった。延寿から珠河という駅までバスに乗り、ハルビンに行く列車に乗った。

10 月 5 日、ハルビンに着いたが、帰国列車は 10 月 2 日で終わったという。しかたなく、ハルビンの日本人難民収容所（ホテル跡）に入った。奥地から次々に難民が到着し、収容所は 300 人ほどになり満杯になった。

ハルビンでは道路工事、清掃作業、料理店で皿洗いなどをして生きるために働いた。収容所でも多くの人が病死した。

その後、1947 年秋に民族資本家が経営する同記工場という名の工場に就職した。1948 年の秋には東北土産公司（公営）に、ハルビン濱江駅前の民族資本家の同記工場の一部が吸収合併され、機械修理工として、約 3000 人の従業員がいる工場で働いた。

1949 年 10 月 1 日、中華人民共和国の成立もこの工場で迎えた。ハルビンの鉄路局で満鉄出身の技師たちが「電気夜学」を開校したので、半分居眠りしながら 2 年間通った。そうして 1953 年、秦皇島から興安丸に乗船、1953 年 4 月 23 日、舞鶴港に入港、帰国したのだった。

（いしばし・たつみ：1931 年 12 月（「満洲事変」の年）、福岡県八女郡星野村黒木谷（現在は八女市）で生れる。1953 年中国から引き揚げ後は日赤にできた「帰国者協力会」で働く。その後日中友好運動に携わる。3 月、方正の会主催の「下伊那の旅」に参加）

私が体験した死の逃避行

中島 多鶴

(満蒙開拓平和記念館・寺沢秀文専務理事からのご紹介挨拶)

それでは、私から中島多鶴さんをご紹介します。

ご存知の方も多いとは思いますが、中島多鶴さんは、『沈まぬ夕陽』（中繁彦著、信濃毎日新聞社）や『忘れられた女たち』（NHK取材班・中島多鶴編、日本放送出版協会）といった本でも紹介されている方です。

1925（大正 14）年のお生まれですから、現在 88 歳ですが、今もお元気で、ご自分で軽トラックや自家用車を運転されています。この近くにありますが、泰阜村（やすおかむら）から泰阜村分村といわれた開拓団に参加をされて、現地では、青少年義勇軍の看護師もされておられました。戦後は大変なご苦労をされてお帰りになられる訳ですが、帰国後は現地に残された残留婦人たちの帰国のために奔走されて、阿智村にいらっしゃった山本慈昭さんという方が「残留孤児の父」と言われておりますが、中島多鶴さんは「残留婦人の母」と言われております。そのようなお話を、今日は伺いたいと思います。

それでは、中島多鶴さんよろしくお願いします。

■十五歳の春に

皆さま、こんにちわ。ただいまご紹介いただきました、私 中島多鶴と申します。

ご紹介いただきましたように、私は泰阜村という山村から、昭和 15 年 3 月に満洲に渡りました。そのとき私は十五歳でして、高等科 2 年を卒業して、その 3 月に、家族 7 人で約千人の方の泰阜分村に入りました。3 月下旬でしたが非常に寒くてね、寒いとは聞いていたけれど、こういう気候なのだな、と思いました。

私は十五歳でしたので、満洲はいいところだと思っていました。父は村の役員をしております、どうしても皆さんを満洲へ、ということで、泰阜村の当時の昭和 13、4 年頃は非常に貧しかったんです。村そのものがね、お米もとれないし、大変な時代でありました。私も子ども心に覚えておりますけれど、お麦が半分、お米が半分のご飯をいただいていた。そういう時代でした。

私は高等科 2 年を卒業した年に行ったのですが、満洲に行って、向こうにも学校があるしね、父からは非常にいいところだと聞かされていて、嬉しくてというか希望をもって、どんなにいいところなのだろうと思って行ったんです。

どういうところかと言いますと、北満の方です。今の黒龍江省ですけど、当時は三江省と言いました。大八浪（ターパーラン）と言うところなので、大八浪開拓団として入植した訳です。千人くらいの方が、5 回くらいに分けて、日本海を渡って行きました。

私はもう上の学校へは行けなくなると心配しましたが、父からは、向こうに行けばな、

専門学校も女学校もあるし、ハルビンというところへ行けば、いろいろな学校があつて、上の学校も出られますよ、と聞いていました。ああ、それじゃあ、日本にいたらお金がなくて上の学校へは行けなかったから、嬉しいなって、そのことだけが頭にありました。

そうして渡って行つたのです。一回では行けないから、船で何回にも分けてね。開拓団の地名はターパーランと言って、大、八、浪と書きます。そこには、原住民の方が、3万人住んでおりました。それは今で言うところと中国人の方、その当時は満洲人の方々でした。それから、朝鮮人の方も、少し離れていたもので数は記憶しておりませんが、住んでおられました。私たちは、まだ住宅もできてなくて、それで中国の方の住宅をあけてもらつて……。あけてもらったって言つても、日本人は強いですから、追い出す形でね。でもかわいそうだなって、私は思いました。子どもを連れて、そろそろと出て行くんです。その間に、私たちの住宅ができて、戻ってきた現地の人たちに聞いたらね、親戚とかお友だちの家に、一年間置いてもらったって。そういうことを、日本人はしたんですよ。日本人の言うことは、何でも聞いてくれました。

そして、農業をするにしても、中国の人の手を借りないと、日本の農業と違うのでできないのです。苦力（クーリー）と言ってね、使用人の人を家ごとに最低でも二人は使いました。馬や牛を使うにも、向こうの人でないとできなかったの。開拓団の人も、ぜんぶ教えてもらつて、農業をしたんですよ。

それから、まず、本当に作物がよくできて、肥料もいらないし、お米もとれるし、なにを作つてもよくできました。土地が肥えていたんです。北満と言つてもそれほど寒くはなかったけれど、氷点下30度くらいにはなりました。今考えてみると、中国の人のおかげで、農業ができていた訳です。そして、学校もできて、青年学校もでき、そしてみんな勉強していました。五年六ヶ月、この間は、平穩に暮らしました。そして日本の皆さんを呼んであげようか、という声もちろほら聞こえ始めていたんです。

■青少年義勇軍の看護師に

ところが、昭和20年8月、父が召集で、8月初旬の7日だったと思うのですが……。17歳から45歳まで、根こそぎ動員と言って、男手はぜんぶ兵隊にとられて行つたんです。召集令状が届きまして、行きました。そしてそのとき父が、門のところで、「これからどうなるか判らないぞ、上の人を命令をよく守って、団結するんだぞ」——と言いました。私の家族はね、残つたのは母と、私と、弟と、妹が3人いてね、6人でした。一番下の妹は2歳です。

話が前後しますが、私は15歳のときに満洲に渡つて、その翌年の昭和16年に、ハルビンという大都市で青少年義勇軍の看護師の養成所があつたんです、そこで2年間の勉強をすれば、看護師の資格がもらえると。それで私、志願しましてね、開拓団から2人行つたんです。そうしたら、合格しましてね。もう一人の友だちは途中で病気になって、亡くなつてしまわれたのですが、私は無事に卒業できました。友だちはお気の毒に、卒業前

にね、結核が流行していたね。

その病院は、義勇軍の病院でした。他の人は入れない、町中にある 300 床くらいの大きな病院でした。昭和 16 年の 4 月に私は入所しました。33 名の第一期生の看護師募集で、私はそこで 2 年間勉強しました。そしてまた昭和 18 年の 4 月に開拓団に戻り、開拓団の病院で看護師をした訳です。

私はこの義勇軍の病院というものが、今でも忘れられません。300 人くらいの方が、義勇軍という名のもとに、軍事教練を毎日受けて、15、6 歳の青少年が、毎日訓練所に来るんです。そして、病気になった人は入院する訳ですが、ほとんど結核が多くて、大勢の方が故郷を離れて病院に入院して、お母さんのところに手紙を書いて、出して欲しいとよく言われました。重症になって亡くなっていかれる方は、肉親にも会えずに、病院で亡くなっていったんです。誰にも葬ってもらえずに、焼かれてしまって……。そういう全国から病気になって集まってくる義勇軍の青少年たちが、毎月大勢おりました。入院患者も 300 人くらいおりました。

ハルビンには医師の養成所もありましたから、そこを出られた医師のかたも、大勢開拓地の病院に入りました。気候が合わないこともあって、子どもが赤痢になったり、胸の病気になったりして。私は助産師の資格はとっていませんでしたが、お産が多くてね。夜でも呼ばれて行きました。開拓団も、5 年経つと発展してきて、ずいぶんと良くなっていたのです。

それがね、だんだんと兵隊にとられて行きました。飛行機も頻繁に来るようになりました。低空飛行して来るんです。爆弾のような音を立てて、何か落として行くのです。開拓民は、これは戦争が始まったんだと、日本では B29 が爆弾を落としているというニュースは聞いておりました。今度は満洲に起きたのかなと、その程度のことしか判りません。それで、男の人たちは兵隊に行ってしまう、後は女子ども年寄りだけになってしまったのです。

■開拓団を後にして

私たちはどうすればいいのか、それも皆目判りません。それで団長さんがね、皆さん、ここの開拓団にいることはできなくなるかもしれません、という情報を出したのです。そうしたら、周りの中国の人たちが、大きな声を出して騒ぐんです。「日本人は殺される、一人残らず殺されるかもしれない」って、大きな声で言うんです。もう怖くなって、どうしたらいいのか……。団長さんが先頭になって、この開拓団にいることはできない、8 月 17 日頃にはたぶんソ連が入って来るから、ここにいると殺されるから、ここを出てください、ということになったんです。

それで、家財道具はそのまま、飼っていた豚も鶏も牛もいっぱいいたのですが。中国の人たちが来て、「どこへ行くんだ？行き先も判らないのにどこへ行くんだ？ここにいればいいじゃないか」って、苦力の人たちが言うんです。ここにいる方がいいって言うてくれて

も、ここにはいられないから出て行くって言って。それで、中国の人たちが馬車を仕立ててくれて、駅まで送ってくれたんです。それで、あなたたちにこの家財道具や豚や牛や馬を、ぜんぶあげるからね、早く持って行きなさいって苦力さんに言ってね。中国人がいっぱい入って来たんです。家のものは全部あげるから、早く持って行きなさいって。そうしないと、匪族に襲われてしまうからって。

私は妹たちと男手がないから馬車に乗せてもらって駅に行きました。そうしたら、三つの開拓団が集まっていました。埼玉とか長野県の開拓団もいてね。駅は真っ黒な山のよういっぱいの人でした。馬もいるし馬車もいる。馬車の上に泊まらなければならないのか、みんな列車を待っていたのですけれど、佳木斬（ジャムス）という大きな町があって、そこから来る列車に乗ればいいんです。ただ、その列車がなかなか来ない。二日待っても来ない。三日目に来たんですよ。そして、この列車に乗って行けば、どこかへ連れて行ってくれるんだ。そのときには、もう開拓団へは戻れないと諦めていました。ただ、銃声は絶えることなくいつも聞こえるようになったし、空からは爆弾が落ちるし、それが怖くて。

それで、列車が来たのに、その列車に乗ってはいけないって、隣の団長さんが言うんです。その一声で、誰も乗らなかったのです。乗れば良かったのに。そこで運命が決まってしまったのです。もう後には列車は来ません。それで私たちは、警察署長さんもいてね、もうここにいたら危ない、取り囲まれてしまう、と。そこから、警察署長さんが先頭になって、北へ北へと逃避行が始まったんです。

■死の逃避行

ただこの足で逃げるより他になかったんですね。それで、情けないなあ、どうしたらいいか、子どもをおぶったり手をひいたり少しばかりの荷物を持ったりして、長い列ができました。泰阜だけでも 700 人くらいいました。子どもさんを含めてね。ですから 3 つの開拓団ですから、2 千人くらいはいたと思うんです。ひとつの列が、ずうっと山の方まで続いていました。そして、ただただ、河を渡ったり、膝までつかような湿地帯のぬかるみを歩いたり。そうしたら途中で、お年寄りが、私らはもう歩けないからどうか皆さん先に行ってください、そう言って、南無阿弥陀仏を唱えているお年寄りもいました。そうして河があつたら、河を渡れない人たちがいる……。

今度は三日くらい歩いたときに、もうみんな疲れてしまったんです。四日目のときに、大きな中国人の部落に入ったんです。そこで、お腹がすいたので何か食べるものを恵んで欲しいって部落長さんに言ったら、粟のご飯やとうもろこしのご飯をいっぱい作って来てくれたんです。それでなんとか命を繋いで、それではまた北へ北へと進みましょうと言っていたら、その夜、大襲撃に遭ったのです。「一人残らず日本人を殺せ！」という言葉聞いてね。低いところで伏せていたんです。そうしたら校長先生が、馬に乗っていたので撃たれて即死しました。それから男の人をめがけて、鉄砲を撃ってくるので、銃声の音が続いて、男の人はみんな殺されてしまいました。ほとんどの方が、見えなくなりました。

私たちは、夜になって日が暮れたら、歩いて逃げるんだということになって、歩けなくなりながら必死に移動したんです。そうしたら、あくる朝になって、もう血みどろになって亡くなったひとが道路にあります。私は足が速いので、団長さんたちと一緒に先頭になったんです。母と妹を3人連れて行ったのですが、どこかではぐれてしまったんです。それで、撃たれて死んでいるかもしれないと思って、2、3キロ戻って来たら、ちょうど窪みのところに、母が子どもを抱えておりました。ああよかったと思って、手ぬぐいを出して腕をしばってね、今度ははぐれないように、私の後をついてくるんだに——と、妹たちに言いました。

そして、行きましたら、今度は向こうから日本人の兵隊が200人来たんです、依蘭（イラン）というところから。お前たちはどこへ行くんだ、と聞かれたので、私たちは行く当てもないんです、兵隊さん助けて欲しいって言いましたら、おれたちも計画があつて、これから南方へ戦争に行くんだって。それで兵隊の人たちは銃を担いでいたんですよ。そうとう大勢いました。団長さんが交渉して、このままではどうしようもないし、山を越えることもできないって言って。兵隊さんたちも戦争が終わったこともまだ知らなくてね、それで私たちを救ってくれたんです。

牡丹江河という大きな河があったんです。そこまで行けた人は元気な人です。でも子どもをおぶったり連れたりしては、とてもとても歩けるようなところではありません。もう歩けないから、子どもはここに置いて行く、と一人の人が言うとみんなそう言いだして、それじゃあここに一緒に置いて行きましょう、となって、でも言葉の判らない2、3歳の子どもは何も言わないけれど、大きな子どもはね、「お母ちゃんイヤだ、お母ちゃんと一緒にいく」って言いました。それで、お母さんは本当に切なかったと思うんです。

私も2歳の妹を交代でおぶって、9歳と17歳の妹はまあ大きいので、なんとか歩いて行きましたけれども、とにかく死の逃避行でした。山を越えないと向こうに行けないということで、兵隊さんが、行けない子どもを並べてくださいって。20人くらいの輪にして、そうしたら手榴弾を投げてあげるから、その方がいい。そういうことになりましてね、兵隊さんにどうかお願いしますって言って、もう歩けない年寄りと子どもを、山のなかで輪にして、上から手榴弾を投げてもらったんです。それで、一回ではなかなか当たらない。もう一回投げてくださいって言った人がいて、もう一回も二回も投げてもらって、そうとうな数の人が亡くなりました。

ほうまさ ■ 方正へ

そして方正というところがあると、兵隊さんが教えてくれました。山を越えて行けば、方正県の方正というところがあるから、そこへ行けば日本の兵隊がいるかもしれない、ソ連の兵隊もいるかもしれないってね。それでこの地図の通りにね、ここを歩いたんです。そして方正というところに着きました。

駅を出てから、22 日間かかりました。そして、団長さんと私が最初に着いて、みんなを待っていました。9 月 3 日でしたけれど、もう寒かったです。皆さんを待っていましたが、半月待っても来ない人もいました。これから寒くなりますが、お金も食べるものもありません。どうしたらいいでしょうかって、団長さんに話したら、おれがこれからこの住民の中国人たちに助けてもらえるようお願いするから、と。そうして中国人の部落長のような人が来て、どうか避難民を助けて欲しいと言ったら、判りましたと言ってくれました。

それからソ連の兵隊が入って来ました。ソ連の兵隊は悪いことはしませんでした。高粱を、普通では食べられないものですけど、高粱をたくさん持ってきてくれたんです。中国の人が鉄兜でご飯を炊きなさいって言うてくれて、それで高粱とかとうもろこしを食べました。

団長さんは縛られて、ソ連に連れて行かれました。後で聞いたら、最高責任者として銃殺されたそうです。団長さんは、おれはもうどうなるか判らないけれど、どうか日本に一日も早く帰って、この惨事を伝えて欲しい、くれぐれも頼む、それが最後の言葉でした。

伊漢通というところに、日本人の開拓団の逃げた跡があって、屋根の下で冬を過ごすために何人かずつ分かれて家に入りました。9 月 3 日から翌年の 3 月一杯まで、氷点下 30 度、40 度をどうして過ごすのか。お金のある人は、中国の人が売りに来る食べ物を少しずつ買って、家のなかで火を焚いて暮らしていたのです。

でもそのうちに、栄養失調になって、みんな次々に倒れて行ったんです。朝起きてみると、もう冷たくなっている。ああ、これはどうしたらいいか。そうしたら、中国の人が、おれの家に来れば助けてあげるよ、こんなところにいたら死んでしまうじゃないか、と。おれの家に来れば、ご飯もあるよ、と言います。それで、中国の人が親切に言ってくれたのか、先に何人か行ってみて、その人たちの話を聞いてみようと言って聞いたら、5 人くらいで行っても 1 人ずつ家々に分けられてしまうって。一家で一緒に住ませてくれる約束で、馬車に乗って行ったのだけれど、そのような訳にはいなくなってしまう。

戻ってきた人に話を聞いたら、あんたは若いから男の人のところへ行けと言われたとか……。目的が判ったんですが、ここにいたら死んでしまうので、死ぬよりは中国の人のところで生きていればいつか日本に帰れるから、と言って行った人が多かったんです。でも私たちは 15 人くらい、行かなかったんです。お互いにお金を出し合って、絶対に死んじゃだめ、中国の人のところへ行ってもいいけれど、と。

そうしたら 4 月になって、同じ部屋で 30 人以上いたのに生き残ったのが 12 人でした。みんな、栄養失調で亡くなったのです。朝起きてみると冷たくなっていて、みんなで畑に持って行って置いてくるんですけども、その山がだんだん高くなって、氷点下 30 度、40 度になると、死体もぴんぴんに凍ってしまって、蠟人形のようになっているんです。朝行ってみると。ああ情けない、死んじゃだめ、死んじゃだめと言っていたのに、死んでしまった人もいました。

■ハルビンへ

4 月の中頃になって少し暖かくなってきてね、これからハルビンに出ませんかと言って。4 月 10 日くらいだったか。まだ寒いですが、ありったけの服を着て、その辺の毛布を切って羽織ってね、中国の人たちに笑われてもいいからってそう言って、本当にみずぼらしい姿をして、ハルビンに出ました。11 日間かかって出ました。まだたくさんの人があちこちの家にはいましたが、もしものことがあるといけなからと、同じ部屋の人たちと行きました。

ハルビンに着くと、日本人が入る収容所がありまして、そこに入ったんです。方正にいればよかったって後から思いましたが、そこはコンクリートで、敷き物もないし、4 月の半ばでもまだ寒かったです。そこで伝染病が大流行してね。発疹チフスが大流行して。身体にシラミがいっぱい湧いて、それが媒介して、熱が 40 度を超えて脳炎を起こして、もう変なことばかり言っている。そういう人たちが、コンクリートの上にいっぱい寝ています。私もその近くに、仕方がないから頭を並べていましたが、10 人でハルビンに出たけれど、生き残ったのは 5 人だけ。伝染病で亡くなりました。

それから、ある日、白衣を着たお医者さんが回って来たの。そして顔を見たら、前にいたハルビンの病院の先生じゃない——「先生！」って言ったら、「多鶴君どうしてここにいるんだ？こんなところにいたら死んでしまうじゃないか！」と。そのとき私も 40 度近い熱があったので、今度は自分の番だと思って、諦めていました。そうしたら先生が、「早く支度しなさい。病院へ連れて行くから」と言って、伝染病院に何人かをバスに乗って連れて行ってくれたのです。そしてそこで手当をしてくれて、一本の注射で熱が下がりました。私もまだ 21 歳でしたから、治ることも早かったんです。

みんなも元気になったので、日本へ帰る準備をしようとなりました。ところが母と妹は開拓団に戻っていらしたので、必ず後から行くからと固い約束をしていましたから、開拓団に戻ろうと思ったんです。ところがもうその時には行けないんですよ。治安が悪くなって、女の子が出て行ってはいけないと言われて。そして、友だちと二人でハルビン駅に行ったんです。そしたら、ソ連から逃げてきた兵隊が 7、8 人いて、汽車の窓から飛び降りて逃げて来たって言うんです。「どこへ行くんだ？」って聞かれて、「日本に帰りたいと思って」と言ったら、「おれたちはな、明日の朝、暗いうちにこのハルビン駅を出て、新京まで 10 日以上歩いて行くから、それが日本へ帰る近道だ」——と言うので、私はその話に飛びついたんです。

開拓団へ行くのは諦めて、母たちのことはどうなったか判らないけれど、私は日本へ帰る道を選んだんです。それは、正しい選択だったと今でも思います。兵隊さんをお願いして、その服装ではダメだと言われ、現地の満服を買って帽子を被り髪を切って、男装をして兵隊さんたちの間に紛れ込みました。そして翌朝、暗いうちにハルビン駅を発って、兵隊さんは道を知っていますから、新京を目指したんです。

新京に着いたのは13日目でした。新京からは、今度は奉天に向かって歩くって言うんです。私はもう歩けなくなってしまっていました。そしたら、高碓達之助（注：後記）という立派な方がいるから、その人のところへ行行って話をして来るようにって、兵隊が私に言うんです。みなさんご存知の方もいらっしゃるね。それで、高碓先生に相談に行ったんです。

「私たちは北の方から歩いて、命からがらやっとここまで来たんです。どうしたら良いのでしょうか？助けていただきたい」って言ったら、「あなたたちだけが日本へ帰りたいんじゃない、ここにいる人たちはみんな帰りたいんだ！」って言われて。でも、私たちにできることは何でもお手伝いするからと言って、またあくる日に行ったんです。

■孤児たちと葫蘆島から帰国へ

そしたら、「ここに400人の親に別れた孤児がいる、この孤児を連れて奉天まで行ってくれ。奉天まで行ったらまたお願いをして、葫蘆島（コロ島）まで行ってくれ」——と言われて、葫蘆島までの約束をしたんです。兵隊は12、3人おりましたから、すぐにトラックを持ってきて子どもを乗せて、奉天まで行きました。痩せて骨だけになった子どもたちです。食べるものは一週間に乾パン一つ、そして水をたくさん飲ませるように言われました。

そして兵隊たちと400人の孤児を連れて、無蓋車に乗せて、奉天から瀋陽へ行って、葫蘆島へ行きました。その間、一週間くらいありました。10歳以下の孤児です。大きい子どもは言うことを聞いてくれて、乾パンや水を配って、お手伝いをしてくれました。そして、葫蘆島に着いたのです。8月の12、3日頃だったか、もう忘れてしまったんですが、アメリカの兵隊が来て、子どもを葫蘆島の収容所へ連れて行ったんです。そして、葫蘆島から、8月15日に乗船をしました。日の丸を立てていたので、日本の船が来たぞ！来たぞ！って喜んで、本当はアメリカの船だったんですが。それから博多へ上陸したのです。

博多に上陸したら、厚生省の方が大勢いて、子どもたちを預ってくれました。「みんなここで別れだよ、元気を出してね！」と言って、別れました。厚生省の方に「この子どもたちはどこへ行くのですか？」と訊ねたら、それぞれ京都とか収容所があるところへ行ってもらおうと言われて、ハッと気付いたのが、自分の故郷のことでした。

■故郷の泰阜村へ

あつ、私には故郷があるんだ、一日も早く帰らなくちゃ、と思って、厚生省の方に切符をいただいて、汽車に乗りました。大阪、名古屋を通過して、泰阜村に帰って来ました。

泰阜村の門島という駅に降り着いたのが、昭和21年8月18日でした。夜10時頃でしたから、近くの家に泊めてもらって、翌朝早くに山道を登って行きましたら、同級生が下りてきて、「多鶴さん！あなた一人で帰って来たの？他の人はどうしたの？」——って聞かれて、その時には言葉が出ませんでした。それから、母の実家に行きまして、「よく帰って来たな、みんなはどうした？」って聞かれて、また言葉が出ないんです。

それから村中の評判になってしまって、「多鶴さんが一人で帰って来た」ってね。村長さ

んが来てくれて、どうか体育館で遺族の人にお話しをして欲しいって。そう言われましてね、二か所で話をしたんです。満洲へ行くときは元気だったけれど、こういうことだったって……。団長さんが、この惨事を一日も早く伝えて欲しいって、言い残したことを思い出してね、村の人たちが集まったところでお話しをしたんです。

でも、私はこうやって帰って来たけれど、大勢の人が亡くなってしまった。私は一人で生きて帰って来たことが、なんて言うか申し訳なくてね。それでも故郷に帰ろうと思って、やっとの思いで帰って来ました。役場にも挨拶に行つてね。昭和 21 年で、誰もまだ帰っていない時でしたから、私は必死で帰って来たのって、話をしました。

■今、思うこと

今、私の体験をお伝えして、ここでこうやって、お話しできることは、戦争というものはね、本当に悲惨なことですよ！もう二度と、日本は、戦争をするようなことがあってはいけないと思うけれど、わかりません。

つい最近、義勇軍の人に行き会ったら、「戦争が始まるね」っていうんです。それで驚いて「そんなことはないと思うよ」って。日本がまた戦争したら、本当に大変なことになるよってね。本当に戦争だけはして欲しくない。私は常々、そう思います。帰って来た私は、88 歳になりましたけれど、時々いくつになったのか、自分の歳を忘れてしまうのですが、神様が守って下さったのかと。私の話はこれで終わらせていただきます。

（質問）私は戦争を経験しておりませんので、失礼な質問になってしまうかも知れませんが、ソ連が参戦したときに、日本軍が率先して帰ったと。本来は住民を守るべき日本軍が自分たちが先に帰るなんて、私は人間として最低の行為だったと思うのですが、住民の方にはどういう説明があったのでしょうか？

（中島）とにかく皆目わかりませんが、日本の兵隊の姿は見ることはできませんでした。中国の人たちが、助けてくれたのです。それでも、中国の人たちにお世話になれば生きて行けると行った人たちが、30 年、40 年と帰れなくなってしまう、残留婦人となってしまうね。日本の兵隊といっても、残兵の人は何人か見ました。日本軍はほとんどいなかったですね。

（寺沢）関東軍は、早い時期から、南方へ下がるという戦略があったのですね。フィリピンへ行ったり、日本本土へ行ったり。それを補充するために、先ほどお話があったように、根こそぎ動員と言って 18 歳から 45 歳の男性が召集されて行きました。

私の父も開拓団にいましたが、赤紙が来たのが終戦の 2 週間前の、7 月 31 日です。関東軍は前年の昭和 19 年の秋の段階から、朝鮮半島へ立てこもって戦うという戦略でした。満洲などのその他の地域は、作戦地図にも「放棄地域」と書いてあります。

例えば、佳木斬（ジャムス）の町には関東軍がいなくなり、軍がいないと思われると困るので、国民小学校の少年たちに自分の背より高い銃をかつがせて行進させたり、松花部隊という部隊がありましたけれど、臨時編成の部隊を作って、装おうのですね。

軍から脱走して開拓団に戻った方もいますけれど、ごく少数で、当時の軍隊の規律は絶対的なものでしたから、ほとんどの方は軍の命令に従って南下し、結果としてはシベリアに抑留されることになる訳です。開拓団に家族を残したことに、忸怩たる思いはあったと思いますが・・・。



講演する中島多鶴さん（撮影：新谷陽子）

《編集部注》

中島多鶴（なかじま・たづる）さんのこの講演は2014年3月7日午後、＜「満蒙開拓平和記念館」を訪ねる下伊那の旅＞の参加者の前で行われた。

高碓達之助は、「満州重工業開発」総裁の時、日本の敗戦を迎えた。ソ連軍が満洲に侵攻した際、子供や老人の安全に奔走。また日本人会長として日本人の帰還交渉に携わる。

戦後、吉田茂に請われ「電源開発」総裁に就任後、鳩山一郎から政界入りを請われる。1955年バンドンでのアジア・アフリカ会議に出席、周恩来首相と会談。以後、中国から信頼され、1962年訪中し「日中長期総合貿易に関する覚書」に調印。廖承志と高碓のイニシヤルから取ったLT貿易など、日中国交正常化以前の日中交流に大きく貢献した。

母の愛は永遠

—「中国の母親の大きな情愛」と題した展示会の報告—

ハルピン市日本残留孤児養父母連絡会
事務局長 石 金 楷

■ 731記念館で『中国の母親の情愛展』

2012年8月16日、ハルピン市紅十字会と侵略日本軍731部隊罪証陳列館が主催し、黒竜江省社会科学院、ハルピン市日本残留孤児養父母連絡会が協賛した『中国の母親の大きな情愛』というタイトルの展覧会が731陳列館で開幕式を行なった。張顕友ハルピン市副市長、中国並びに黒竜江省、ハルピン市紅十字会責任者、残留孤児養父母、中国在留孤児の代表、ほか各界から80人あまりが参加した。

「中国紅十字報」、省市の報道関係、テレビ局、日本の朝日新聞…がこれを報道、社会に強烈な反響を呼び起こした。

共催団体であるハルピン市と市日本残留孤児養父母連絡会（以下、連絡会と略称）は、この展示の資料を提供し、展示の各種表題や説明表示に協力した。

連絡会は1984年にでき、当時は150人余りの会員がいた。通常の業務のほか、日本に帰国した孤児、日本の民間の友好団体、友好人士と広く連絡を取り合い、毎年、友好交流活動を展開してきた。また養父母、在中国孤児を登録すると同時に、国内外の関係資料を収集、内外の研究者、学者との交流を進め、残留孤児と中国の養父母という、特殊な歴史の条件のもとで生まれた歴史問題の究明に重要な貢献をした。

■ 学者や博物館と話し合い

近年、残留孤児の大部分が日本に帰国し、健在の養父母が、ますます少なくなってきたという状況により、「生きている歴史が次第に消えてゆく」という状況を考え、私たちは中国養父母記念館を建設し、この知られざる歴史を残す必要性を痛感している。その趣旨は中華民族の伝統的な美德を広く知ってもらい、中国人民、とりわけ中国の母親の大きな情愛を展示し、中国人民の人権意識及びヒューマニズムの精神を展示することによって、中国養父母と残留孤児という、この特殊な人間関係が、人間の恨みを超えた巨きな愛が、広く知られ、極悪な戦争を憎み、中日友好、世界平和の明かりをともすことになることを願うものです。この考えは多くの専門家や学者の賛同を得ています。

この目標を実現するために連絡会は関係部門および多くの博物館と相談してきましたが、さまざまな理由から、まだ成功には至っていません。

■ 展示と運営が決まる

2011年4月25日、日本から日本山妙法寺の岩田隆造氏が731部隊跡を訪問、当会の石金楷秘書長が招かれて合流、その折、731遺跡の館長・金成民氏が731記念館に常設の展示室を提供するから私どもの会が責任を持って展示と運営にあたる、という話がまとまった。そして同年6月10日、双方で「連合展覧協議書」に署名したのでした。

★ 石金楷さんは1月21日、残留孤児である夫人と日本へ永住帰国し、現在、所沢市の帰国者定住センターで訓練中。7月上旬に東京都に永住する予定。（翻訳 奥村正雄）

わたしの方正之路

ドキュメント

『10日間だけの祖国』

総会前の特別試写会へどうぞ！



雪の彫刻博で食べた 郷土料理

奥村正雄

■ 撮り残していた真冬のシーン

厚労省が「孤児である物的証拠がない」ことを理由に中国残留孤児と認めない徐士蘭さん（推定年齢72歳）が、羽田澄子監督のドキュメント『嗚呼 満蒙開拓団』の公開と、これに先立って北京の日本大使館で行われた試写会で、映画を見た当時の中国大使宮本雄二さんが、

「この女性は気の毒だ、私のポケットマネーでも、ひと目祖国を見せてあげたい」と漏らしたと言が多くの人々の共感を呼び、署名とカンパの運動が広がって行った。

この動きに応じて祖国日本への短期訪問のビザを申請していた徐士蘭さんは、中国側（黒竜江省）と日本側（瀋陽の日本総領事館）の厄介な手続きに苦労をしながら、ついに、今から3年前2011年のちょうどこの時期、あの「東日本大震災」の先行きが全く不明で、日本中が不安と混迷のさなかにビザが発行された。彼女と私たちの決断が決まって、6月8日から17日まで“10日間だけの祖国”訪問が実現した。

■ 「これが祖国の山河！」

3年前の6月8日、新潟空港で初めて祖国の土を踏んだ徐士蘭さんは、迎えた私たちと抱き合って涙を見せた。そしてそれから乗車した2時間足らずの上越新幹線で東京へ向かう間じゅう、窓外に現れては消える、田植えしたばかりの水田と、その背景に連なる祖国の山と流れる川を、瞬きひとつせずに凝視し続けた。

祖国の首都・東京での乗り換えでは「動く歩道」に戸惑い、千葉へ向かう電車の中から、初めて見る海・東京湾を、何度も体の向きを変えて眺めていた。

千葉市美浜区で用意したホテルのツインの部屋には、夜中におなかがすいた時に食べるようにと、インスタントラーメンと肉まんを入れておいた。しかし徐士蘭さん母娘は、後日、「いつもお腹いっぱいだったので、これに手をつけることはなかった」といって返してくれた。母娘が滞在した10日間、ふたりのどんな些細な行動もカメラに収めていた吉川雄作カメラマンも、さすがに、この非常食にまではレンズを向けなかったようだ。

■ 疤痕痕（ほうそうのあと）への期待

二人が日本に来る前、私たちは、限られた10日間という短時日に、何を予定し、そのために何を準備しておいたらいいかと、検討を重ねた。そのひとつが徐士蘭さんの腕に残る疤痕痕（あと）を調べてもらうことだった。

侵略戦争当時、旧満州国で生まれた乳幼児に義務付けた日本の疤痕痕は中国が現地の中国人の乳幼児に施した疤痕痕とは、腕に残る痕が違う、という考えに基づいていた。私たちは厚労省でやってもらうことを予定したこの検証に、かなりの期待を抱いていた。

ところが徐士蘭さんが来日する少し前、私たちの全く予期しない“事件”が起きた。厚労省の厳重な審査をすべてパスし、残留孤児であることに間違いなしとして、日本に永住帰国した男性が、来日して間もなく、あることから真相が発覚、残留孤児ではなく、ニセ

孤児であることが判明したのである。

私たちが期待をつないでいた徐士蘭さんの疤痕痕は、この一件で掌を返すように顧みられなくなってしまった。

■ 淡い期待 DNA鑑定

私たちが厚労省の、もしかしたら徐士蘭さんを日本人と認定する決め手になるかもしれないと期待したことが、もう一つある。それは、ある帰国残留孤児が「もしかしたら私の従妹ではないか」という推定に基づいて、血液のDNA鑑定をしてもらう、という試みだった。その帰国残留孤児が中国で生まれ育った開拓団と、徐士蘭さんが母親と別れた方正県郊外の会発村とは距離的に近い、という理由からだった。だがこの期待もまた疤痕の痕と同様、淡い期待に終わった。DNA鑑定の結果は血のつながり「なし」だった。

■ 拉致・強要…

再び話は今冬の方正訪問へ。1月22日、新潟からハルピンに着いた吉川カメラマンと私は、迎えに来てくれていた徐士蘭さんと3女とともに方正へ向かった。予約しておいた、いつもの宿に荷物を置く間もなく、方正市内の料理店に連れて行かれた。そこには徐士蘭さん、丛会霞さんはもちろん、彼女のご主人、次女夫婦、4年前の徐士蘭さん来日のメール交信で中国側の司令塔になってくれた孫の孫洪波さんがご主人と愛児と一緒に現れるなど、一族郎党みんなが勢ぞろい。翌朝は宿の食堂で朝食をとった直後に、吉川さんとすべての荷物ごと、徐士蘭さんの次女夫婦の家へ“拉致”された。いま食べたばかりと言っても「食べろ」、「さあ飲もう！」が延々と続いた。

■ 田舎ほど残る旧正月ムード

孫洪波さんのご主人の車で、いまから69年前、徐士蘭さんが実母と別れた会発村へ向かった。その途中、方正の町でも、途中通り過ぎた小さな町でも、あと1週間後にやってくる春節(旧暦の正月)の売り出しの露店や屋台が、正月ムードを盛り上げている。ところが、その3時間後、ハルピン市内に入ったら、まもなく春節を迎える熱っぽい雰囲気や昔懐かしい正月用品売り出しの露店などはまったく見えない。近年、北京や上海など、大都市では、かつて春節にはなくてはならなかった爆竹が禁止されるなどしたために、伝統の年越しムードが希薄になってしまったようだ。

■ 氷上のリズムと囲炉裏の味

方正、ハルピンで撮り残していた映像を撮り終えた後は、折からハルピンで開催中の氷雪まつりを見学した。第1夜は抗日英雄の名を冠した兆麟公園が会場。そもそもハルピン氷まつり発祥の地で、1980年代末に、2度ほど、ここへ足を運んだことがある。日本の札幌からの代表が来て、会場で氷を刻んでいた。当時と比べたら、規模も整然とした会場デザインも一新されて、祭りの成熟を感じた。

この会場では手狭になったこともあり、第2会場が松花江の対岸の、広大な会場いっばいに作り上げた壮大な氷塊都市である。私が足を止めたのは壮大な氷の建築物の広場のステージで若い男性歌手が声をからしてテンポよく歌い、踊ると、その波動がステージ下で踊る若い男女ファンと一体になって氷の殿堂を揺るがした。見ていた私も思わずリズムに合わせて足踏みしていたほどだった。

翌日、太陽島の「国際雪の彫刻芸術博覧会」で食べた昼食も印象に残った。氷の家の中に4人が掛ける席に案内された。中央の炉には大きな淡水魚のムニエルが食べごろになる。周りを囲む鉄鍋に、トウモロコシの粉をぺたぺた貼って、それが香ばしく焼けると、皿に取ってマヨネーズ風のたれで食べる。

連日、ご馳走を食べ飽きた舌には、この田舎の素朴な農民食が新鮮で美味かった。

4人で作ったドキュメント

『10日間だけの祖国』

を総会に先立って試写

飯白 栄助

3年前の6月8日、快晴の日本海上空にハルピンからのCZ615便が機影をあらわした。そしてやがて入国手続きを終えた徐士蘭さんと3女の从会霞さんが急ぎ足で待合室ロビーに現れ、私たちは彼女と祖国日本で初めて対面した。このロビーの高い天井近くの壁面に飾られた、新潟の有名な郷土の風合戦の大きな武者絵が5人を温かく見下ろしていた。

■ 優しさの冷たさ

振り返ってみれば徐士蘭さん母娘が祖国日本に滞在した時間は、たった10日間だけではない。しかし、二人を迎えた私たちの10日間は、緊張の時間も、いらだちの時間も満足の時間も、振り返ってみれば、その何倍も長かったようでもあり、あっという間に過ぎて行ったようにも回想できる。

その中で、時間が長かったようで短く、短いようで長かったのは、厚労省での会見だった。あらかじめ手続きにしたがって順を踏み、厚労省孤児等対策室に対応を申請してあったこともあって、会見の部屋も、狭いながら、あらかじめ準備しており、通訳を交えて話を聞いてくれた室長補佐のSさんは物腰もソフトで笑顔を絶やさず、全体としてのムードはとてもよかった。

だが反面からみれば、念願かなって祖国の厚労省という、孤児ならぬ孤児にとっては最大かつ最終的なアピールの場で、親身に話を聞こうとする親身さも、疑問があればさらに身を乗り出して聞こうとする素振りも場面も、ついになかった。

■ 姉妹のような抱擁

それとは対照的に、あらかじめ予定された場面ではあったが、だれも予想しなかったシーンが、シナリオもなく、ひそかに仕組まれたわけでもなく、不意に出現して周囲が一瞬あつけにとられ、次の瞬間、見る者の胸を熱くしたシーンが現れたのが千葉会場での歓迎会だった。予定された歓迎の挨拶も中国語の合唱も終わって、徐士蘭さんへ個々にプレゼントを渡す場面になった。と、彼女に初対面のMさんが長年、この瞬間を待っていたかのように徐士蘭さんを強く抱きしめて離さなかったのだ。徐士蘭さんも、まるで初めて会う姉妹のように抱いて離さなかった。Mさんの父親が戦前、治安維持法で何年も留置所暮らしをした背景を知る者にとっては、徐士蘭さんもまた70年余にわたって、わが家に戻れ

ない人生を生きている人として納得できる感動のシーンだったのだ。

■ 一緒に作った映画

こんどの試写会で、さまざまな意見や要望が出て来ることを私たちは願っている。徐士蘭さん母娘にひと目、祖国を見せてあげたいという私たちの訴えに応じてカンパを送ってくれた多くの人たちと、一つになって作り上げた映画だと思うから。

(いいじろ・えいすけ：1933 年生まれ。1944 年（昭和 19）4 月、第 13 次興安東京開拓団として満洲へ。1958 年帰国後、日中友好運動に携わる。現在、千葉中国帰国者支援交流の会会長)

“厳冬の” ハルピン・方正

会 員 吉 川 雄 作

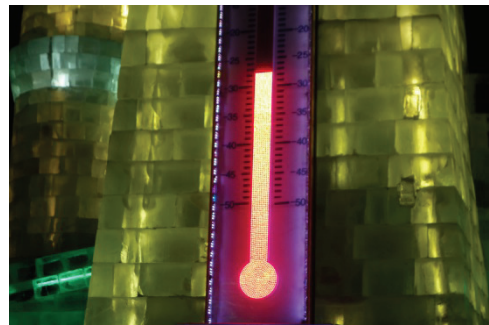
当会参与奥村正雄氏のもとの四人組で、2011 年、多くの方々のご協力により招日が実現した（未認定中国残留孤児）徐士蘭さんを主人公に、ドキュメンタリー映画の制作を進めていることは、すでに奥村氏が会報 15・16 号で予告されており、私も前号に中間報告めいたことを書かせてもらった。目下鋭意制作中……と言いたいが、“心余りて力足りず”（?）、諸般の事情により遅れに遅れ、招日 4 年目を目前にして、なお未完成状態にある。

しかし、まだ完成をあきらめたわけではない。

◆今年 1 月、構成上どうしても必要な場面を撮影するため、当会主催の「ハルピン氷祭りの旅 2014」に参加し、初めて冬のハルピン・方正を訪れた。

北海道札幌で生まれ育った小生、冬の寒さや雪に対する構えは、自ずと備わっていると思っているが、“厳冬の”大陸体験は初めてで、滞在中にわが最低気温体験記録の更新を果たすこととなった。

3 日目の夜、ハルピンの冬の最大観光スポット「冰雪大世界」では、巨大な氷柱の温度計がマイナス 27℃を示していた。最も寒さが身に伝えたのは、見学終了後、駐車場から出てくるはずのバスを待っているときだ。じっと立っていると防寒靴の中で足先の感覚が無くなってくるような感じがして、これぞ“厳冬極寒”と実感した。



喜寿を前にしてなお、こうした初体験や記録更新ができたことは、むしろ幸いと言うべきなのかもしれない。

◆今回参加の大目的の一つは、3 年前、ビザの発給申請のために徐士蘭さんと三女の叢会霞さんらが何度も往復したという方正～ハルピン間、“厳冬の高速道路”を撮ることだ。

寒さと雪を覚悟して臨んだが、5 日間の滞在中、最高気温はマイナス 10℃、好天に恵まれて積雪はさほど多くはないし、風もそれほど強い日はなかったので、思ったより楽に過ごすことができた。本格的な降雪に見舞われるようなこともなく、帰国後、日本各地であつた交通機関の停滞や町が孤立……といった情報は皆無であつた。

市街地では、清掃員が吹き溜まりの少しばかりの雪を竹箒で掃いているのを見かけたが、除雪車の稼働はついぞ見ることなく、おそらく、それがかの地の日常なのだろう。

郊外へ出ると左右に広がる広大な畑地や丘陵地帯は、さすがに一面の雪景色であつた。しかし、特別な防雪設備などはなく、路面に雪はほとんどない。常にマイナス 10～20℃の低温・低湿度なので、降った雪も積もることなく風に飛ばされてしまうのだ。

実は、密かに、ハルピン～方正間の高速道路上で豪雪・吹雪のために立ち往生……の場面をも想定していたのだが、杞憂であつた。



◆方正では、徐士蘭さんが実母から養父母に預けられたという**会発村 明德小学校**を訪れた。

前回(2012年6月)は建て替え工事中で、大きなクレーンが動いていた。今回はちょうど春節を控えての冬休み中だったので、短時間だが徐士蘭さんらとともに校庭内に入らせてもらい、撮影ができた。

この小学校には三女の叢会霞さんも通っていたというが、徐士蘭さんは「学校にも行かせてもらえなかった……」と羽田澄子監督の『嗚呼 満蒙開拓団』の中でも訴えている。

◆再び“厳冬の高速道路”を飛ばしてハルピン市街に戻り、徐士蘭さんらのビザ発給にお力添えを頂いた**黒竜江省外事弁公室の副主任 徐 広明氏**を訪ねた。周囲の棚や壁に沢山の交流記念物が並ぶ応接室の一隅に、北海道のカーリングチームのペナントがあった！

ひとしきり話を交わした後、階下のビザ発給事務室で、外来者が途切れた合間に、「発給窓口の前でビザの交付を待つ徐士蘭さんと叢会霞さん……」という想定で、イメージ場面の撮影をさせてもらった。

通常、こうした場所での撮影はなかなか難しいことと思うが、徐広明氏のおかげで、貴重なワンカットを至極スムーズに撮ることができ、今回の撮影目的を果たした。

こうして撮影してきた映像がどれほどが作品に活かされるかは完成まで不明だが、6月8日の方正友好交流の会総会当日には、試写の機会を与えられている。

◆“極寒”を楽しむ ハルピンの人たち



凍結した松花江の中 「ハルピン冬期水泳場」

水温のほうが高い道理ではあるが……



兆麟公園 氷祭り 日本の参加作品

太陽島 国際雪彫芸術博覧会 入り口の歓迎の像と 会場最奥部の 巨大雪像



高社郷集団自決の悲劇を繰り返さないために

—終戦の事実を告げられなかったための悲劇—

篠原 孝

私は、予算委員会で特定秘密保護法に関連し、国が国民に重大な秘密を知らせない罪の例として、1945年8月24日の高社郷の集団自決事件を取り上げた。関係者の皆さんの涙声での電話等もあり、多くの反響が寄せられたので、非力でありうまく伝えられるかどうか分からないが、ここに悲劇の一端を時系列で簡単に紹介しておきたい。

理想の満州国建設

1936年広田弘毅内閣は、20年間に500万人を満州に移住させ、人口の10%を日本人にする「満州開拓移民推進計画」を決議した。農家の次・三男対策、農村の過剰人口の解消につながるので、補助金をつけて奨励した。満州人の農地を強制的に安く買上げたりして、移民事業も2000万ha（今の日本の農地面積の4倍強）を用意した。増加する日本人を食べさせるための食料生産基地の建設を夢見ていたのである。『王道楽土』『五族共和』等のスローガンを掲げる国家的大プロジェクトとなった。

長野県の開拓農民にはソ連国境に近い最北の地区割り当て

狭い中山間地域の3反百姓が多い長野県はいち早く国策に従って、約30万人のうち3万3744人（12.5%）と、2位山形県（1万3252人、6.0%）の倍以上も送り込んだ。以下、宮城、熊本、福島、岐阜、新潟と貧しい農業県が続く。15歳から18歳の少年が中心の青少年義勇軍も約10万人送り込まれたが、やはり、長野県が6595人（6.5%）と1位であり、波田小学校は卒業生の半分が出向いている。

日本国政府は長野の山間地の農民が寒冷地にも慣れていることから、ソ連国境に近い最北の地に開拓地を設定した。開拓農民は農業研修に加えて軍事的訓練も受けており、ソ連に対する「開拓農民の防波堤」が造られたとあってよい。いってみれば満州開拓武装移民であり、農民を治安維持に当たらせる屯田移民政策であった。その証拠に、開拓農民は、銃も供与され武装されていたのだ。皮肉なことに、この銃が後に自決の道具ともなった。

一方、勤勉まじめな長野の開拓農民はそんな政府の意向は知らず、喜び勇んで開拓と農業生産に全力をあげていた。

北信からも続々入植

大日向村は村の半分が満州へ渡った。しかし、皆が諸手を挙げて賛同したわけではない。38年末、木島平村の佐藤福治村長は、「良い宣伝にだけ乗ってはいけぬ」と熱気を冷ましている。それでも39年5月木島平村からも皮切りに13人が渡満した。9月、桜井万治郎

（元平野小学校長）団長以下3人の幹部が茨城県内原の幹部訓練所で研修を受けて渡満した。国の方針で、地縁を重視した出身地別の開拓団が編成され、方正県万金山に高社郷開拓団が落ち着いた（下高井郡の高井富士と呼ばれる「高社山」から命名）。その後、続々と満蒙開拓が進められ、その中に後述の高山すみ子一家もいた。

41年9月、桜井団長が結核に罹っていることが判明した。当時は労咳と呼ばれ、死に至る病と恐れられていた。桜井団長は、地べたに頭をすりつけて置いてくれとお願いしたが、石を投げつけられて追い出され無念の帰国となった。自分が団長で残っていれば、あんな自決（後述）は防げたと悔やみつつ、92歳の天寿を全うしている。（なお、桜井団長は私の祖母の兄、つまり大伯父である。）

日本人が開墾してやったという間違い

中国人（満州人）が能力不足で耕せないでいる未開の大地を、技術力・能力に優れた日本人が代わりに開墾し、理想の国・満州国を建設するというスローガンが掲げられていた。そして、実情を知らない者は、今でも日本の開拓農民が開墾してやったと愚かなことを言っている。中国でも韓国でも日本の残した産業インフラを基に両国が発展したというのと同じ類であり、無粋な考えである。農地を奪われ、植民地支配に屈した隣国に対して失礼である。

戦前の満州国は日本の希望の星

当時、日本は満州に着々と進出しつつあり、今から見れば明らかに膨張路線を暴走中だった。軍閥の一人張作霖が日本に距離を置き始めると、28年張作霖の載る列車を爆破し殺害。31年、板垣征四郎大佐、石原莞爾中佐両名の策謀により満州事変（柳条溝事件）が勃発、軍部と関東軍が政府の中枢を揺さぶり、関東軍の専行・専横が更に進んだ。32年清朝の廢帝愛新覺羅溥儀を執政にして満州国を建国した。リットン調査団は独立国と認めず、33年松岡洋右全権が大演説して国際連盟を脱退している。37年には、盧溝橋事件を契機に日中戦争へと進み、日本は満州を完全な属国とし、投資を拡大していった。その一環として、前述の満蒙開拓が国策として進められた。

日本は、今で言えば北朝鮮と同じような孤立国となったのである。そして、今の北朝鮮人民が気付かないように、信州の山の中の村は何も知らされていない。満州の理想国の建設にいち早く協力体制をしいたのである。その後、40年遠い欧州の独伊と三国同盟、更に41年には日ソ中立条約を結び、ついに41年12月8日、真珠湾攻撃し、第2次世界大戦へと突入していった。

余談をちょっと挟めば、世界的指揮者で35年に生まれた小沢征爾の名は関東軍のトップの板垣征四郎と石原莞爾の名から一字ずつとってつけられている。当時は、関東軍・満州こそ日本の躍進の象徴だったのである。夢の満州国は頓挫したが、小沢は武力ではなく、音楽で世界に飛び出し、父親の命名に応えたことになる。

農民にはすぐわかった侵略の事実

満州には、今の原発安全神話と同じく、日本の連戦連勝しか伝えられていなかった。しかし、こうした浮ついた動きと比べ、文字通り地に足が着いた農民の目は確かである。安倍首相は侵略かどうかは歴史学者が決めることだと言っているが、農地に関する限り、侵略は明らかである。

関東軍か満州国官僚が列車の中で某団長に、開拓農民に外を見せないために幌を下ろせと命じたという。茶目っ気があり好奇心旺盛なその団長は、皆には厳格な指示を出し、本人はちゃっかり幌の外を見たところ、裸足の農民が線路脇を歩いていた。そして、やっと着いた開拓地には耕した畝の跡があった。近くに住んだ小屋もあった。

自ら耕す農地に愛情を注ぐ農民だからこそ、その農地を奪われた農民の気持ちが痛いほどよくわかる。先刻列車から見た裸足の満州人は、自らの土地を追われた哀れな農民だったのだ。これは大変なことをしてしまった、こんなことは長続きするはずがないとすぐ覚った桜井万治郎も、すぐさま何とかして早く帰国する方策を考え出したという。ところが、運命とは皮肉である。前述のとおり本人だけが途中帰国し、数少ない生き残りとなった。

日中友好活動が長野県で盛んな理由

自分の農地を奪った憎き日本人であるにもかかわらず、中国人は気を失って2日間眠っていた高山すみ子を助けてくれた。生き残った幼子を我が子として育ててくれた。逃げそびれた婦女子を妻として迎え入れてくれた。その上、方正（ほうまさ）県には、日本人の墓地も建ててくれた。かくして長野県の多くの開拓農民は中国人にはすまないという気持ちを持ち続け、感謝の念を抱き続けている。それ故、日中友好協会（井出正一会長）の活動は全国一、二を誇る。それを知る中国は、北京オリンピックの聖火リレーを友好県の長野県で行った。

根こそぎ動員で男手は開拓地でも召集され、残るは老人と婦女子のみ

戦況が大本営発表とは裏腹に大変な状況になっていることは、最末端、最前線の中ソ国境だからこそ余計に感じられた。重要な男手（働き手）が次々と召集され、現地には老人と婦女子ばかりになりつつあったからだ。正確にいうと、いつものとおり、最果ての地にこそしわ寄せがいつていたのかもしれない。

関東軍は、1945年に3万人「根こそぎ動員」を行い、数の上では78万人の大部隊となっていたが、かつての力はもう残っていなかった。

高山家には長男と長女が生まれ順風満帆にみえたのも東の間、夫は召集されていた。

予測されていたソ連参戦、いち早く逃げた関東軍と高級官僚

そして、魔の8月9日、日ソ中立条約を破ってソ連が突然参戦してきた。後講釈でいえば、43年のヤルタ協定以降、更には48年5月のドイツの敗北後は、ソ連軍の極東への移動が活発になっていて、満州でのソ連の参戦は時間の問題だった。梅津美治郎関東軍参謀総長は、6月4日には、北部の満州地域を放棄して、防衛線を大連—新京—図們の三角線まで南下させ、持久戦に持ち込む作戦を指示している。諜報戦が繰り広げられ秘密厳守を徹底

していた満州では、こうした軍事秘密は開拓農民になど全く知らされない。何と8月8日に現地に入植した一団もいた。まさに悲劇である。一方、ソ連参戦を察知した一部の高級官僚や軍幹部は、トラックや車を徴用し、列車も確保して早々と逃げのびている。

ソ連が参戦で暗転した高社郷

しかし、開拓農民の間では、ソ連は絶対参戦してこないということになっていた。高社郷を管轄する宝清の西山393部隊より電話で避難の指示があった。団の中で真剣な議論が行われた。「軍と協力して団を死守しよう」「満州に骨を埋める」「最悪の事態には婦女子を処置する」いろいろな意見が出され、青酸カリや剃刀も用意された。8月11日豪雨の中、逃避行が始まった。頼りにしていた部隊地に行くも、「無敵関東軍」は雲散霧消、もぬけの殻で、いち早く安全な地に逃げ去っていた。守ってくれるはずの関東軍は職務放棄してしまったのである。移動手段もなく、徒歩で避難するしかなかった。開拓農民等残留邦人は、関東軍の命により国境警備軍を結成し、軍人でないのにソ連とも対峙したのである。

8月12日朝、古幡副団長は、妻と20歳を超えた息子2人を殺し、最悪の事態への対処を身を持って示した。トップとしての壮絶な覚悟を示したのである。黙って逃げ去った軍人・官僚と比べその健気さに涙が溢れ出る。壮絶である。私が推察するに、これが24日の集団自決の引き金になったのではないか。

山崎豊子と宮尾登美子の伝える満蒙からの逃避行

私のこの記述の大半は、『ノノさんになるんだよ—満蒙開拓集落の底から—』（高山すみ子）によっているが、一般的には、『大地の子』（山崎豊子）が詳細に記している。

1984年、胡耀邦総書記の許可を得て、主として南信濃郷をモデルに綿密な取材を重ね書き上げている。取材中に涙を流したのははじめてだと述懐している。それだけ酷い話が多かったのだろう。ソ連国境に近い開拓村に住む、国民学校1年生の主人公松本勝男（陸一心）の物語は、ソ連の侵攻から始まっている。他に宮尾登美子も自らの体験を『朱夏』に残している。ただ後者はあまりに悲惨なためか、宮尾作品としては珍しく映画化・ドラマ化されていない。宮尾も一番書くのが嫌だったと述べている。

終戦の事実なら伝わらない不思議

15日、終戦。17日、中村中隊から避難先等の指示があったのに、まだ終戦の事実が告げられていない。ひょっとすると、ごく一部の団長レベルには伝わっていたのかもしれないが、少なくとも一般農民には知らされていない。

これこそ今風に言うなら、特定秘密とされており、「由らしむべし知らしむべからず」が徹底されていたのである。特定秘密保護法を貫く考えも同じであり、私は背筋が寒くなる。国会では特定秘密で一番多いのは航空写真などと、人を馬鹿にした答弁が続くが、このままいくといずれ再び同じ間違いが繰り返されるに違いない。

19日、終焉の地となる佐渡開拓団部落に着く。何度も血路を開こうとするが失敗し、23日再び戻る。長野県関係4団のほか、新潟県の清和開拓団他3000～5000近い難民が終結し

ていた。しかし、守るべき関東軍はいない。この事態を山崎豊子は「棄民」と表現した。国から見捨てられたのであり、まさに的確な表現である。

23 日不時着したソ連軍偵察機を一部の団員が焼いてしまう。これは『大地の子』の有名なシーンともなっている。これも、終戦事実を知っていたら起こりえないことだった。ソ連からすれば、無条件降伏したのに何をするのかと怒り心頭に発したであろう。

集団自決への途

どう対応するかは、各開拓団に任されることになる。各団とも意見が分かれた。ここで、高社郷の 600 人余は、他の団と異なる行動をとる。ソ連軍の報復攻撃を予測し、脱出不可能とみて、全員で自決を決定した。古幡副団長は「生きて辱めを受けるよりは、死して護国の礎になろう。体力のある者、夫とともにある者は、今夜脱出を計られたい」と訓示した。残った年老いた一人の父は、若い息子に逃げてこの悲惨な様を必ず後世の人たち、本国の人たちに伝えよと言ひ残し、見送った。体力に自信のある 30 数名が脱出し、何人かは生き残った。そして、この惨劇の一部が我々に伝えられることになった。

「ノノさんになるんだよ」と銃を向けた母

高社郷の団員は 24 日夜から 25 日未明にかけて、大きな建物の中に大火葬場を自らの手で造り上げ、大人はお互いに殺し合い、子供には言わせて銃を向けた。中には、死を覚り逃げる子供もいたが、大半は親のいう事に従い、514 人が自決して果てた。母親や幼児には薄く口紅が塗られていた。この時に不安げな幼子に言った高山の言葉が「ノノさん（仏さん）になるんだよ」である。高山すみ子本人は自決を前に襲撃を受け、2 日間意識不明の後、中国人に助けられた。

死ぬも地獄、残るも地獄

高社郷の自決を機に他の団も解散し、脱出する者と残る者に分かれた。26 日、日本人女性目当てのソ連軍のトラック 3 台（30 人余）が来たので、必死に抵抗、20 人余を殺害、それに対して怒ったソ連軍が、翌々日 1200 人の大部隊で報復攻撃。残ったほとんども壮絶な最後を遂げる。

この佐渡開拓団の一連の出来事は満州最大の悲劇と言われている。他に記録が残っているのは、新潟の清和開拓団 883 名のうち、654 名がここで死亡したことである。生き残った者の多くも難民収容所で死亡。46 年に日本の土を踏めたのは、わずか 50 名だった。そのうち半分近く病死した。この引き揚げ者は後に北海道下川町に入植している。

中国残留孤児と残留邦人

中国人が助けてくれたわずかに生き残った婦女子十数名は、中国人に拾われ養育された。これが中国残留孤児である。当然だが残留孤児も残留婦人も長野県関係者が一番多いと思われる。（中国帰国者の都道府県別定住状況をみると、職のある東京、大阪、神奈川について、420 人 1319 世帯員が長野県に住みついている。次いで、埼玉、愛知と続き、田舎の件で 200 人を超える県はない。）

約 30 万人といわれる開拓農民のうち生きて日本に帰ったのは、約 11 万人にすぎなかった。日本軍兵士のシベリア抑留は 60 万人で、過酷な強制労働で約 6 万人が命を落としたが、それでも 9 割以上生き残っている。開拓農民のほうは、6 割近い約 18 万人も死亡している。1 番悲惨な目に遇ったのは、やはり最北の地の開拓農民である。生き延びた者も、逃げまどう中 9 月になりやっと終戦を知った。

夫は以後一度もノノさんになった子供には触れず

高山すみ子は、私が時折家を訪ねると、終戦を知っていたら絶対自決をしなかったと悔やむ。私は『ノノさんになるんだよ』を読むたび、涙を禁じ得ない。幸い夫庄司は 4 年後の 45 年 9 月シベリア抑留から無事帰国した。上陸後もらったキャラメルを 1 つも食わず、2 人の子供にやろうと木島平村に持ち帰った。告げるのも辛いノノさんになった話をする、夫は「そうか」と一言答えてだけで、以後死ぬまでこのことには一度も触れなかったという。何という思いやりのある夫婦愛であろうか。筆舌を尽くしがたい修羅場をくぐり抜けてきた二人だからこそ通じ合えるのだろう。私が一番涙するのはこの場面である。

非戦国民を救うという常識の欠如した戦前の日本

戦争という何でもありの世界にも一定のルールがある。今誰もが知っているのは、非戦闘員を攻撃してはならないことである。アフガニスタンやパキスタンで無人爆撃機が民間人を誤射して問題視されている。私の知識は十分ではないが、他にも欧米先進国では、敗戦の覚悟をした国家や軍が行うことは、非戦国民の安全を図ることであるという。

もちろん、ヒトラーのようにかつて熱狂的に支持したドイツ国民がそっぽを向いたことから、自国民さえ全く助けようとしなかった者もいるが、後任のカール・デニッツは、ソ連軍に包囲され孤立をした、現在のカーニングラードの 200 万人の同胞を、海軍船艇を総動員して救出している（ハンニバル作戦として知られる）。それを我が日本国や軍はしなかった。というよりも、最後までソ連参戦の情報も伝えず、終戦の予定すら秘密にして平然と放置していたのである。国民を救うという発想がなかったのだろう。それを今、アルジェリアの人質事件を盾に、民間人を救出する情報収集のため国家安全保障会議が必要だ、というまでに急成長（？）した。本当なのかと疑ってかかる者が多いのは当然である。

軍人のシベリア抑留には補償が出、抑留中に死亡した軍人は靖国神社に祭られても、何も知らずに自決した名もなき開拓農民は何も報われず、忘れ去られていく。あまりに哀れであり、不公平である。

大津敏男と山本慈昭の功績

ただ、特筆すべきトップもいた。大津敏男樺太庁長官である。8 月 9 日のソ連の対日参戦で戦いが起ると、8 月 24 日の豊原市（現ユジノサハリンスク）が占領されるまで、樺太住民の内地への疎開に尽力した。このため、残留孤児の問題等は発生しなかった。満州国官僚や関東軍にもう一人の大津敏男がいたら、開拓農民がこんなひどい最期を迎えずにすんだはずである。ただ、日本が強制的に連行して韓国人は置いてきぼりにされ、ソ連との国交がないままずっと放置され、帰国の機会を失っている（「滞在者が大半の国の悲劇」サ

ハリン報告その4 (2006年9月20日)。

もう一人この関係で感謝すべき者に、残留孤児の帰国に生涯を捧げられた山本慈昭がいる。周恩来首相に手紙が届き、1980年になってやっと訪中が実現した。彼の働きがなければ、この動きの本格化はもっと遅くなったに違いない。

なお、山崎豊子は、これらの残留孤児を泣きながら取材したという。そして敗戦で置き去りにされたのであり、自民の意見でなったのではないからといって「戦争孤児」としか呼ばなかった。日本人とも知らず、あるいは知らされても、小日本鬼子（シアオリベングイズ）日本帝国主義の子といじめられ、牛馬の如くこき使われている戦争孤児の上に、日本の繁栄は成り立っていると記している。

靖国神社参拝の問題点

安倍首相は靖国神社に参拝してどこが悪いと言う。

しかし、満州三大悲劇の一つといわれる高社郷集団自決という酷いことをさせた責任者は裁かれて当然ではないか。東京裁判が戦勝国の裁判でけしからんというなら、なぜ日本国で責任者を罰しないか。この件でいえば、私は少なくとも開拓農民に8月16日にも終戦を告げるなど命じた者は重罪にすべきだと思われる。少なくとも重大な決定をして多くの人の命を奪った責任者はご遠慮いただいてもよいのではないか。

昭和天皇は、その点を十分に承知され、A級戦犯を合祀した1978年以降絶対に参拝されなくなったに違いない。参拝者は昭和天皇のお気持ちに背いていることにならないかと問いたい。

靖国神社に祭られるべき者と資格のない者

私の父方の大伯父の一人も靖国神社に祭られている。九段宿舎から朝のバスで靖国神社の前を通過する際は手を合わせた。まどろんでいて忘れた時はどうも気が引けていた。私は、一兵卒の大伯父もその他の兵士も、開拓農民と同じく国策で駆り出され尊い命を投げ出したのであり、祭られて当然だと思う。そして日本国民や子孫がお詣りして当然である。ただ、もしも開拓農民約30万人のうち6割近くの18万人が命を落とす重大な判断ミスをした指導者が一緒に祭られるとしたら、私は釈然としない。やめてくれと叫びたくなる。

何も知らずに極寒の地に行かされ、お国のために自決した人たちはあまりに哀れである。高社郷集団自決事件を知る者も少なくなり、慰霊祭も年々参加者が減り、13年にはごく少数の有志で行われただけである。なぜなら家族全員で自決したのであり、直系の子孫はいないからだ。ごくわずかの生き残りの縁者も年々亡くなっていく。こうしていずれ誰からも忘れられていく。

もしもA級戦犯が靖国神社に祭られるとしたら、何も知らずに軍人と同等以上に国を想い、満州の地で自決という形で果てた無辜の民こそ祭られる資格があるといわねばならない。

国家に秘密を独占させてはならず

私の予算委のTV中継視聴者のごく一部は、特定秘密保護法に結び付けるのはこじつけ

であると指摘してきた。そう思われるのならそれでいい。しかし、国家は情報をコントロールし、都合のいいことだけを流し、必要な情報は隠匿する。満州では、事実上上述の板垣・石原コンビが自ら柳条溝を爆破しておきながら、張学良のしわざと見せかけたのを皮切りに、熾烈な諜報戦が繰り広げられた。その過程で関東軍は、情報操作つまり軍事秘密の保護と漏洩に対する厳罰という姿勢を強化していた。私はこの延長線上に、満蒙開拓団に対する冷酷な仕打ちがあったと思っている。

長野県の良識に安堵

私は安堵している。こうした辛酸を舐めた長野県民は、国家の犯す過ちのこわさが記憶に残っていたのであろう。東京新聞によると、特定秘密保護法成立後に廃止・撤廃・凍結等の意見書を提出した全国 45 市町村のうち 28 市町村が長野県である（そのうち 8 市町村が私の選挙区であり、この意見書を提出しなかったのは、恥ずかしながら私の地元中の地元中野市だけである。須坂市は成立前に参議院や総理に提出している）。

もちろん、民主党の比較的強い長野県とて、市町村議会は大半が保守系議員で占められている。そうした中、少なくとも見識ある市町村議会議員は、党派を超えて、ほぼ私と同じ危惧を抱いたのである。長野県では歴史は葬り去られていないのだ。

今、我々は二度と同じ過ちを繰り返さないために悪法は葬り去らねばならない。

（しのはら・たかし：1948 年長野県中野市生まれ。民主党衆議員。農学博士。大伯父が開拓民として渡満。国会で安倍首相に「満蒙開拓平和記念館を知っているか」と質問し、問題提起を行う。著書『TPPはいらない』『原発廃止で世代責任を果たす』など多数。

歴史記憶の共生と研究実践に関する国際的対話の試み
国際シンポジウム「東アジアにおける歴史記憶の共生と研究実践」の開催

長崎大学 南誠（梁雪江）

1. はじめに

2014年3月8日・9日、長崎大学東アジア共生プロジェクト国際シンポジウム¹「東アジアにおける歴史記憶の共生と研究実践：日本、中国大陆と台湾の台湾を手がかりとして」が長野県下伊那郡阿智村コミュニティ館2Fホールで開催した。本国際シンポジウムは筆者が企画・主催したものであり、長崎大学東アジア共生プロジェクトとしたのは筆者がテニウアトラック教員として、2011年10月より、本プロジェクトに所属しているからである。

長崎大学主催のプロジェクトが長野県下伊那郡で開催することに対して、訝しく思う人も多いだろう。その理由はきわめて簡単である。つまり、この国際シンポジウムを企画・主催する私が、同地域と関わりを持っているからである。

その関わりは大きく言って三つの側面がある。一つは、中国帰国者3世である私の祖母がこの地域の出身で、私も来日当初、飯田市近くで二年ほど生活していた。もう一つは、2000年修士課程に在籍していた私は飯田市周辺で研究調査を行ったことである。私の研究の原点はここにあったと言っても過言ではない。その研究活動は今でも続いている。三つ目は、研究活動を遂行する過程で、満蒙開拓平和記念館の建設に尽力した寺沢秀文氏との交流を続けてきたことである。寺沢氏から満蒙開拓平和

記念館の建設構想を伺ったのは、2006年中国コロ島市で開催された引揚60周年式典に参加したときであった。それ以来、満蒙開拓平和記念館が開館されてからは、同館を一つの拠点として、日中間の学術・民間交流を促進していくことを考えてきた。今回の国際シンポ

国際シンポジウムのチラシ

長崎大学 東アジア共生プロジェクト国際シンポジウム

東アジアにおける歴史記憶の共生と研究実践

日本、中国大陆と台湾の対話を手がかりとして

基調講演
孫 歌（中国社会科学院）

公開シンポジウム
歴史記憶の展示実践に関する日中間の対話

石 金楷（中国ハルビン養父母連誼会）
箕 志剛（中国黒竜江省社会科学院）
杜 穎（中国黒竜江省社会科学院）
寺沢 秀文（日本長野県満蒙開拓平和記念館）

日時：2014年3月8日
13:00-17:30

場 所：長野県下伊那郡阿智村
コミュニティ館2Fホール

入場無料
日本語・中国語
（通訳（中→日）あり）

9日 非公開ワークショップ
「歴史記憶をめぐる東アジア諸国の研究実践」

主催：長崎大学重点研究課題プロジェクト
「持続可能な東アジア交流圏の構想に向けた人文・社会科学のクロスオーバー
——「共生」概念の学際的統合にもとづいて」

問い合わせ先：南 誠（長崎大学 テニウアトラック助教） isk-minami@nagasaki-u.ac.jp
TEL 095-819-2783

※この国際シンポジウムは、科学技術人材育成補助金（テニウアトラック普及・定着事業）の支援を受けています。

¹ 長崎大学東アジア共生プロジェクトとは、長崎大学第二期中期目標・中期計画における重点研究課題「持続可能な東アジア交流圏の構想に向けた人文・社会科学のクロスオーバー——「共生」概念の学際的統合にもとづいて」（平成22年度～27年度、<http://asia.prj.nagasaki-u.ac.jp/index.html>）プロジェクトの略称である。

ジウムは、そうした考えから生まれた一つの試みである。

また本国際シンポジウムは、私が 2011 年 10 月よりトヨタ財団の助成を受けて実施してきた「歴史認識の対立を越える人々のつながりの発見と構築：満洲の歴史と記憶の日中比較研究を手がかりとして」の課題から構想したものでもあり、開催するに当たっては、文部科学省の科学技術人材育成費（テニュアトラック普及・定着事業）の助成を受けた。

2. 国際シンポジウムの開催目的

テニュアトラック助教として長崎大学に着任したのは、2011 年 10 月だった。それ以来、国際シンポジウムを何度か主催してきた。記憶に関するものは、重点研究課題プロジェクト主宰の会議を含めて、二度ほどあった。それまでの経験を踏まえて、今回の国際シンポジウムの開催趣旨を下記のように設定した。

1990 年代のアジア金融危機を契機に東アジア地域内の協力と「東アジア共同体」構築の必要性が認識されるようになってから、その構築を阻む要因として、歴史認識の対立問題も浮上した。これに止まらず、歴史認識の問題が国民同士の相互認識を悪化させていることも、言論 NPO などの調査結果を見れば明らかである。こうした歴史認識の対立を背景に、異なる歴史認識を持つ人びとのつながりと歴史記憶の共生をどのようにして構築していけるのだろうか。

この問題を考えるにあたり、本国際シンポジウムは、日本、中国と台湾に焦点を定めて、それぞれの歴史記憶とくに戦争記憶に関わる民間団体の展示実践と、歴史記憶に関する研究実践を取り上げることで、議論を深めていく。ここでの議論を通じて、最終的には、歴史認識の対立を越えた人びとのつながりの構築や、歴史記憶との共生を可能にする条件の抽出や、今後のトランスナショナルな共同研究の可能性を模索したい。

歴史認識の問題が国民同士の相互認識を悪化させていることについて、別の論文「中国『方正日本人公墓』にみる対日意識の形成と表出」²で言及した。長くなるが、下記の通り引用しておく。

2011 年に行われた第 8 回日中共同調査世論調査結果³によれば、相手国に対して「良くない印象を持っている」「どちらと言えば良くない印象を持っている」を合わせると、日本は 84.3%、中国は 64.5%と五割以上に達している。日本人が中国に「良くない印象」を持つ理由として、「資源やエネルギーの確保で自己中心的に見えるから」(54.4%)、

² 本論文は、駒井洋監修・小林真生編『レイシズムと外国人嫌悪』（2013 年、明石書店）に収録されている。

³ 特別非営利活動法人「言論 NPO」HP

<http://www.genron-npo.net/world/genre/cat119/2012-a.html> 2013 年 7 月閲覧。

「尖閣諸島を巡る対立が続いているから」(48.4%)といった領土に関わる問題が最も多いが、「歴史問題などで日本を批判するから」(44%)という歴史認識に関わる問題も上位4位にランクインしている。これに対して、中国人が日本に「良くない印象」を持つ理由として、「過去に日本と戦争をしたことがあるから」(78.6%)、「日本政府の震災後の福島原発対応に問題を感じるから」(40.9%)、「中国を侵略した歴史についてドイツのように正しく認識していないから」(39.9%)、「日本政府が尖閣諸島で強硬的な態度を取ったから」(39.8%)、「歴史問題などで不適切な発言をする政治家が相次ぐから」(33.3%)と、上位5位のうち3つが歴史認識の問題に関わっている。

こうした異なる歴史認識から生じる対立問題の解決に向けて、本国際シンポジウムは、アジアの中でもとりわけ日本、中国大陆と台湾に焦点を定めて、それぞれの歴史記憶とくに戦争記憶にかかわる民間団体の展示実践と、歴史記憶に関する研究実践を取り上げて、考えることにした。

3. 国際シンポジウムの概要

国際シンポジウムは二日間にわたって開催した。

一日目の8日は、午前には参加者全員で満蒙開拓平和記念館を見学し、午後は公開シンポジウム「歴史記憶の展示実践に関する日中間の対話」を阿智村コミュニティ館2階のホールで開催した。

写真：記念館前での集合写真

8日の午前9時半から11時半まで2時間強の間、会議参加者が満蒙開拓平和記念館を見学した。日本初、いや世界初と言っても過言ではない満蒙開拓にフォーカスしたこの記念館の展示を参加者たちが見入った。記念館の設立目的と展示内容に対する評価は総じて高かった。午後の公開シンポでも、多くの発表者はそれについて言及した。その評価を簡潔にまとめると、次のようになる。一民間団体のみで記念館の設立に努力してきたことは高く評価すべきことであり、このような展示は行政がやっても、けっして達成できなかっただろう。こうした展示から、草の根・民間レベルの交流の新しい可能性を感じているという。



午後の公開シンポジウムでは、まず基調講演として、中国社会科学院の孫歌教授⁴が「『感

⁴ 中国社会科学院での職名は研究員となりますが、ここでは便宜上、教授を用いることとした。黒竜江省社会科学院の笄志刚教授と杜穎准教授に関しても、同様である。

情記憶』における日中関係」を報告してくださった。孫教授は「歴史記憶は選択によってなされていること」、「国家の記憶と個人の記憶の非対称性」と「体験（感情記憶）の一般化の重要性」を踏まえて、中国で放送されているテレビドラマを手がかりに、中国社会における対日感情記憶の変遷を紹介した。最後に、今後の課題として、「感情的な歴史記憶を一民族から解放させるには、日常生活レベルから努力することが必要であり、また日中友好はただの友好に終始するのではなく、ともに平和を創造していく意識が大切であり」、「そのための方法についてともに考えなければならない」ことであると結んだ。

写真：国際シンポジウムの会場風景（左から孫歌教授、石金楷幹事長、笄志剛教授、杜穎准教授、寺沢秀文専務理事）



基調講演の後には、パネルディスカッション「歴史記憶の展示実践に関する日中間の対話」として、中国黒竜江省ハルビン赤十字会日本人孤児養父母聯誼会の石金楷幹事長⁵は「中国養父母の展示に関わって」、中国黒竜江省社会科学院の笄志剛教授と杜穎准教授はそれぞれ「歴史真実と感情記憶に基づく中日展示実践の協力について」と「日本残留孤児と中国養父母の関係問題について」、満蒙開拓平和記念館寺沢秀文専務理事が「満蒙開拓団平和記念館」の設立をめぐる」といった演題で報告した。

「中国養父母の展示」とは、中国ハルビン市の731部隊博物館で開催された特別展示「中国母親的博大情懷」を指している。この展示は特別展示としているが実際、常設展の形式

⁵ 石幹事長は本来ならば、中国ハルビン市から招へいする予定だったが、2014年1月下旬より、石幹事長が中国残留日本人孤児の配偶者という身分で来日していたため、日本国内から招へいすることになった。石氏は今後、日本に永住する予定のようだが、日本にいながらも、中国養父母の展示に関わっていくと話してくれた。

を取っており、主催者にはハルビン紅十字会と侵華日軍第 731 部隊罪証陳列館、共催者として黒竜江省社会科学院とハルビン市日本遺孤養父母聯誼会が名を連ねている。この展示は満蒙開拓を直接取り上げているわけではないが、満蒙開拓の悲劇的な結果としての中国残留日本人孤児にかかわる問題を取り上げていることに鑑みて、満蒙開拓平和記念館との対話を計画するに至ったのである。なお「中国養父母の展示」は、2011 年 8 月の「方正日本人開拓民石碑事件」や日中関係が悪化する情勢において、現在も必要に応じてのみの公開・観覧となっている。私が 2012 年 9 月にハルビンを訪れた際も、石幹事長のご案内で展示を観覧できたが、普段は展示場に明かりも付けずに、一般公開していないという。

二つの展示はその展示対象も公開形態も異なるが、共通する点はいくつもある。石幹事長は報告の中で、養父母展示の主旨は「中国残留日本人孤児を生み出した過去の歴史と、養父母の偉大なる愛情を展示することで、母親の愛とは何か、人道とは何かを再認識してもらうとともに、二度と戦争を起こさないことや、人類にとって永遠なる平和の大切さを知ってもらうことにある」と強調した。こうした「平和を願う」気持ちは養父母の展示も満蒙開拓平和記念館も同じであった。寺沢専務理事も報告の中でそれを幾度強調した。

また二つの展示はともに、「歴史の風化」を防ぐために、歴史を記憶・継承するのに「展示」という手段を用いた。その展示の場（記憶の場ともいうべき）を「戦争の悲惨さ」と「平和の尊さ」を発信するための拠点として確立していくことを目指している。また、程度の差はあるが、一国の歴史に拘束されない「侵略の歴史」、「被害の歴史」と「加害の歴史」を同時に呈示することにも配慮し、国境を越えた人々の対話を促すことに対して、前向きな姿勢を示している。こうした展示の実践を通じて、歴史認識の対立と国境を越えた人々のつながりが再発見・構築されていけると言えよう。

展示に関わった当事者のほかに、中国黒竜江省の竺教授と杜教授は養父母の展示の準備にかかわってきた体験を紹介するとともに、中国と日本の展示における被害者意識と加害者意識の乖離、相互理解促進のプラットフォームと学術交流の重要性、そして展示は単に過去の歴史にかかわるものではなく、それが現在を生きる人々（中国残留日本人孤児とその養父母）にとっても大事であることを報告した。

以上の報告に対して、最後は、中国社会科学院の孫歌教授、兵庫教育大学の首藤明和准教授と長崎大学の葉柳和則教授がそれぞれコメントを寄せた。

二日目の 9 日は、非公開ワークショップ「歴史記憶をめぐる東アジア諸国の共同研究の可能性」を飯田市シルクホテルのセミナー室で開催した。

非公開ワークショップは昼休みを挟んで、葉柳和則（長崎大学）「博物館と観光地における表象の政治：長崎市のミュージアム展示と軍艦島関連記事を事例にして」、王飛（神戸大学）「再現：歴史記憶と空間」、王曉葵（華東師範大学）「中国における戦争記憶の特質について」、汪宏倫（台湾中央研究院）「台湾の「歴史認識」問題：戦争、記憶、フレーム」、南誠（長崎大学）「日本における満洲記憶の生成と再生産」の合計 5 報告があった。報告を通じて、日本、中国大陆と台湾における歴史記憶の研究実践に関する理解を深めることができた。また各地域における記憶実践の際、感情をともなう記憶の実践が常に存在している

ことや、大文字とされる「正史」とその拘束を受ける個々（個人であったり集団であったり）の記憶との間に乖離が存在していることに鑑み、今後、そのメカニズムの解明に力を注ぐべきであることを確認した。

4. 結びにかえて

長崎大学に着任して3年目になるが、学外で国際シンポジウムを主催するのは初めてだった。研究成果の社会への還元という点も考慮すれば、同国際シンポジウムの開催意義はとても大きい。しかし準備過程における反省点も多く、宣伝不足で、当日の参加者が少なかったことも残念だった。これらは今後の会議開催に向けて、改善する方法を検討したい。それにしても、本国際シンポジウムを成功裏に開催できたことは、多くの方々のご協力があったことを改めて痛感している。

中国からの招へい者の来日ビザ申請のために、必要書類を準備したものの、昨今の緊張した日中関係の影響や、「満蒙開拓」という敏感な文句が入っていることが原因で、中国当局に許可されない恐れもあった。通常だったら、この段階で来日をあきらめる人も多い。実際、私がかつて主催した国際シンポジウムでも、緊張する日中関係の影響を恐れて、来日をあきらめた研究者もいた。しかし今回は、吉林省出身の孫教授、黒竜江省の笄教授と杜准教授は「満蒙開拓」によってもたらされた「悲劇」を誰よりも理解し、国際シンポの開催趣旨にも賛同してくださったので、最後まであきらめずに関係者と交渉してくれた。私のところに、ビザ申請がすべて許可されたお知らせメールが届いたのは、シンポジウム開催の直前（3月4日）だった。それまでは、今回のシンポジウムが本当に開催できるのかと心配して、落ち着くことができなかった。今となって、今回の国際シンポジウムを成

写真：開会挨拶をする中平章理

事長



功裏かつ有意義に開催できたのは、来日ビザ申請をあきらめず、労も厭わず、最後まで粘り強く交渉してくださった先生方に改めて謝意を表したい。

また国際シンポジウムを準備・開催するにあたって、地元で手伝ってくださった満蒙開拓平和記念館の寺沢秀文専務理事を始め、三沢亜紀事務局長、田中真美事務員と島崎友美事務員、開会の挨拶を引き受けてくださった伊那日中友好協会の中平章理事長にも深謝したい。

中国の養父母の展示も日本の満蒙開拓平和記念館も公開してまだ間もない。中国の養父母の展示に至ってはまだ限定的な公開に過ぎない。今後、これらの展示の存在意義がいよいよ、本格的に問われていくに違いない。その展示方法と内容に関して、賛否の両方から意見が出されることも当然である。

そうした評価についてまた別の機会に考えたいが、いずれにせよ、これらの展示に、人びとが集まり、風化される恐れのある歴史に出会い・再考し、そこから対話の可能性が喚起されるのは間違いないことである。これらの展示がそうした「フォーラムとしてのミ

ミュージアム」⁶になることを願っている。

紙幅の関係で、ここでは国際シンポジウムの内容を簡単に紹介したが、本国際シンポジウムでの議論を踏まえて、今後、研究成果の印刷出版に向けて検討する予定である。実現可能か否かは定かではないが、また別の機会に、本国際シンポジウムの成果を皆さんにお届けできれば幸いである。

⁶ こうした議論は、吉田憲司『文化の「肖像」—ネットワーク型ミュージオロジーの試み』（2013、岩波書店）を参照。

「満蒙開拓」五題

寺沢 秀文

(満蒙開拓平和記念館 専務理事、当会理事)

1. 「満蒙開拓平和記念館」の開館一周年を迎えて

かつて日中双方含め多くの犠牲を出した「旧満州」(中国東北部)、その地に国策により「開拓」という半ば偽りの美名の下に全国各地から送り込まれ、多くの悲しい犠牲を出した「満蒙開拓団」の史実。この「満蒙開拓」に特化した全国唯一となる記念館を、全国で最も多くの開拓団を送出した長野県南部のこの地に建てようと、飯田日中友好協会等が中核となって、足かけ8年の紆余曲折を経てようやく開館まで漕ぎ着けたのは昨年4月のことでした。そして早くも開館1周年を迎えます。これも足かけ8年の建設準備期間中もご支援を頂き、また開館後も全国各地からこの不便な地に遠路をご来館頂いた「方正友好交流の会」の会員の皆様を始め多くの温かいご支援の賜と厚く御礼を申し上げたいと思います。私事ながら両親が元開拓団員であり、亡き父から「あれは本当の開拓などではなかった。中国の人々には大変申し訳ないことをした」と子供の頃から聞かされてきた言葉を原点として本業の傍ら日中友好活動等に関わり、そしてこの記念館建設の「言い出しっぺ」として建設当初から事務局長、途中からは専務理事として深く関わってただけに開館1周年を迎えるに当たっては特別の思いがあります。

開館以来の来館者数も当初予測(年間5千人)を大きく上回る3万人に到達(3月17日3万人達成)。山間部の不便な、小さな記念館であるにもかかわらず、北は北海道から南は沖縄まで本当に遠いところを全国各地から沢山の皆さんにお越し頂いていることに、改めて満蒙開拓の史実を語り継ぐことの重要性和当記念館の存在意義とを評価して頂いてのものとの思いを新たにしています。この記念館が単に懐古的なもの等や「満蒙開拓」をいたずらに美化したり正当化等しようとするものなどではなく、史実の中から未来の平和のための教訓を学ぶ拠点であるというスタンスを多くの皆さんにご理解頂いてのことであり、それが、開拓団関係者等のご年輩者等のみならず、開拓団とは全く関係の無い戦後生まれの皆さん、お若い皆さんも沢山来館して頂いているということの背景でもあると思います。原爆資料館やひめゆり記念館と同じように、ここも平和を学ぶ場として、地元や県内各地の高校、中学等の生徒の皆さん等お若い方も平和学習やクラス旅行等で訪れて頂いており、2年目の今年からは県外からの修学旅行も来館される予定になっている等、お若い皆さんの来館も多いのは大変嬉しいところです。

来館した皆さんの感想等を直接にお聞きしたり、来館者アンケートや来館者の皆さんに書いて頂いている一言メッセージ等を見ても、総じて記念館のコンセプトや展示内容等に対してとても高い評価を頂いています。辺地のうえに142坪と小さな記念館であり、ま

たかつて外地で起きたことであること、そして終戦前後の状況等からほとんど当時のものが持ち帰られていないこと等から資料等の収集や展示作成等にも大変苦慮いたしましたが、それでも多くの皆さんから「良く作ってくれた」、「大変わかり易い展示内容」等のお誉めの言葉を頂いているのは大変ありがたいことです。また、非公式な形も含めて中国関係の方も少なからず来館されており、その皆さんからの評価も総じて高いものがあることは正直ホッとしているところです。

中国側からの見方としては「開拓などと言うが、実際は中国人の土地と家を取り上げただけのもの。開拓なんかではなく侵略」としているのが大半な中で、敢えて記念館の館名に中国側では忌避する「満蒙開拓」という用語を冠したのは、国策により「開拓」という美名の下、全国から開拓団員を送り込み侵略の加担者としてしまった、その史実を忠実に伝えるための意図からでした。もしも当時、最初から、「開拓と言うが、土地も家も本当は現地の中国農民のもの。現地の人たちは本当は日本人のことを恨んでいる」ときちんと事実を伝えていれば、あんなにも多くの人々が渡満し、そして家や土地を奪われた現地の人々などに多大な迷惑を与え、そして逃避行や戦後の越冬の中であのように多くの犠牲を出すことも無かったはずと思います。

この記念館のコンセプトとして、「満蒙開拓の被害と加害」という両側面にきちんと向き合っていくというスタンスを大切にしています。満蒙開拓団員の悲劇、被害も語り継ぎますが、どうしてそのようなことが起きてしまったのか、そして現地の人々の家や土地も奪ってしまった等の加害という側面もあったということ、それ故にこそ開拓団員らの多くの被害を出してしまったということ、それらのことは展示等の中でも触れています。それは不都合な史実であり、これまで向き合いにくかった史実かも知れませんが、しかし、不都合な史実に目を背けるものはまた同じ過ちを繰り返す。だからこそ、この記念館は、満蒙開拓という史実に向き合い、このことを通じて、戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぎ、例え国策であったとしてもおかしいことにはおかしいと感じることが出来る感性を持った賢い国民であるよう、歴史を鑑(かがみ)として未来に向かっていくための学びの場でもありたいものと願って日々の運営に当たっています。記念館の敷地内に建てられた「平和友好」（揮毫は阿部守一長野県知事）の碑文の下には、あの「前事不忘、後事之師（前事を忘れず、将来の教訓とする）」という言葉が刻まれています。正しく記念館のスタンスに合致する言葉でもあると思います。開館1年目の珍しさ等もあって1年目は3万人という大変多くの皆さんに御来館頂きましたが、民間自主運営の施設として、2年目のこれから以降こそが本当に大変であり、そして大切であると思っています。この伊那谷の地から世界に向けて平和を発信する小さくともキラリと光る記念館としてこれからも頑張っていこうと思っていますので、今後とも皆様のご支援をお願い申し上げますと共に、多くの皆さんの来館を心よりお待ち申し上げます。

2. 「方正友好交流の会」主催の記念館等来館ツアーの御一行をお迎えして

去る3月7日、8日の両日、「方正友好交流の会」の主催により、会員並びに一般参加の市民の方など35名の皆さんが長野県阿智村の「満蒙開拓平和記念館」を訪問され、翌日には、記念館近くにある、かの「残留孤児の父」と言われた故・山本慈昭翁ゆかりの長岳寺や、戦後の旧満州等からの引揚者等が再入植した下伊那郡松川町の増野(ましの)開拓地などを訪問して頂きました。ご参加者は主には関東近辺の皆さんですが、中には遠く福岡や京都などからご参加の皆さんもお見えでした。ご一行は大型バス1台で来館、東京を早朝に出発し、阿智村の記念館にお着きになったのは昼過ぎのことでした。当方も理事の末席を汚させて頂いている同会の主催だけに顔なじみの皆さんも多く、またツアー趣旨に賛同されて参加された皆さんの中にも、当方が個人的にメール配信している「満蒙開拓つれづれ草」という駄文をお読み頂いている方なども何人か参加されており、中にはメールだけの交流であった方で今回初めてお会い出来た方もありました。皆さん、いろいろなお立場でご活躍されている方も多く、多士済々の顔ぶればかりのツアー一行の皆さんでした。

東京新宿を朝8時半に出て、3時間半ほどを要して記念館にお着きになった皆さんは、早速館内へ。まずは当方から記念館建設経過等のお話を、続いて元泰阜村開拓団員の「語り部」中島多鶴(なかじま・たづる)さんのお話をお聞き頂きました。中島多鶴さんはかつて「忘れられた女たち」という残留婦人をテーマとしたテレビドキュメントに出演されたり、また『沈まぬ夕陽』(中繁雄著)という半生記を記録した本の主人公などとしても良く知られた方です。多鶴さんら元開拓団員による「語り部の会」は毎月第2・第4土曜日に記念館で定例開催しているほか、団体等で事前予約された場合にはこの語り部のお話を聞いて頂くことも出来ます。この日も、今年86歳になる多鶴さんの、当時の貴重な体験談を約1時間にわたり皆さん真剣に耳を傾けられておりました。その後、当方のガイドで館内展示を見て頂き、皆さん大変熱心に展示等をご覧になっておられました。

御一行はその夜は阿智村内にある伊那谷随一の温泉街として知られる昼神(ひるがみ)温泉に投宿。旅館内で催された夕食交流会には当方も参加させて頂き、皆さんの今日の来館のご感想やご自分の戦争体験、平和等に対する思いなどいろいろなお話をお聞きする貴重な機会となりました。

翌8日、御一行は記念館から歩いて5分ほどの「長岳寺」へ。ここはあの「残留孤児の父」とも呼ばれた故山本慈昭翁が住職をお勤めになっていたお寺です。御一行はここで現住職の入(はいる)御住職よりお寺の由緒と慈昭翁のことについて説話を頂きました。この長岳寺はかの武田信玄を火葬した場所(諸説あり)とも言われており、その火葬した灰を祀ったという灰塚や、多くの犠牲を出した満州「哈達河(はたほ)」開拓団の慰霊碑等もあります。山本慈昭翁のことについては後記の5で触れさせて頂きます。

続いて御一行は中央高速にて約40分の下伊那郡松川町の「増野(ましの)」へ。満州等から引き揚げた開拓者らの戦後入植地の一例として「増野開拓地」を見て頂くというの

も今回のツアー目的の一つでした。ここは実は当方の両親らが戦後再入植した開拓地でもあり、当方が今も住む場所でもあります。増野に着いてからは、当方の案内にてバスの車窓から、そして我が家の近くで下車して頂いて増野開拓地やここから望む伊那谷、北岳など3千m級の山並みが並ぶ南アルプス（赤石山脈）を眺めて頂きました。前日も含めてとても良い天気で、白く雪化粧した山々も綺麗に見て頂くことが出来ました。皆さんの日頃の行いがとても宜しかったようです。その後、増野会所（公民館）で、戦後の緊急開拓事業とそれにより開拓されたこの増野開拓について当方からお話をさせて頂きました。戦後、政府は旧満州などからの引き揚げ者や復員軍人等の受け入れ場所の確保のために全国各地に開拓地等を設ける緊急開拓事業を実施しています。しかし、その新規開拓地は辺地等が大半で困難も多く、多くの離農者を出した中で、この「増野」は戦後開拓地の成功例の一つとされている場所でもあります。昼食会を兼ねたこの席には、開拓農家30戸で発足し開拓を担ってきた増野原開拓農業協同組合（既に解散）を継承する「増野開拓組合」の組合長さんや開拓2世の方、また増野開拓の後継者等で経営する「まし野ワイン」の関係者などにも参加して頂き、「まし野ワイン」や「まし野リンゴジュース」を試飲して頂きながら、後継者の皆さんの農業や地域への熱い思いに耳を傾け、意見交換等をして頂くことが出来ました。これは参加者の皆さんにとっても有意義な体験型ツアーとなり、また受け入れさせて頂いた増野地区の皆さんにとっても、増野が地域を上げて取り組む都市と農村との交流というテーマにも合致した活動として大変ご好評を頂いたところです。

ご一行は最後に開拓2世らが経営する「まし野ワイナリー」（当方も株主であり役員です）に立ち寄り、お土産としてワインやジュースなどを沢山お買い上げ頂いて帰途に着かれました。その後、何人かのご参加者の方から感想などのメールなどを頂きましたが、記念館も増野もどちらも大変満足して頂いたということにて、現地ガイド？を勤めた当方としてもホッと一安心というところです。遠路のお越し、本当にありがとうございました。

3. 長崎大学主催の国際シンポジウムの阿智村等での開催について

前記の「方正友好交流の会」のツアーの皆さんが来館されたと全く同じ時期、3月8日、9日の2日間、「阿智村コミュニティーセンター」並びに飯田市内のホテルを会場として、長崎大学の主催により「東アジアにおける歴史記憶の共生と研究実践」という大変有意義な国際シンポジウムが開催されました。長崎大学主催のシンポがどうして長野県の阿智村や飯田市で？と怪訝に思われる向きもあるでしょうが、実は今回の企画の主体となった同大学の南誠助教は、この阿智村の近くの平谷村出身の中国残留婦人のお孫さんに当る方であり、また当「方正友好交流の会」の理事でもあります。南助教は中国生まれですが、御家族と共に日本に永住帰国され、子供の頃には2年間ほどこの当地にて暮らされ、京都大学の大学院を出た後、2年前から長崎大学で教鞭を取られています。当方とはもう15年ほど前からの友人であり、一緒に葫蘆島（ころとう）などを訪ねたこともあり、また早い段階から当記念館にもいろいろと御助力頂いている方でもあります。そんなご縁もあって、南助教は今回、当記念館が建てられたこと等も含め、この阿智村でのシンポをと意欲的に

企画された次第でした。この国際シンポ、長崎大学の先生方や、中国や台湾からも5～6人の研究者が参加され国際色豊かなシンポとなりました。シンポは一般公開ではありませんでしたが、周知等が余り十分では無かったこと、また記念館の方も各種イベント等が重なっていた時期であったこと等から参加者はやや少なかったものの、しかし、内容次第は極めて高度で有意義な内容のものでした。

3月8日午後、阿智村コミュニティーセンターで行われたシンポジウムでは、最初に基調講演として中国社会科学院の著名な研究者として知られる孫歌先生が、「感情記憶における日中関係」として題して講演されました。その講演の内容は本当に流暢な日本語で、極めて内容の濃い、高度で、それでいて分かり易い内容のものであり、当方も聴講者一同もみな深い感銘を受けるものでした。孫歌先生は、この日の午前中にご覧になった満蒙開拓平和記念館についても高い評価をして頂き、記念館の成功の原因、背景についてなど、実に極めて的確な分析をして頂いたことには当方も本当に感嘆するばかりでした。その後、中国側の3人の研究者の先生方が発表され、最後に当方から「満蒙開拓記念館の建設の経過と趣旨」等についてお話させて頂きました。その冒頭の発表者であった石金楷さんは一昨年夏からハルピンのあの「731部隊資料館」の中に設けられた「中国人養父母資料陳列館」の運営に主として関わっていた方であり、当方とも手紙等やり取りさせて頂いている方でもあり、またこの「星火方正」にも何回も寄稿されている方ですので、皆さんも良くご存じのことと思います。石さんは今年2月から、残留孤児でもある奥さんと共に来日され、現在は所沢市にある「中国帰国者センター」で日本語を研修中です。その石さんからは、「中国人養父母資料陳列館」を立ち上げるためのご苦労やその現状等についての貴重な報告がありました。この陳列館、非常に貴重な施設であり、当方もいずれ一度は訪れたいものと思っています。また、石さん以外のお二人の中国研究者の先生方の発表は全て日本語にてであり、いずれも戦争記憶に関わる研究等について興味有る内容の濃い報告をして頂きました。そして、最後の当方からの報告の後の意見交換で、孫歌先生始め出席の先生方から当記念館の設立意義の高さ等も含めての賞賛のお言葉を頂いたことは本当にありがたい限りでした。この夜には飯田市内にて懇親会が設けられ、中国や台湾の研究者の先生方、長崎大学の先生方等とも懇親を深め、今後、共に国境を越えて、平和の実現に向けての共同研究活動を進めていくことを約させて頂いたことも含め、極めて内容の濃い意義有る国際シンポジウムでした。この国際シンポの実現のために奔走された南誠助教のお骨折りに心から感謝申し上げたいと思います。

4. 映画「望郷の鐘」の製作について

方正の会の皆さんがお帰りになった翌日の3月9日の午後には「阿智村公民館」にて、既に撮影が始まっている映画「晩鐘の鐘～満蒙開拓団の落日」の監督・山田火砂子さんを迎えてのトークショーが行われました。会場には阿智村の皆さんなど100名近い聴衆者が参加しました。

この映画は前出の山本慈昭翁を主人公として書かれた児童向け図書「晩鐘の鐘」（原作・和田登さん）を映画化するもので、監督は映画「はだしのゲン」などを撮られている山田火砂子監督です。映画の製作発表はその後、4月4日に東京都内で行われており、主人公の山本慈昭役を内藤剛志さんが務められ、加えて、渡辺梓、星奈優里、山口馬木也、常盤貴子（特別出演）、丹阿弥谷津子、磯村みどり、堀内正美（いずれも敬称略）等の皆さんがキャストとして発表されています。詳しくは下記のホームページをご覧ください。

映画「望郷の鐘～満蒙開拓団の落日」 <http://entterminal.jp/2014/04/bokyonokane/>

この映画、今秋には全国で上映される予定とのことです。撮影ロケは既に阿智村内等で始まっており、満蒙開拓平和記念館も全面的に協力させて頂いています。これを機会に満蒙開拓について知る人が増えれば何よりと思います。

3月9日開催のトークショーでは、山田監督からご自身の戦争体験や今回の映画を撮られることとなった思い等について語って頂いた後、先月で阿智村村長を退かれた岡庭一雄前村長、そして進行役として満蒙開拓平和記念館のボランティア団体「ピースラボ」代表の木村多喜子さんの3人によるパネルディスカッションが繰り広げられました。そして、その最後の総括として当方からは、今回、満蒙開拓を正面から取り上げた本格的な映画が作られるのは多分は初めてのことであり、このテーマを取り上げることの難しさと、これに立ち向かうことの「覚悟」とを、当記念館の設立の経緯、背景等も絡めながらお話させて頂きました。

これまで「不都合な史実」として余り前向きには取り上げてこられなかった「満蒙開拓」をテーマとすることの「覚悟」は我が満蒙開拓平和記念館設立にも、そして今回のこの映画にも共通するものであり、そしてこの山本慈昭翁の体験を通じて満蒙開拓を取り上げるということは挑戦でもあり、冒険でもあると思います。実は、慈昭翁は残留孤児の支援等に懸命に取り組まれましたが、その原因となった「満蒙開拓」の背景や問題点等については生前ほとんど触れることは無かったと言います。たぶん、それを言い出すと、開拓団を送り出した国の責任や、あるいは中国人民を刺激すること等ともなり、一番の目的である残留孤児の支援に支障を来すからとされていたのだと思います。そして、残留孤児の問題だけに注力して取り組むために、設立当初にはその事務局長として関わった飯田日中友好協会の前身の日中友好協会下伊那支部からも袂を分かって、自ら残留孤児帰国支援活動に特化した「日中友好手をつなぐ会」を立ち上げてその帰国支援活動に奔走されました。その「日中友好手をつなぐ会」も慈昭翁が亡くなり、また残留孤児等の帰国もほとんど無くなり、また会員の高齢化等もあって数年前に解散してしまいました。会員の皆さんの中には「阿智村に山本慈昭記念館を」という思いもあったのですが、会員も減少、資金的にも困難な中で、阿智村内での建設が具体化していた我々の満蒙開拓平和記念館構想の中に吸収併合することとなり、記念館内の一室に慈昭翁の顕彰も含めての残留邦人コーナーを設けることによりその遺志を引き継ぐことが果たされることになりました。

そして、今回の山田監督による「望郷の鐘」は、慈昭翁自身も生前はほとんど触れてはいなかった満蒙開拓の複雑な問題等に対する思いを映画の中で語らせるという挑戦であり冒険でもあると思います。そして、そのことに対する「覚悟」もきっと山田監督はお持ちなのだろうと思います。実は山田監督には最初の段階に僭越ながらお手紙でこういった思いなども伝えさせて頂いていたところでした。これまで満州や満蒙開拓を取り上げた映画等は少なからずありました。例えば、ドキュメンタリー映画としては羽田澄子監督の「嗚呼、満蒙開拓団」や、青少年義勇軍を取り上げたアニメ「青い記憶」、あるいはなかにし礼さん原作の「赤い月」などもありました。しかし、今回の「晩鐘の鐘」のように満蒙開拓を正面から取り上げた本格的な映画は初めてのことであろうと思います。山田監督は満蒙開拓が国策として行われたことの結末の悲惨さをこの映画を通じて訴えたいとも言っておられました。そして、それは、慈昭翁自身が果たせなかった思い、口には出さなかったことを、時間を超えて、山田監督が映画を通じて代弁する挑戦でもあります。私はそのことの覚悟をお手紙で山田監督に問うたものでした。その答えはきっと映画を通じて示されるのだらうと思います。映画の完成を楽しみにしたいものと思います。

5. 多摩「拓魂公苑」とそこでの慰霊祭

去る4月13日、東京都多摩市にある「拓魂公苑」で、毎年4月第2日曜日に開催されている有志による合同慰霊祭が行われました。この「拓魂公苑」、満蒙開拓団関係の全国的規模の慰霊施設としては唯一のものであろうと思います。公苑は京王線「聖蹟桜ヶ丘」からバスで約10分程度の「旧聖蹟記念館」公園の入口にあります。ここには全国各地の開拓団や義勇隊などの慰霊碑（慰霊柱）が凡そ150本ぐらい並んでいます。そして一番奥に位置して「拓魂」という碑がありますが、その揮毫はあの満蒙開拓と青少年義勇軍の生みの親とも言われ、戦後は一度も旧満州現地には足を踏み入れず、送り出した青少年義勇軍等の慰霊にも行かなかったというあの加藤完治です。この加藤完治の揮毫の碑文は他にも各地に何本かありますが、その碑文は犠牲に対する慰霊よりも、満蒙開拓の賛美的な表現も含まれ、多くの犠牲を出しながら、どうして関係者がこの加藤完治に揮毫を依頼しているのか、どうしても当方には解せないところでもあります。また、この公苑は慰霊の場でもあります。この「拓魂公苑」ともされている通り、慰霊よりも満蒙開拓の賛美の感があるという感じも受けます。この「拓魂公苑」の左端奥には「由来碑」があり、その上段の碑文は下記の通り刻まれています。

「この碑は満蒙の曠野に無残に散った八万の開拓者と、その人々を守りつつ自らも逝った関係者多数の御霊が合祀してあります。昭和七年にはじめられた満州の開拓事業は、満蒙の天地に世界に比類なき民族協和の平和村建設と、祖国の防衛という高い日本民族の理想を実現するために重大国策として、時の政府により行われたものであります。凍土をおこし黒土を耕し、三十万の開拓農民は日夜祖国の運命を想いながら黙々と開拓の鋤を振りました。然し、その理想の達せられんとした昭和二十年の夏、思わざる祖国の敗戦により

血と汗の建設は一瞬にして崩れ去り、八万余の拓土と関係者は満蒙の夏草の中に露と消えていきました。そして、そこには未だ一輪の花も供えられたことはないのです。ここに同志相図り、水清きこの多摩川の丘に一碑を建てて、祖国と民族のために雄々しく不屈の開拓を戦い抜き、そして散っていった亡きこれらの人々の御霊をお祀りするとともに、再びかかる悲しみのおこることなき世界の平和の実現を心からお祈りせんとするものです。昭和三十八年八月 建設委員長 安井謙」

ここには無き同胞たちへの鎮魂、哀惜の思い溢るるものの、同時に、「満蒙の天地に世界に比類なき民族協和の平和村建設と、祖国の防衛という高い日本民族の理想を実現するために」等ともある通り、満蒙開拓の礼賛とも受け取れる言葉が並んでいます。なぜ、あのような多くの犠牲を払うことになってしまったのか、理想の国家の建設、五族協和、民族協和の平和村建設などというスローガンと、それにより引き起こされた悲劇、被害等の実態との大きなギャップをきちんと受け止めなくては多くの犠牲者の鎮魂にはならないではないのかと思われてならないのですが……。戦争を知らない世代の当方の言うことなどは、辛酸をなめ尽くした皆さんにとっては「戦争も知らない若造が何を言うか」ということになるかも知れません。しかし、満蒙開拓平和記念館の建設活動等を通じて、満蒙開拓の実態を知れば知るほど、そしてその犠牲の大きさを知れば知るほど、「開拓」の美名の下に国策により、また現地での関東軍等の食糧やひいては兵員確保等のために開拓団をソ満国境近くまで送り込んだ実態を思う時、満蒙開拓の礼賛の言葉の並ぶこの類の碑文を前にすると、「いったい日本人はあの満州体験、満蒙開拓体験から何を学んだのか」という思いを持たざるを得ません。とは言え、この「拓魂公苑」が満蒙開拓という多くの犠牲を生んだ事実を後世に残すための大切な場所であることは間違いなく、その存在と維持はとても大切なことであると思います。

そして、この「拓魂公苑」では毎年4月の第2日曜日に慰霊祭が行われています。以前は主催団体であった全国組織の「拓友会」が解散してからは、有志参加での慰霊祭となっており、今も毎年4月第2日曜日には全国各地から三々五々集まり、黙祷を共に捧げています。私も数年前から参加させて頂いていますが、年々、参加者が減り、5年ほど前には200人以上はいたのに、昨年の春は100人程度にまで減ってしまっていました。今年も約100人程度の参加者でした。この「拓魂公苑」が出来た頃から参加されているという方のお話を聞くと、最初の頃は1,000人以上の参加で、この「拓魂公苑」に入りきれないほどの参加者だったそうです。関係者の皆さんの高齢化を考えれば無理も無いところかと思えます。例年通り、午前11時に参加者全員が集まって「拓魂」の碑の前で黙祷。その後はそれぞれの団毎で、自分の団の慰霊柱の前や、近くの公園の芝生でビニールシートを敷いて、思い思いに歓談をしながら、昼食を食べたりされていました。

前記通り、この「拓魂公苑」には約150本程度の開拓団毎の慰霊柱がビッシリと並んでいます。全国から渡満した開拓団の数、約800団とも言われていますから、ここにあ

るのはその約 1 / 5 程度かと思います。第一次武装移民の「弥栄」やその次の「千振」を始め全国各地からの開拓団の慰霊柱が見られますが、全国で最も多かった長野県関係の開拓団の慰霊柱は数本程度しか見当たりませんし、当方の両親のいた「水曲柳開拓団」の慰霊柱也没有。この「拓魂公苑」を作る時、どのような経過で全国各地の開拓団等に声かけしたのか、どんな反応があったのか、その経過等については、この「拓魂公苑」を作る時の主催団体であった「全国拓友協会」も解散してしまった今、その詳しいことはわからないところがあります。これもまた調べておかななくてはならないと思います。

慰霊祭が終わっても、なかなかこの場を去りがたい思いの皆さんも多く、そんな皆さんの何人かといろいろとお話させて頂きました。ある方から、東京から渡満したとお聞きし、さらにお話をお伺いしたところ、なんと伊豆七島の新島から渡満したとのこと！。当時、この伊豆七島の島嶼部の新島や神津島からも数十戸の開拓団員が渡満していったのだそうです。とても興味深いお話であったので、その関係の資料等を記念館にお送り頂けるようお願いしてきました。参加者の皆さんがほぼ帰られてから、公苑内の片付け等をしながら、慰霊柱の全写真を記録用にと撮ってきましたが、土台が歪んだりして慰霊柱が傾いたりしているものもあり、今後、この「拓魂公苑」の維持管理をどのようにしていくのか、正直、心配なところです。皆さんも機会がありましたら、是非この「拓魂公苑」を訪問して頂き、手を合わせて頂ければ幸いです。

（てらさわ・ひでふみ：1953 年生まれ。不動産鑑定士の傍ら、元開拓団員を訪ね歩き、両親が暮らした吉林省水曲柳^{すいきょくりゅう}などを 20 回ほど訪れた。「満蒙開拓平和記念館」を開設に導いた立役者。05 年に発足した＜方正の会＞当初から理事として活動。長野県松川町在住）

“満州疎開”の開拓団—東京都満州開拓団の送出特質—

高 橋 健 男

1 東京からも満州開拓民が…

満州開拓団、満蒙開拓青少年義勇軍、あるいは満州建設勤労奉仕隊等の送出に関しては、全国津々浦々例外なくその募集が行われた。大都会の東京都においてもしかりである。しかし東京都からの開拓民等の送出は、全国各県の状況と比較検討すると、ある特徴があることに気づく。本稿では 2013 年 12 月出版の拙著『渡満とは何だったのか—東京都満州開拓民の記録—』からその特徴をいくつかの観点にまとめて簡潔に解説してみたい。

記録では東京都からの満州開拓民の送出はその数において全国第 9 位である。統計上上位に位置するが、東京都から満州開拓民等が送り出されていた事実は案外知られていない。実数としては開拓団員 9,116 名、義勇隊員 1,995 名、送出総数 1 万 1,111 名とされる。個々に見れば順位は開拓団員数が全国 9 位、義勇隊員数が全国 23 位である。それぞれを人口比でみれば、開拓団員は当時の都人口の 1.3%（人口比の全国順位 35 位）、義勇隊員 0.3%（同 46 位）などと記録される。

これらの統計はあるがその実態はというと、戦後 65 年以上、解明されたことはなかった。はじめて東京都送出満州開拓団等の全貌の解明に迫ったのが、本会報 15 号の書籍紹介にあった『東京満蒙開拓団』である。「東京の満蒙開拓団を知る会」がまとめたものだが、東京都が満州開拓団を送るに至る経緯並びに送出のバックアップ体制の解明が詳しくなされた。一方、個々の開拓団の実態に関しては有効資料がなく、残念ながら全容解明には至っていない。

「東京の満蒙開拓団を知る会」と交流を持ちながらも独自に調査研究を続けていた筆者は、5 年ほど前に東京都送出の全満州開拓団等の調査資料を発見した。満州開拓団等を送り出した各県は戦後の 1950（昭和 25）年ころから実態調査を実施している。「開拓団実態調査表」「義勇隊実態調査表」といった報告文書を、帰国した開拓団等の団長あるいは幹部等に提出させた。各県ではそれらを 1952（昭和 27）年ころまでに徴収している。しかしなおも引揚げ総数や死亡・健在状況の不明等があり、昭和 30 年代に入って未帰還者調査究明が全国各県で実施された。

筆者が発見した東京都作成の調査資料は 1957（昭和 32）年 7 月 2 日付の文書である。調査において他県出身者が自県開拓団に所属していたことが分かった場合、全国で調査結果の交換がなされた。東京都が新潟県に送付した開拓団調査資料が新潟県庁に保管されていた。一括して綴じてあったわけではなく、新潟県開拓団に関する報告・調査資料等と混然とつづられていた。県援護恩給室の許可のもとにそれらのつづりを閲覧させていただき、筆者は東京都送出開拓団等の全調査資料を発見した。ただひとつ新潟県庁になかった資料については、金沢県庁に保管されていた文書を金沢県庁のご厚意によりそのコピーを入手した。

それらの調査文書をすべて収録して東京都送出満州開拓団等の実態を明らかにしたのが、拙著『渡満とは何だったのか—東京都満州開拓民の記録—』である。『東京満蒙開拓団』と合わせ見ていただくと、東京都満州開拓団等の送出から引揚げ、戦後の再入植までの全貌を知り得る。

以下、筆者の比較研究による東京都満州開拓団の特徴をいくつかの視点から述べる。

2 東京都送出満州開拓団の特質

- 1 東京都満州開拓団の入植地は、他県開拓団の分布状況と異なり、概して満州中央部である。都市周辺の入植地は「第三線開拓地」と称され、都市の国防と食糧確保を考え、「完全に日本人によって都市を防衛するという重要な意義を持つ」地域とされた。

東京都が送り出した開拓団のうち東満州のソ満国境近くに入植したのは集合第一次^{りょうし}亮子河協和開拓団のみで、北満州への入植は集団第 14 次南緑ヶ丘基督教開拓団である。西満州国境近くは集団第 12 次^{じんぎぶつりゅう}仁義仏立開拓団と集団第 13 次^{こうあん えばらこう}興安東京（荏原郷）開拓団である。

- 2 東京都は満州開拓団送出の初期には、都単独の開拓団を編成してはいない。開拓民の送出数も少ない。試験移民期の開拓団へは、例えば第 4 次^{ハタゴ}哈達河開拓団や第 5 次^{こくだい}黒台開拓団等に“武蔵野部落”を構成して数戸の参加があった模様である。

都単独開拓団は、1939（昭和 14）年送出の集団第 8 次^{こうりゅうせん}興隆川（東京村）開拓団が最初である。以下、一般開拓団 19、満蒙開拓青少年義勇軍・青年義勇隊 6、報国農場 3 の送出だった。内原訓練所在所中に終戦を迎え、渡満しなかった義勇隊が 1 中隊あった。

- 3 東京都開拓民は、そのほとんどが転業者だった。企業統制の強化の結果、中小商工業者が転廃業して満州帰農したのだった。

その関係か、退団者記録が各開拓団で目に付く。現地に到着したのに「一晩で全員が帰国した」記録^{しんあん}（新安東京開拓団）もある。これらの退団は初期の第一次^{いやさか}弥栄村、第二次^{ちぶり}千振村の両開拓団が経験した、匪賊襲撃^{ひぞく}による生活不安からの退団とは全く趣を異にする。

- 4 集団開拓団は 200～300 戸、集合開拓団は 100 戸で編成されるのが基準であった。しかし、東京都編成の開拓団はその基準を満たさないのがほとんどであった。

昭和 19 年あるいは 20 年送出の開拓団は、先遣隊のみの開拓団や本隊の送出が始まったばかりの開拓団だったので、当然基準戸数を満たすものではなかった。しかしそれ以前の開拓団を見ても、50 戸前後で「集団」や「集合」の開拓団に区分されている。現在発見できる記録からはこの辺の事情を解明できていない。

- 5 宗教集団が編成した基督教開拓団だったが、その送出母体は東京都であると記録される。仁義仏立開拓団も日蓮宗系の宗教集団の開拓団だが、天理開拓団を除き、他県では例がない。

また、宗教集団と開拓団との関係を見れば、他宗派においての開拓団編成はなかったようである。伝道や宗教活動のためには各宗派の積極的な大陸進出が見られ、大都市における東西本願寺の存在は古地図で確認される。各開拓団にも僧侶の派遣があった。

3 東京空襲罹災者の“満州疎開”目撃談

戦時中の各種統制の結果転廃業を余儀なくされた都市部の中小商工業者を“満州帰農”させ、“転業開拓団”として満州へ送り出す動きは 1938（昭和 13）年ころからあった。太平洋戦争に突入した後の東京都は、都内の人口疎開と食糧増産に頭を悩ましていた。1943（昭和 18）年末、国において「都市疎開実施要綱」が決定され、翌年 8 月には国民学校初等科児童の集団疎開が開始された。これらの動きの中で、「企業整備による人たちを大陸帰農開拓団として送りたい。都市の人口疎開による人たちも送り出すよう努める」方向が国会で決まり、激しくなりつつあった東京空襲の罹災者たちにもこの動きが及んだ。

拙著には森本繁『高粱の縫針―中国東北地区日本難民救済の記録―』にあった、元新生日高見義勇隊開拓団の下田進医師が元日高見開拓団在満国民学校長の川端秀樹校長に語ったという目撃談を

紹介した。それは、「所用で佳木斯^{ジャムス}まで行ったところが、何と駅に内地からの戦災者がいっぱいいるじゃないですか。北満の開拓地へ疎開してきたというんですよ。本土空襲で焼け出された人々がですよ…実に残酷じゃないですか」といった、終戦の年の7月の目撃談だった。

本稿では昭和20年6月7日の日付のある、「北満へ疎開する内地戦災者の群れ」目撃記録を紹介したい。東京大学教授で地理学者の飯塚浩二『飯塚浩二著作集 10 満蒙紀行』（1972）の中の文章である。場所は同じく佳木斯である。

佳木斯駅のプラットフォームで待っているところへ、牡丹江方面からの列車が入ってきた。そこで、図らずも、今思い出しても胸の痛む光景を、目の当たりに目撃するめぐりあわせになった。

列車が停まって大勢の客がぞろぞろ降りてくる。当たり前な話だが、この日、佳木斯駅に降りた客の何割かは当たり前の旅行者ではなかった。私は客観的情勢がここまで煮詰まってしまった段階で、まさかこんな無残な、無責任な措置がとられていようとは想像してみたこともなかったし、誰からも聞かされていなかっただけに、よけいショックが大きかったわけだが、降りても改札口へ急がず、すぐ団体らしいなと分かる一群の人たちは、内地からの移民団であつた。本土空襲の罹災者たちだという。

満拓の腕章を付けた係員数名が付き添っている。一行を羅津で迎えて、そのままこちらへ引率してきたのであろう。総勢100名を超えるぐらいの人数と見受けた。

内地戦災者の群れが終戦1ヶ月、2ヵ月前の時点で、北満州の奥地に送り出された事実は次項でも敷衍するが、それが総勢100名を超える集団であつたらしい。そして驚くべきは、その人たちの姿であつた。飯塚浩二はその集団を“開拓団”ではなく、次のように“難民”とみている。

彼らの内地での、追いつめられた暮らしが思いやられる身なりと荷物。多くは子供連れである。満拓が世話をしている限り、行く先、落ち着く先（落ち行く先？）があることは確かなのだろうが、とうてい入植者といった雰囲気ではない。難民の、しばし身を寄せ合つた姿であり、どこまでも心細げである。目の前に見て今日初めて気づいたのだが、風呂敷包みというのは妙な舞台効果を持つ。移民団の人々の手荷物がたいていは風呂敷包みだけで、旅行の支度とは程遠い感じであることが、この場の違和感を強め、その持ち主たちを、それこそ風呂敷包み片手といった夜逃げのような姿で、こんな異郷の果てにまで連れて来なくても何とかしてあげようはあつたのではなからうか、といった惻隱の情をいよいよ抑えがたいものにするのである。

“満州疎開”した人たちの群れを目の当たりにした飯塚浩二は、「この期に及んでよくもこんな白々しい真似ができたものだ」と、「日本政府側か、満拓か、誰がこのようなお膳立てをしたのか知らないけれども」と、「無残な措置」に憤る。そして続ける。

私がこれが大陸見学の最後のコースだと心得て東満地区を一回りした道中に、たまたま佳木斯駅で、線路一つへだてたプラットフォームに降り立つのをこの目で見た、気の毒な一群の人たちに、どういう運命が待っていたらうか。関東軍敗走の際、この人たちの間から一番多く犠牲者を生じたのではなかったらうか。助かっていればいいがというより、私にはほとんど冥福を祈るという気持ちでしか、あの一群の、名も知らぬ男・女・子供たちの姿を思い出すことができない。内地で戦災に遭い、さらに終戦二月前に公的機関の手で北満に移された人々を、よくよく運の悪い人たちだと言っただけではすまされないはずである。

これらの人たちの最後は、少し記録に残る。次項を見られたい。なお、戦災疎開者の満州疎開は、西満州でも見られていた。安田武・福島寿郎編『記録 自決と玉砕』（1974）に、元興安総省莫力達^{こうあん ぎょりダ}

ワ旗参事官・郡司彦の証言がある。いわく、「日本本土はすでに米国の制空権下におかれ、疎開先農村を持たない東京、大阪の人達は、開拓団となって国境に近い興安総省内に送り込まれてきていた」と。

国においては昭和 20 年 2 月 30 日、閣議で「都市疎開者の就農に関する緊急措置要綱」が決定されていた。その中に「満州国への帰農希望者」に関する内容があり、これら希望者に対しては「一般開拓団への入植、在満報国農場施設の活用等、適切な受け入れ対策を講ずる」と定められていた。当時の東京在住者でこの措置に応じた人たちが相当数いたことになる。

4 “満州疎開”の東京都満州開拓民

各開拓団資料を詳しく見ていくと、次のような記述を見出す。簡単に紹介する。

1 集団第 13 次落葉松（虻牛哨東京郷）開拓団（昭和 18 年、四平市昌図県入植）

昭和 20 年入植の後続開拓団員募集に先遣隊員が帰郷して説明会を開いた。説明会開催日は昭和 20 年 3 月 11 日だった。場所は当時の本郷区春日小学校。記録には、「第 1 回の募集を行ったが、たまたまこの時、空襲で本郷一帯はほとんど消失したにもかかわらず、約 100 世帯が応募したが、そのうちから 40 世帯を選出して引率することになった」とある。

2 集団第 14 次扶余東京（大東）開拓団（昭和 19 年、吉林省扶余県入植）

「昭和 20 年に至り翼賛会の農業報国会等の指導の下に、企業整備による転廃業者、戦災者疎開等を一丸として満州の報国農場に送り、これが母体となって開拓団に移行した」と記録されている。昭和 20 年の報国農場への渡満者は 210 名であったので、この中に相当数の転業者と戦災疎開者が含まれていたものと推定する。

3 集団第 12 次仁義仏立開拓団（昭和 18 年、興安総省西科前旗入植）

仁義仏立開拓団への昭和 20 年に入ってから後続本隊の入植は、5 月から 8 月にかけて毎月 50 名ずつが渡満した。8 月入植の第 8 本隊に関しては、「入植途中終戦となり入団せず」と記録される。都記録、開拓団記録の双方の名簿で、その存在が宙に浮いた人々である可能性が高い。

4 幻の常盤松開拓団（昭和 20 年、東安省密山県入植予定）

東京都は国の「都市疎開者の就農に関する緊急措置要綱」に基づき、東京農業大学湖北報国農場に常盤松開拓団を設置する計画を立てた。常盤松開拓団の入植予定者は 50 名、しかし終戦間際の時期に一緒に渡満した人数は 400 名であった。その人たちが東京空襲罹災者だったと記録される。常盤松開拓団は、開拓団としての発足を見る前に終戦となった開拓団である。

東京農業大学教官に引率された報国農場隊員第三次隊に約 25 名の開拓団入植予定者がともなった。合計 40 名ほどの集団が東京を出発したのは昭和 20 年 6 月 26 日。福井県敦賀港からの出航予定が B29 の敦賀空襲に遭って足止めを食らい、出航したのが 8 月 3 日だった。ソ連軍の満州侵攻のその日、8 月 9 日、牡丹江駅に到着している。8 月 9 日から 12 日までの 4 日間は牡丹江に滞在せざるを得ず、その後の一行は目的地に到着しないまま終戦を迎え、避難行を強いられた。まさに「渡満とな何だったのか…」の苦難を背負った人たちである。

（次ページの新聞記事は 2014 年 2 月 10 日付毎日新聞）

戦前、戦中に約27万人が旧満州(現中国東北部)に農業移民として送り出された。満蒙開拓団は信越、東北地方の農山村の人々の悲劇として知られてきた。だが近年、市民たちが独自の調査で、ほとんど知られていなかった沖縄や東京発の開拓団の実態を掘り起こしている。「誤った国策による庶民の受難を記録し、二度と繰り返さないように」という思いが労作を生み出している。

17年かけ

時流 底流 [市民が発掘 満蒙開拓史]

誤った国策 悲劇と向き合い

拓団2603人の歴史を17年かけてまとめた。主に引き揚げ中などの死者922人、徴兵され戦死した者58人、残留者79人という大変な悲劇だったことが判明した。メンバーの中で年長の比屋根美代子さん(73)浦添市も終戦時4歳で「沖縄戦の記憶がない」という世代だ。調査は、開拓団に嫁ぐために海を渡り、「大陸の花嫁」と呼ばれた女性たちの存在に関心を持ったことがきっかけでスタートした。県庁の基礎資料は沖縄戦で焼失しており、新聞

も、まとめる責任を感じたと話す。沖縄県では行政や学者にも、先行研究はほとんどない。比屋根さんは「沖縄戦の課題が多すぎて、手が回らなかったのでは」。



「東京満蒙開拓団」をまとめた(右から)藤村妙子さん、今井英男さん(故人)、多田鉄男さん
—東京都大田区で12年11月

活動を続行 東京都大田区の市民グループ「東京の満蒙開拓団を知る会」は、東京から出発した1万1111人の全体像を解明した。グループのメンバーは、労働運動を通じて知り合った。武蔵小山商店街(品川区)の約1000人が開拓団になり、600人以上が亡くなったことを知り、2007年から手分けして都公文書館や図書館を回り資料を集めたり、都内の開拓団訓練所跡地を巡ったりして、関係者から聞き取りをした。



高橋健男さん

に送られたことを明らかにした。成果を12年9月、「東京満蒙開拓団」(ゆまに書房)として出版し、満蒙開拓に詳しい直木賞作家、井出孫六さん(82)が「初めて東京の開拓団の全貌が明るみに出た」と高く評価した。昨年6月、共同代表の元会社員、今井英男さんが68歳で急死した。しかし、地方公務員、藤村妙子さん(59)に残るメンバーが調査を続け、データをまとめた全10冊の「東京満蒙農業移民資料」の発行を目指している。新潟県見附市の元中学

校長、高橋健男さん(68)も昨年12月、「渡満とは何だったのか——東京都満蒙開拓民の記録」(ゆまに書房)を出版した。新潟県の開拓団の歴史を調べる中で、都が戦後、元開拓団員からの聞き取り結果をまとめ、新潟県庁に送った資料を発見。独自の調査結果も加え、5年がかりでまとめた。旧植民地からの引き揚げに詳しい加藤聖文(かとうせいぶん)文学研究資料館助教は「開拓団の歴史は当事者が高齢化し、研究者もあまり取り上げなくなってしまう。こうした中、市民が関心を持って調査したこと、あまり知られていない貴重な事実が発掘されている」と話している。【青島顕、写真も】

方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

——「方正友好交流の会」へのお誘い——

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府によって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ4500人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく国際的な友愛精神を、さらに「国際主義」的な精神を超えて人類愛的な精神を広めていこう、と活動しているのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は1993年に設立され、2005年6月に再発足し、日中友好の原点の地ともいえるべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6（社）日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 E-mail : ohruai@jcst.or.jp

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス : <http://www.houmasa.com/>

書籍案内

* 『ハルビン往来』

宮原成太郎＋宮原恵子 写真集

宮原夫妻は「方正の会」会員である。二人は中国語の学習を通じてハルビンとの縁が生まれ、ハルビンを訪れるようになった。900 万の人々が住むハルビンの街。朝市の風景や街角の出会い、松花江沿いで遊ぶ人々、荷物運びの労働者のたくましい顔、中央大街を携帯メールを見ながら歩く若いお嬢さん、トランプ遊びに興じるおばさんたち。そんなハルビンの庶民の息遣いが聞こえてくるような写真集である。

(定価：1700 円＋税、160-0004 東京都新宿区四谷 3-12 沢登ビル 現代写真研究所
発行 電話 03-3359-7611 FAX03-3355-6593)

* 『証言 それぞれの記憶』

満蒙開拓平和記念館発行

満蒙開拓平和記念館に『証言—それぞれの記憶』という展示コーナーがあり、それをまとめた冊子である。13 人の証言が、本人の方言も語り口そのまま書き起こされている。証言者には本誌にも寄稿している寺沢秀文さんの伯母、寺沢テツ子さんや語り部として常に記念館でお話ししている中島多鶴さん、またかつて本誌にも寄稿された可児力一郎さんの証言も入っている。

(定価：500 円、395-0303 長野県下伊那阿智村駒場 711-10 満蒙開拓平和記念館
電話&FAX：0265-43-5580)

* 『大陸の花嫁』(岩波現代文庫)

井筒紀久枝 著

著者は本誌にも寄稿している新谷陽子さんのお母さんである。自分の父親を知らずに育った著者は、「人の愛を求め、人を恋した。それも許されなかった」という。そうして「大陸の花嫁」として生きることを選んだ。自己の満洲体験を後世に伝えることが使命だと思って書かれた書だ。2004 年に岩波現代文庫として発行されたが現在、品切れで岩波書店では今のところ再販の予定はないという。図書館か古本サイトで手に入れてほしい。

(定価：900 円＋税、101-8002 東京都千代田区一ツ橋町 2-5-5 榊岩波書店発行
電話：販売部：03-5210-4111)

『ウクライナに抑留された日本人』

O. ポトィリチャク V. カルポフ
竹内高明著 長勢了治編訳

ウクライナが長年、ロシアやソ連に組み入れられていたため、日本ではなじみはなかったが、いまウクライナ・クリミア問題が浮上して世界的に脚光を浴びている。実はこのウクライナに日本人捕虜たちが収容されていた。日本人が抑留された最西端の地がウクライナなのだ。本書には 5200 人ほどの収容所生活や労働の実態、有刺鉄線の中でのスパイ工作や思想教育などが明らかにされている。ほとんど知られていなかった実情である。

(定価：800 円＋税。162-0805 東京都新宿区矢来町 97 番地 榊東洋書店発行
電話：03-3269-2961 FAX03-3269-2110)



市民団体満蒙開拓学
【阿智】中国黒竜江省方正
県と交流している市民団体
「方正友好交流の会」事務局
・東京の会員ら31人がこの
ほど、阿智村駒場の満蒙（ま
んもう）開拓平和記念館を訪
れた。写真。元開拓団員の中
島多鶴（たづる）さん（88）

泰阜村温田の旧満州（中国
東北部）での体験談を聞いた
り、展示を見たりして、国策
に翻弄（ほんろう）された開拓
団の歩みへの理解を深めた。
同館専務理事の寺沢秀文さ
ん（60）が、開拓団員は長野県
が都道府県別で最多、中でも
飯田下伊那地方から多くの人
が渡ったことを説明。同館で
語り部を務める中島さんは、
旧ソ連軍の侵攻に伴う逃避行
の中で、子どもを連れて行く
ことができず川に流す親を見
たと話し、「悲惨な戦争を繰り
返してはいけない」と訴えた。
展示を見た同会事務局長の
大類善啓（よしひろ）さん
（69）は「これだけの資料を集
めるのは大変だったと思う。
満蒙開拓の歴史を後世に伝え
る上で、同館は」大きな役割
を果たすと感じた」と語った。

■つちの■

編集委員会

中国東北部、遼寧省撫順
の「戦犯管理所」には、終
戦後、シベリアで捕虜とし
て働かされていた約千人の
元日本兵が移送され、戦犯
として収容された。軍事裁
判を受けるためだった。

管理所の職員は、意外に
も元日本兵を人間的に扱っ
た。当時中国は、断罪より、
教育による「人間改造」を
目指していたためだ。

収容者の大半は「起訴免
除」で帰国。起訴された四
十五人も恩赦などで、全員
釈放された。

帰国する際、各自に小さ
な黒い種が渡された。管理
所の中庭に咲いていた「ア
サガオ」の種だった。

「もう二度と武器を持っ
て中国に來ないでくださ

首相官邸にアサガオを

い。日本に帰ったら、きれ
いな花を咲かせてくださ
い」。そんな管理所の職員
の願いがこもっていた。

この話は絵本にもなり、
広く知られるようになった。
た。大阪市福島区に住む野
崎朋子さんは、二〇〇七年
九月に現地を訪ね、「赦し
の花」であるアサガオの種
を三十粒ほどもつてき
た。自宅に数十鉢を並べて
種を増やし、友人にプレゼ
ントしている。遠くに住む
人には郵送している。

種が採れる十月まで、手
入れに追われる。遠出もで
きないが、「使命感みたい
なものです」。

この話を聞いて、日本の
首相官邸の庭にも、この花
を咲かせてほしいと思っ
た。「不戦の誓い」なら、
どこかに参拝するより、幅
広い支持を受けられるに違
いない。
（五味洋治）

長崎大学の重点研究課題プロジェクトが主催した「東アジア共生プロジェクト国際シンポジウム」がこのほど、阿智村コミュニティ館で開かれ、歴史に関連した展示について日本と中国の研究者、関係者が「歴史記憶の共生と研究実践」をテーマに今後のあり方を語った。

プロジェクト主催

者の南誠助^{みなみまこと}教は、母方の祖母が平谷村出身の元中国残留婦人。南さんは中学時代に家族と帰国し、中国残留邦人の研究者になった。

阿智村の満蒙開拓

平和記念館とは開館以前から連絡を取り合っており、シンポジウム前には中国と台湾の研究者らが同館を見学した。

歴史展示のあり方語る

日中の関係者が阿智村で

軍国主義時代のことばかり教えていては日本を嫌いになるばかり」と持論を語った。記念館については「運営している」と方針を説明。「こうした施設が日本にあり、ボランティアで運営されていること、平和を愛する日

記念館専務理事の寺沢秀文さんはシンポジウムで、日中間の問題について「両国とももっと考えないと。日本は近代史の学習に時間をかけるべき。中国は愛国教育だけでなく、日本が戦後ずっと平和憲法を守っていることを伝えなければ。『一番の思いは『過ちを繰り返さない』であり、たとえ国策であつてもおかしいことはおかしい』と説いた。中国側からは黒龍江省の社会科学学院の

研究者ら3人が「日本人残留孤児と中国人養父母の関係」「歴史真実と感情記憶に基づく中日展示実践の協力」などについて報告。日本政治思想史が専門の社会科学学院教授、孫歌さんによる基調講演「感情記憶における日中関係」も聞いた。孫さんは「感情的な歴史記憶を一民族から開放して共有し、生活感覚を改めねば。日中友好は仲良く、一緒に平和をつくるという意味。そのため手法についての相談が必要だ」と述べた。翌日には非公開のワークショップもあった。



講演する孫さん

来館者3万人を達成

満蒙開拓 平和記念館 開館1周年を目前に

阿智村駒場の満蒙開拓平和記念館（河原進館長）は17日、開館1周年（25日）を前に来館者3万人を達成した。3万人目となったのは、岐阜県中津川市から訪れた新婦人会中津川支部のひまわり班（安藤由紀子班長）の一行。証言や記録から開拓団の歴史を振り返り、平和の尊さを感じていた。

新婦人会は平和を求め、全国の女性団体で同班は中津川市西部の40代から80代の女性に参加している。今回は会員の17人が、伊那谷の花見を兼ねた日帰りのツアーで同館を訪れた。

3万人目を記念してオリジナル冊子「証言 それぞれの記憶」や満州入植図、館内の喫

茶コーナーで販売しているジュースセットを贈呈。代表の安藤さんは「1年で3万人の来館があるのはすごい。資料集めが大変だったと思うけど、知るべきものを知ることができ、ことに感謝したい。いただいた資料を今後の平和学習で活用したい」と喜んだ。同館は林野庁や県、

南信州広域連合の助成を受けて建設し、一般社団法人満蒙開拓平和記念館が入館料と寄付金により運営している。昨年4月25日に開館後、地元の団体や学校などをはじめ、北海道、南は沖縄までさまざまな団体が平和学習に訪れている。

来館者は1日平均で約105人。多い時に

は1日で8団体、400人を超える日もあった。冬期間は来館者数が伸び悩んだものの、最終的には当初計画の5000人を6倍も上回る3万人を達成した。

同館の寺沢秀文専務理事は「遠方や開拓団の関係者でない方などの利用が予想以上に多い。戦争を知らない若い人々も来てくれる。戦争の歴史を振り返

り、平和の尊さを学ぶ拠点として定着している」と話していた。

開館時間は午前9時半から午後4時半。休館日は毎週火曜日と第2、4水曜日。問い合わせは同館（電話④5-580）へ。



満蒙開拓平和記念館が3万人達成

満蒙開拓平和記念館 開館 1 年

記憶を

上

次代へ

体験伝える語り部

「こっちの土手にもあっちの土手にも、死ねなかった人がおった。『みんな死んだ』と、泣きながら生き残った人が話してくれた」

17日、阿智村で同郷身障者福祉協会女性部が総会後に開いた講演会。会員約50人がじつと聴いていた。旧ソ連軍参戦の1945（昭和20）年8月9日以降の逃遁行に話が及ぶと、桜井さんの声が震

第2次大戦中を中心に、国策として旧満州（中国東北部）に渡った満蒙開拓の歴史を伝える全国唯一の資料館「満蒙開拓平和記念館」が、下伊那郡阿智村に開館してから25日で1年になる。当初見込みの年間5千人を大きく上回る3万人余りが入館した。語り部として体験を語る元開拓団員、新たに持ち込まれる開拓の資料……。つらい記憶が、未来に生きる歴史として受け継がれようとしている。

* *

下伊那郡阿智村清内路の桜井忠彦さん（84）は遠い記憶をたぐり寄せるように目を閉じ、ゆっくりと話し始めた。



約50人を前に満州の記憶を語る桜井さん（中央）＝17日、阿智村

若い世代との出会い 励み

業にならなくなった。約20戸が開拓団に参加した。「村におっちは生きておれなかった」

桜井さんは46年10月に引き揚げたが、公に体験を語ることはなかった。目にしたものが「あまりにもひどい」からだ。隣の「第八次小古洞郷開拓団」が集団自決したと、逃げる子どもや母親が旧ソ連軍に銃殺されたこと。15歳で目にした記憶が戦後68年余り、胸を締め付けてきた。思い出すと眠れず、寺の住職に相談したり、経を読んだり

し、経の録音を聞いて眠りに就く日もあった。

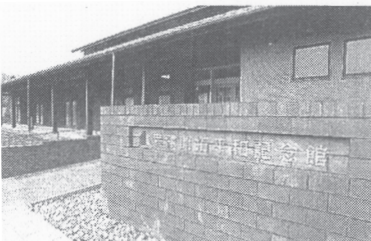
「満蒙開拓のことをお話しただけませんか。昨年夏、阿智村の『子どもの文化を考える会』の女性会員（67）が訪ねてきた。戦争体験の聞き取りを重ねてきた女性は、『思ひ出すとつらい』と固辞する。桜井さんの元に幾度も足を運んで説得した。

考える会とのつながりで今年2月、阿智村中央公民館などが「戦争と平和」をテーマに開いた集会で、桜井さんは初めて思いを人前で語った。

昨年12月の特定秘密保護法成立の経緯に、何も知らされずに国策で満州に渡った経験を重ね、日本の将来が不安になったことも背中を押した。

「胸に鍵を掛けてずっとしまっていた。吐き出してすつとした気がする。私の戦争が、ようやく終わった」

記念館の特色の一つは元開拓団員が語り部として来館者に体験を語ることだ。開館以降の語り部は約10人。桜井さんも26日に初めて講演す



旧満州によく見られた建物を模した満蒙開拓平和記念館

● 満蒙開拓平和記念館 昭和恐慌などを背景に、日本が国策として進めた満蒙開拓の歴史を伝える全国初の施設。2013年4月25日に開館した。飯田日中友好協会（飯田市）などが中心となり、国、県、南信州広域連合の補助金と全国の寄付金で事業費約1億2千万円を確保した。下伊那郡阿智村駒場の用地は村が村有地を無償で貸与した。開館時間は午前9時半～午後4時半、休館日は火曜日と第2、4水曜日、年末年始。入館料は一般500円、小中高生300円。問い合わせは同館（☎0265・43・5580）へ。

「子どもたちから感想文をもらうことがあると励みになる。84歳だけれど頑張れる。」

つらい記憶は耳を傾ける人がいることで次の世代に生きてくる。満蒙開拓平和記念館は、元開拓団員の記憶と次世代が

満蒙開拓平和記念館 開館 1 年

記憶を

次代へ

中

資料 全国各地から

母親たちの記念写真や映像が、壁一面に3分間にわたって映し出されていた。

加藤さんは、同郡山吹村(現高森町)から「水曲柳開拓団」の一員として満州の吉林省舒蘭県水曲柳に渡った元開拓団員だ。この日、目にした満州の風景が当時を思い起こさせた。「人を殺しに行ったようなもんだった。集団自決を苦渋の表情で語る加藤さんに、居合わせた団体客や地元阿智村の阿智第一小学校6年生が耳を傾けた。

「懐かしいなあ」。下伊那郡高森町の加藤宗一さん(92)が、ついで体を支えながら展示の前で足を止めた。

昨年4月25日の記念館開館前、加藤さんは県歌「信濃の国」が書かれた大きな掛け軸を寄贈した。満州で教員をしていた知人から渡されたもので、遠い故郷を思っ歌った記憶がよみがえる一枚だ。初めて記念館に足を運んだこの日、館内を見渡して言った。「立派な物を建ててもらってうれしいな」

記念館の展示資料のほぼ全ては元開拓団員やその家族が寄贈した。これまでに355人に上る。



満蒙開拓平和記念館の書庫は全国から寄贈された資料や書物でいっぱいだ。21日、阿智村

元団員らの思い 呼び集め

体験をつづった自伝、満州から内地に送った手紙、団員募集を呼び掛けるポスター、「布団2枚、かま」と満州への持ち物が書かれた紙、義勇隊員が着ていた衣服やラッパ。青森、石川、京都、福岡など、全国各地から資料が寄せられている。記念館はこれらを整理し、データベース化を進める。

館内に、茶色がかった1着の外装が展示されている。裾の部分に穴が開いていたり、よれていたりする。寄贈主は、父の太郎さんが元開拓団員だった下伊那郡喬木村の市村民江さん(64)だ。

民江さんは太郎さんから、子ども4人を旧ソ連軍の参戦に伴う逃避行の際に亡くしたと聞いて育った。民江さんは引き揚げ後に生まれた一人娘だ。幼いころ、少し熱が出たおなかを壊したりしただけで、太郎さんは民江さんを通して病院に駆け込んだ。母一多さんは水道水をそのまま飲ませることは決してしなかった。満州で生水を飲んで子どもが病気になる経験からだという。

10年ほど前、父の体験を文章に残そうと話していた折、

太郎さんが95歳で亡くなった。断片的に体験を聞いてはいたが、まとまった記録はなかった。

昨春秋、記念館に足を運び事務局長の三沢亜紀さん(47)に尋ねた。「両親が城子溝という開拓団にいたそうなんだが」。三沢さんは、記念館に寄贈された名簿をひもとき、資料を送ってくれた。

「第十一次城子溝農工開拓団の一員として1942(昭和17)年に渡ったことや、満州で死んだきょうだいの名が記されていた。うれしかった。両親の生きた道に「少し近づいた」と思った。

上伊那郡伊那町(現伊那市)出身で横浜市に住む平沢ゆき子さん(82)は昨年、記念館を訪れた。家族で満州に渡り、逃避行の際に両親をハルビンで亡くした。日中国交回復後も引に行けないまま68年が過ぎた。記念館が保管する名簿には、一団員だった両親の名が記されていた。「私ができなかつた供養をしてきたさっている」。気持ちに一区切りがついた気がした。

開館から1年、記念館は寄せられる資料とともに、元開拓団員や家族らが秘めてきた思いも呼び集めている。

満蒙開拓平和記念館 開館 1 年

記憶を

下

次代へ

旧満州（中国東北部）の家屋を再現した展示物の隣に入植の解説文が記されている。

「満蒙開拓とはいえず、実際に開拓した人は少なく、現地の人々にとって開拓団は自分たちの土地を奪う存在であり、満蒙開拓は侵略の加担という側面もありました」

満蒙開拓平和記念館（下伊那郡阿智村）の専務理事、寺沢秀文さん（60）＝下伊那郡松川町＝は昨年秋、見学にやって来た近畿地方の人からこう伝えられた。「私の地元の平和施設ではこれまで（日本側の）加害に言及していない」

館内を進むと、開拓団員の証言記録が続く。下伊那郡上久堅村（現飯田市上久堅）開拓団で入植した小木曾弘司さん（90）＝飯田市駄科＝は「開墾したところに中国人を追っ

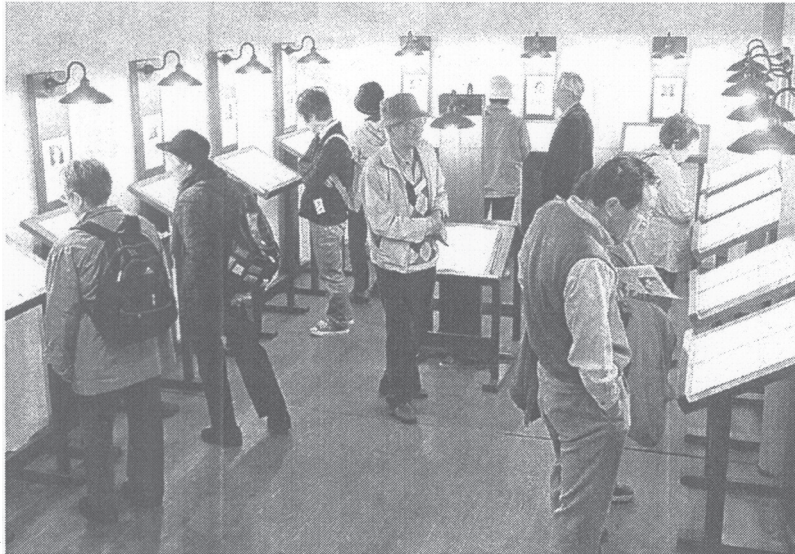
「侵略に加担」の側面

払ってそこに入った。『おまえたち出て行け』って。その後ろ盾には、日本軍がおったんだ」と言葉を寄せた。

1945（昭和20）年8月9日の旧ソ連軍参戦と、同15日の敗戦に伴って開拓団員が犠牲になった被害と同時に、亡くなった父・幸男さんは、

入植は現地の人への「加害」の歴史だったことを体験に基づいて伝えた。

寺沢さんの両親は、満州の吉林省舒蘭県（現舒蘭市）水曲柳に渡った元水曲柳開拓団員だ。2011年に91歳で



元開拓団員らの証言を書き起こした文書を読む来館者たち＝21日、阿智村

「加害」の歴史にも向き合う

先遣隊などが切り開いた地だと聞いて満州に渡ったのに、現地にたどり着くと、入植先は中国人を強制的に立ち退かせた土地だと知った。

3年間のシベリア抑留を経験した幸男さんは、戦後生まれの寺沢さんに「中国の人たちに本当に申し訳ないことをした」と語っていた。被害を

刻むだけではない記念館の設立に向けた活動は、父の言葉が原点にある。

寺沢さんが記念館建設を目指していたころ、県内のある行政関係者から「当時はそれが国民のためになると思っていただから、（開拓団を送り出した）行政を責めることはしないでほしい」と言われた。そんな声を寺沢さんは大きな犠牲を出した満蒙開拓が間違っていたと分かっている今、仕方ないで済ませてはいけない」と受け止めてきた。

◇

大阪府、大阪府が共同出資し、旧日本軍による加害行為の展示で知られる博物館「大阪国際平和センター」（大阪）が政府の見解を踏まえて展示の改装を計画したり、松

江市などで原爆の悲惨さを描いた漫画「はだしのゲン」の閲覧を制限したりする動きが出ている。

戦争の加害と被害の問題をどう伝えるのが、あらためて課題になっており、寺沢さんは「被害の前に加害を学ばなければ、過ちを繰り返す」と話す。

25日、記念館は開館1周年を迎えた。開館後は公的な助成を受けず、少ない運営スタッフとボランティアに支えられている。それでも、戦争をどう捉え、伝えるのか、寺沢さん、同館事務局長の三沢重紀さん（47）ら記念館に関わる人たちが、被害、加害の両面で証言者の言葉に耳を傾け、独立して展示内容を企画できる点は大きな長所だ。

記念館を巡る展示会場の終わりに、一つのメッセージが書かれている。

「この歴史から何を学ぶのか、私たちは問われています。『負の遺産』を『正の遺産』へと置き換えていくこと、その英知が私たちに問われています」

（前野聡美、菅沼勇）

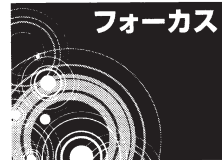
方正友好交流の会が6月に総会

藤野文晤氏が講演

ハルビン郊外にある日本人公墓の存在を通して、国際的な友愛精神を高めようとする活動する方正友好交流の会は、6月8日(日)14時からJR御茶ノ水駅そばの中央大学駿河台記念館510号室(03-3292-3111)で総会と講演会を開く。講演は「わが日中交流を振り返る」というテーマで藤野文晤氏(3面で「フォーカス」8-33338)まで。

最

FOCUS フォーカス



近の日中関係を見て
亀井勝一郎、陳毅副
首相の会談のことを
思い出している。半世紀前の
北京でのことだ。陳毅氏は
「亀井先生は、日本軍国主義
が中国を侵略したことを永久
に忘れないとおっしゃる。私
達は忘れないと考えている。
これは良いことです。逆に私
達が忘れないと言いつつ、日本側
が忘れないと言つことになれ
ば、これは悲劇です」と発言
した。日中韓に横たわる歴史
認識問題の現実である。
最近の日本政府の行動を見

ると、日本はアジアにおける
戦いで加害者だったことを忘
れようとしているのか、と痛
感する。戦後レジームからの
脱却を謳い、一連の政策を矢
継ぎ早に進めている。日本版
NSCの創設、秘密保護法の
制定、武器輸出三原則の廃止、
集団的自衛権の認定等をはじめ、
め、やがては憲法9条の改正
へ進むのではなからうか。一
連の動きに歯止めをかける力
が見えないのは空しい。

多極化する世界を意識

日本が最も大切にしなければ
ならない隣国中国、韓国と
はまともな首脳会談すらでき
ていない。中韓がどんどん発
展するのを見て、何か日本が
追い詰められて逆の被害者意
識に陥ったようにも見える。
政治がそう動けばメディアが

どこへ行くのか日本

藤野 文晤 (公社)日中友好協会参与 藤野中国研究所代表

同調するのは戦前の歴史が証
明し、いつしか国民の意識も
誘導されていくようだ。戦後
色々な経緯があったにせよ、
新しい主権在民の民主憲法が
でき、日本の民主化は確実に
進んできたはずだ。世界に類
のない憲法(人類の究極の目
標である戦争の放棄)と品格
を持つ国として手本にされて
よいはずなのに、サンフラン
シスコ体制以前に逆戻りする
動きが起きている。再び戦前
の世界に戻そうというのか。

世界は多極化に向かい、異
なる価値観は共存しなくては
ならない。もう米国は警察官
ではない。日本は米中両国と
手を携えねばならない。米国
のみと組み、中国包囲網を強
化すればアジアで孤立する。
国連での安保理常任理事国入
りなど問題外となるだろう。

「日中は硝子」だと認識
日中関係は72年の国交正常
化により、様々な懸案を残し
ながらも交流を回復した。し
かし歴史認識問題を心の中
きちんと整理しておかねば、
国民同志の和解は進まない。
日中関係は壊れやすい硝子細
工のような脆弱性をはらんで
いることを認識することが必
要だ。首相の靖国神社参拝の
是非は言うまでもない。

お互いの関係を大切に扱っ
ていけば自然に信頼関係が生
まれる。文化的共通の基盤が
あるからだ。信頼関係ができ
れば、どんな問題も越えるこ
とができる。半世紀前の陳毅
氏の発言はそれを見事に示唆
している。日本が一日も早
く、まっとうな外交の軌道に
戻ることを期待する。

第 18 号会報の編集を終えて

森 一彦

第 18 号会報の原稿に目を通しながら、満蒙開拓平和記念館を訪ねた下伊那の旅を思い出していた。今回の旅での一番の収穫は、寺沢秀文さんのバックグラウンドが理解できたことであるかもしれない。満蒙開拓平和記念館の開館に向けて、なぜあれほどまでに情熱を捧げ、奔走されて来られたのか。ご自宅がある、入植地 増野の急斜面に広がる果樹園、雄大なアルプス連峰の山々、その現場に立ってみて、私は初めて寺沢さんのお気持ちの一端が理解できたような気がした。そして山本慈昭さんや中島多鶴さんの存在。満蒙開拓平和記念館には、魂が宿っている。土地の歴史と記憶とに包まれて、貴重な証言をつづけていくだろう。

東京新聞 2013 年 12 月 27 日（金）朝刊掲載

方正友好交流の会事務局長 大類 善啓 69
（東京都千代田区）
「私たちは二〇〇五年に方正友好交流の会を設立し、年一回『星火方正』という会報を発行している。方正とは中国黒竜江省ハルビン市郊外にある方正県のことである。ここには、旧満州に「開拓民」として入った五千人に近い人々が葬られた中国で唯一の日本人公墓がある。」
最新号の『星火方正』

ミラー

十七号には、丹羽宇一郎を訴えた宮本雄二・元中国大使が公墓を参拝したインタビュー記事掲載した。黒竜江省政府は、中国「愛国青年」の排外主義的な攻撃を危惧し、「安全性が保障で六三年、周恩来首相が許さない」と参拝をやめるよう言った。その言葉を振り切った丹羽さんは参拝された。他にも作家・澤地久枝さんの「満蒙開拓民」への思いや、日中の草の根の交流の大切さを

中国の日本人公墓知って

十七号には、丹羽宇一郎を訴えた宮本雄二・元中国大使の講演記録などを掲載した。黒竜江省政府は、中国「愛国青年」の排外主義的な攻撃を危惧し、「安全性が保障で六三年、周恩来首相が許さない」と参拝をやめるよう言った。その言葉を振り切った丹羽さんは参拝された。他にも作家・澤地久枝さんの「満蒙開拓民」への思いや、日中の草の根の交流の大切さを

表現されているこの公墓を多くの人々に知ってもらい、排外主義的な「愛国主義」がいかにも毛な戦争につながるかという過去の歴史を反省し教訓化したいと私たちは思っている。

戦後六十八年、恥ずかしいが、しげもなくヘイトスピーチがはびこる日本に少しでも、世界の名もなき人々はいわば同じ地球市民であることを自覚できる契機になればいいと思う。

《報告》

ありがとうございました

前号の会報 17 号入稿後、2013 年 12 月 5 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受付けた順に記載しました。2014 年 4 月 30 日現在)

岡庭成巳 飯白栄助 芹澤昇雄 大場武男 窪田かづよ 渡辺一枝 山川禎一 阿久津国秀 小出公司 網代正孝 末広一郎 山田寿子 遠藤勇 武吉次朗 貞平浩 島辰夫 長谷部照夫 紙谷周三郎 菅原三太郎 天竺桂尚穂 伊原忠・泰子 橋本聡 深山信雄 寺本康俊 矢吹晋 藤村光子 木戸富美江 古俣和歌夫 下山田誠子 中島紀子 磯野恭子 園木宏志 山川梅子 篠田欽次 塩野泰彦 渡部道恵 桜井博之 馬場永子 杉田春恵 小畑正子 小倉茂 飯田喜三郎 内山則男 黒岩満喜 平和が好き市川市民の会 滝永登 石原健一 小柳保征・公代 鶴沢弘 由井格 宮田一郎 竹井成範 山内良子 竹田絢子 田澤仁 野田良雄 星野郁夫 吉川健 木村孝 伊藤幸枝 照山真木子 鈴木幸子 竹之内信一 渡辺保雄 吉田敬子 櫻庭ゆみ子 堀江はつ 高嶋正文 藤勝徳 馬場信韶・弘子 小玉正憲 石橋実 小松征夫 金子彰 西沢昭裕 高木凉子 高橋健男 小倉光雄 小崎昭八 小林淨子 重岡幸治 清水孝一 石原政子 新谷陽子 (社)日中協会 金丸千尋 篠原国雄 坂田和子 今村敏子 名取敬和 永宮彌生 中澤道保 今村隆一 柴崎葦津子 宮下春男 河野道威 柳瀬恒範 小柴玲子 磯部荀子 古賀勇一 野津久夫・野津喜美子 塩見雅正 小関光二 河内広光 江原孔江 青柳幸司 山下美子 牧野史敬 広田彰夫 矢野光雄 原田清治 石橋辰巳 富田恵子 南雲英雄 佐藤千栄子 佐藤すみ江 名井佳子 新田充 江藤昌美 及川康年 鎌田アサ 石金楷 長塚淑江 望月信隆 ㈱富士国際旅行社 長谷部郁子 鳥島せい子 柴生田清 上野京

(お詫び：前号、長谷部照夫と記すところ、長谷川と誤記しました)

《編集後記》

満蒙開拓平和記念館を訪問する旅は、全国各地から定員いっぱいの 35 名もの人々が参加。それぞれの体験を踏まえての自己紹介など、実に豊かな交流になった。ご参加された方、また寄稿いただいた方、いろいろとお手数をおかけした寺沢秀文さんに感謝！である。

戦後生まれの歴史を知らない軽薄な政治家が多い昨今、歴史を伝える意味はますます重要になってきた。「侵略の定義は学術的にも国際的にも明確ではない」と公言する男を宰相にいただく悲劇というか喜劇のような時代に我々は生きている。この恐ろしさをどう言ったらいいか。

「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」というのがある。一人で何もできない卑小な輩が、「赤信号、みんなで渡れば怖くない」と同じように本当に醜い姿をさらす。戦後日本がこんな連中を政治家として登場させた責任はいったい誰にあるか。それが我々だ、と正直に自分を問い返して、新たな闘いに出発しようと言いたい。

今号も最後の段階で、森一彦と共に編集作業を行った。ぜひ熟読していただきたい。今回、原稿が間に合わなかった方、次号、待っています。よろしく！ (大類)

《表紙写真撮影：新谷陽子》

『星火方正～療原の火は方正から～』(第 18 号) 2014 年 5 月 15 日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email：ohrui@jcst.or.jp

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-6 日本分譲住宅会館 4F

(社)日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス：http://www.houmasa.com/

